

---

# FORSE

中条 剛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FORSE

### 【ΖΖΠード】

Ζ6817W

### 【作者名】

中条 剛

### 【あらすじ】

戦争は結局、いつの時代も起きる。

しかし、画期的な進化はあった。

それはヒュロルフター。

50cmはあらうかといつ巨大な戦闘兵器。

結局、戦争はいつの時代でも。  
おそれるものだ。

SF。とこつかロボットもの。

ちびちびと更新してこきます。

E ハブリスタとの重複連載です。

一ヶ月に数回、まとめての更新となります。

見やすくしたp.i x i\版を投稿予定です。

結局、いつの時代も戦争は起きる。

かつては機関銃を用いてドンパチ、生身の人間どうしでしている時代があった。

かつては『戦争はやめませう』とかいうお偉いさんの鶴の一聲で戦争をしなくなる時代があった。

でも、結局、戦争はなくならなかつた。

そして『生身の人間で構成された兵隊』に存在意義を見いだせなくなつた。

そんな中、生み出されたもの。

ヒュロルフターム。

資本主義のある国が制作した50m級の戦闘兵器は世界に『戦争の終わり』という希望の光となつた。

しかし、結局、戦争はなくならなかつた。

社会主義のある国が作り上げた対ヒュロルフターム戦闘兵器。

その名も『FORSE』。

それによつて、『人』対『人』の戦争は、『ヒュロルフター』ム 対『FORSE』となつた。では、残された人間は？

「今日も平和だなあ……」

と薄い緑の迷彩服に身を包んだサリードといつ黒髪の少年は、背伸びをしながら、言った。

「……おーい。さほるなよ。サリード」

隣でしゃがんでせつせと草をむしつている男は言った。

金髪で、無精髭を顎に生やしたその男はラッシュキーストライクのタバコでもくわえて、黒いサングラスをかけている方が、よっぽど似合う気がした。

だがしかし、その男はあらうことか（とこいうのはとても失礼だが）サリードと同い年の16歳。未成年である。

少年の名は、グラムといつ。

「わかつたよグラム。でもね。俺は朝の背筋伸ばしをしないと一日が始まらないんだよ」

「よく言つて。そんなことを30分もやつてゐるくせにか？」

グラムは皮肉るようにサリードを笑つた。

「所詮、戦争はヒュロルフターMとFORSEの戦いだ。人間の兵隊など、こらなくなつた。」とか偉そうに言つてたのはどこの誰だ

つたか。

確かに、戦争はなくならなかつた。

それは、だれにだつて解つてゐる。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>ムという存在が。

世界の戦闘のシステムを変えた。

「でも、ヒュロルフター<sup>ム</sup>ムは最初は平和的活用だつたんだぜ？ 核戦争があつて人間が住めなくなつた地上を作り直すための」

「そつなのか？」グラムは今まで抜いた草を綺麗にひとつまとめながら、「でも、実際は違うじゃねえか。ヒュロルフター<sup>ム</sup>ムが平和的活用の為に作られたってんなら、今俺らはこんなところにいないぜ？」

そうだな、と頷いてサリードは遠くを見る。

そこからは綺麗な青空と大きなコンクリートの建物が一、二個が見えるだけだった。

「こしてもさ」

「ん？ どうしたサルド」

「腹減つた」

サリードの言葉を聞いたと同時に一人の腹の音がぐるりと鳴る。

「……どうせコレーションだしなあ。あのくわまよコレーション食つ  
なら雪とか食つてたほうがマシだぜ」

グラムは立ち上がり、腰をぽんぽんと軽く叩きながら、言った。

「やうだよなー。せめて鹿とかいりやな。塩焼きとかうめーんだろ  
うナビ」

「それがこのグラティアのだめなところだよな。グラティアの、しか  
もこのへんは農牧なんてやつちやいねえから鹿が生えてるの  
は野草だらけだよ」

ぶつぶつ言しながら、グラムは自分の服にかけてあつたホルダーから袋を取り出す。

袋を開け、そこからだしたのは白い小さな正方形の形をした何か。

それをグラムは口に入れる。

「うーん。やつぱり口の渴きをなくすには水がいいよなー。こんな唾  
液を出させるために、わざとカラカラのもの食わせるなんてな。そ  
のつま唾液すらもでなくなるんじやねーの?」

「やつとせこつてもやー。やつぱり唾液にも限度があんじやねーの?  
だからそれはあくまでも一時的なやつで、長期間の喉の乾きを癒  
すのは無理とかどうとか、開発した学者が教鞭で言つてたぜ」

サリードは近くにあったスコップを地面に突き立て、言った。

「もうだな。ともかく戻ろうぜ。昼飯がなくなりまつ」

「あのくそまぢいレースヨンでも食わなきゃ力になんねーしな」

そう言って一人は基地に戻った。

ふたりは十分後、その基地にたどり着いた。

基地と言つても、一人の務める基地は移動式の基地でトレーラーの  
よつな、そんな形をしている。

「……ほんとうに、平和だなあ」

「ほつり、サリードはつぶやいた。

「ほんと、お前それしか言つてねーな。まあ、たしかにここが戦場  
とは誰にもわからんけどな」

グラムはさう言つて、一人分のレーションを取り出す。

「おひ、サンキュー」

そつ言つて、サリードはレーションを受け取る。

専用のスプーンを使ってアイスクリームのよつに、レーションをす  
くぐ、一口食べる。

「……ひえり、まよい。ほんとうにねじつは消しゴムなんぢやないか、  
つて思つよ」

「でも、食える消しゴムも開発されてるんだよな？ 大災害とか空  
襲とかあつたときに食料を確保できるよつに、とかで」

「臭い付き済しゴムが出た時点でありえそうな氣もしたけどな。結局ゴムはゴムだからまずいものはまずいんだよ」

そう言いながら、グラムはむらに一口。

「いや、そうだけど。こんなままずいもんばっか食つてたら兵隊の霸氣も下がるんじゃねーの？」

「作った人から見れば『戦いは所詮ヒューロルフタームとFORSEだけ』だから兵隊に関しては一の次なんじゃねーの？ あんま考えたくないけど」

と言つてサリドはレーショーンを口にほおり込んだ。

「さてと。また続きやつか」

「やうだな。つたくいつになつたら終わるんだらうかなか。はやく戦争らしこ」とやりたいぜ」

グラムはそんなことをつぶやきながら、近くにあつたシャベルを持った。

「なにしてるの？」

二人はその声を聞いて、思わず心臓が止まるかと思った。

「……」

恐る恐る一人は振り向く。

そして、ほつと、息をつく。

「……姫がこんなとじみでなにをしていらっしゃるのです？」

「……バカにしてるでしょう？」

そこに居たのは軍服、といつてもサリードたちとはことなる青の軍服だが、を着た少女がそこに居た。長い金髪が風にふわふわと揺れている。

「……暇だったから」「元気だの

「そつかー、たしかに暇だよな。戦争だつてのに、敵からの攻撃0だしなー」

サリードは冷静を保つてしゃべつてこるよつこも見えたが、

実際には至極緊張していた。

なぜか？

なぜなら、彼と話しているその少女こそ、

『ヒュロルフターム』を操るパイロット『ノータ』の一人なのだから。

「……でも、この戦争ももう終わるよ」

「？」

「あれ？ せつき無線で鳴らしてなかつたつけ？ ブリーフィングを行つからサッサとこい。 つてね」

「え？！ まじか！ じゃあおれら作戦を知らずに突入する羽田に……！」

「もう終わつちやつてるから急いで聴きにいかないと。 作戦決行は3時間後だよ？」

「やべえ！ いそがなきや！ ありがと、姫様！」

かすかに敬礼をして、走る一人だつた。

ふたりは上官の部屋に來ていた。上官はびつやうら和風マーティアのよつで、『私は納豆が好きです』とか言つあまりよくわからぬ掛け軸とかがかかつっていた。

「……あれほど、昨日ブリーフィングの時間につけは言つたと思つたんだけど」

その上官は軍服、といふよりかは警察官のよく着る制服のよつな服に身を包み、左手にペンを握つて、何か板のよつなものに書いていた。

「タブレット、ですか？」

「ええ。よくわかつたわね？」

そう言つて、上官は長い銀髪をたくしあげる。

「少佐になるとこりこりと大変でね？ このグラディアの戦争の他にリップガナ諸島のテロリストも制圧しないといけなくてね」

タブレットの脇にあるボタンを押すと、スクリーンになにかが映し出される。

それは、地図。そこに赤や青の点が動いている。

「私がこのタブレットにタッチすると赤のやつが反応する。それを引っ張つたりすれば殲滅したりできるってわけよ。ともかく私は忙しいの。あんたらがその私の忙しさをさらに忙しくしたのは分かっているよな？」

二人は答えない。

「分かつてゐるよな？！」

「い、イエッサー！！」

ふたりは何かに怯えるように、敬礼する。

話があわつて。

「いやあ。いつぴどく毎られた

「だな。 といふかあと3時間だったよな」

サリードとグラムは喋りながら、廊下を歩く。

「えーと、俺はそのまま草刈り続行かー。だいぶ辛いのですが」

「おー。頑張れ頑張れ、俺は冷房がかった部屋で『ヒュロルフター  
ム』の整備だから」

「さうか。おまえそつち系田指してるんだもんな

「ああ。夢はヒュロルフターの設計士だ」

そつ話しながら、サリードとグラムの一人は別れた。

「遅い……」

整備場に着くと出迎えていたのは、ばあさんの罵声だった。

「「あんよ。オレらだつて任務があつて」

「何が任務じゃ。お主は軍隊にも入つてないくせに」

やつ。この少年。サリド＝マイクロショフは、軍の人間ではない。

正式にはヒュロルフトームの設計士を田指すために、ここに研修に来た、よつするに『研修生』なのだ。

「……まったく、今の若者は研修とか、時代が良くなつたのう。わしがなりたての頃は試験一本だつたしのう」

「そもそもばあさんがなるときはヒュロルフトームなんてなかつたじゃないですか」

「ばあさんと呼ぶな。ライミュール＝ガンテ少尉と呼びな

「はいはい。少尉。申し訳ありません」

煙管を吹かしている元気たつぱりなおばあさんは煙管が口の中から出てきそうな勢いで、言つた。そして、それをサリドは軽やかにスルーする。

「さて、無駄話をしている暇もない。お主はむつむつと緊急装置の検査でもしていい」

「へーい、とやる気のないような声をだし、サリードは検査用の階段を上った。

そして、2階から、それを見る。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>。

人間の技術の結晶、とも言われるそれは、堂々とそこに立っていた。

そのヒュロルフター<sup>ム</sup>は、簡単にいえば、人型　もつとも人らしいカタチをとつたものだった。

頭には鶴冠のようなものがついており、胸の当たりは鋭角に出っ張つていて、まるで鎧をつけた西洋の城の騎士にも見えた。

「……これが

「やうじやよ。これが『ヒュロルフター<sup>ム</sup>・ワン』。クーチュじやよ

「これが、ヒュロルフター<sup>ム</sup>……」

「さてさて、急いで整備せんとノータ様が来ちゃうぞよ

「わったた。そうだった。急がなきやーー！」

やつはひしサコジは「シクペラトに向かった。

「……とこつても「シクペラト」の機械ばかりと思つた  
やつでもないんだなー」

「……パイロットであるノータは「」に入つてから密閉され  
た後、酸素を含んだ特殊な液体を「」に入れられる。それで私は  
ちばヒュロルフター・ムとリンクするのよ」

「へえー。やうなのがー……」

やつはひしサコジは「」。

「はつ……ー? もしかして姫つ? !」

「……ちよつと試しに来たんだけど、まだ終わつてなかつたの?」

彼女はため息をついて、つまんなやつはひしサコジは「」。

「あ。す、すまない! いまから急いでやるから……」

やつはひしサコジは「」、彼は緊急装置の整備に取り掛かつた。

「あれ? でも緊急装置ついていつても、「シクペラト」は液体で満た  
されているんだよな? いつたいじつやつて脱出するんだ?」

「……それもわからなこでヒュロルフター・ムの設計十田指すなんて。  
聞いて呆れるよね」

それを聞いてサコジは「」とあるが、本当のことなので反論する

はない。

「ほこほこ。すこませんでした。で？ 天下のノータ様は一体何をするんです？」

「バカにしてるでしょ？」

一息。

「ま、いいわ。私これから試しに運転するからどうして」

ヤツツヽヽヽヽ、彼女はコックピットに座る。

「さてと、やつやと離れたほうがいいんじゃないかしりへ、新米さん。その階段潰しちゃつかもよ？」

「げえええええ……まじかよ……」

その言葉を聞いて、大急ぎでサリードは降りつゝとする。

だが、

「うぐい

「？」

マイク越しに、そんな声が聞こえた。

明らかに、苦しんでいる声。

「だ、大丈夫か！！」

んで、カリドは「シクピットに向かう。」

そこに並んでいたシールドがあり、その半透明なシールドから

彼女の苦しそうな顔を見えた

「なにをしとる。このバカモン！」

いた。 気付くとスタスタとあのおばあさんが階段を登つて、こゝまで来て

「……なんか、急に苦しくなつたらしくて」

「そんなわけあるか。『シクピット』に液体は満たされていゐんじや。他の理由があるに決まつておらん！」

「や、やうだよな……」

「にしてもだ。我々がそこを開けるのは難しい」

「  
^  
?」

おばあさんから返ってきた予想外の返事にサリードは目を丸めた。

「……なにもわかつておらんのか？ そこにあるヒュロルフタームは殆どが鉄板を何枚も重ねて作つてある。だがな、ただひとつだけ

違う

一息。

「その、ゴックピットじゃよ。そこだけはオリハルコンとかこう金属で作ってある」

「ああ。……流した電流によって金属の分子構造を変化させて強度を増やした最強の金属、とせらひですか」

サコは教科書の受け売りのようになだめる。

サリードの言つ通り、オリハルコン とこののはなにも力を加えない状態だと液体なのだが、そこに電流を通して核兵器すらも耐えうる強なものへとなるものだ。

「まあ、要するにこれを力でビビりつかむのは無理じや」

ゴックピットを呪つて、ねばねばとせせせせ言つた。

「じゅあ、ぶつあねねね……」

「荒てるな。若いの。わしが今からある装置を持つてくる。ゴックピットに流れている電流と逆向きの電流を流して、ゴックピットを一時的に流体にする。それなら彼女は助けられるよ」

そう言つて、おばあちゃんおばあさんは呼べぬほどの速さで走つて消えた。

と、こうひとはだ。

彼女はその機械が届くまで、ずっと苦しみの羽田になら。

それは、できれば田を背けていたい、でもなつきとした真実。

(じゅあん………）のままじや、姫様が………）

「方法、ひとつだけ………あるよ」

彼女は精一杯、その言葉を紡いだ。

「………それは？」

サリードが聞く前に、彼女は座席の下にあるボタンを押す。

直後、コックピットは大きく開き、そこから上に勢いよく座席が飛び出た。

しかし、コックピットが開くといつことは満たされていて液体が噴き出ることをも意味していて。

コックピットのせばにいたサリードはもうこれを浴びてしまった。

疲れた表情で、笑いながら彼は一言。

「緊急装置、異常なし………」

「それでなんかさっぱりしてるのでか」

一時間後。ヒューロルフターの清掃と液体の補填、スーシの着替えなどを済ませたサリードは作戦三十分前にしてようつやく外に出た。

セヒでグラムと出合つた、ところわけだ。

「ああ。まあいこりラックスにななつたかな」

「セヒまで楽観的にいられると、逆にひひひて言つた。

グラムは苦笑いをしながら、サンドで言つた。

と同時に。

作戦開始を報せるサイレンが、基地中に鳴り響いた。

「始まつたようだな」

「なに冷静にしてんだよ……。またあの和風マニアの暴力上面になんか言われる……」

セヒまで言つて、グラムの言葉は途絶えた。

不思議に思つて、サリードは横を向くと、

そこにはあの和風マニアの暴力上官とやらが立っていた。

「……ちよ

「誰が、暴力上官、だつて？」

彼女は笑つて言つた。しかし目は笑つていはず、戦争の時のような目であつたが。

「……す、すいません……。リーフガットさん……」

謝つたのはグラムでなくサリド。しかも士官階級ではなく彼女の名前、リーフガット・エンパイアを言つて。

「……まあいいわ。さつさと体育館に向かつて」

彼女は長い銀髪をたくしあげ、言つた。

彼らはそれから逃げるように、走つた。

体育館にはサリドやグラムのような軍服を着た大量の兵士がいた。

しかし、実質はこの人間たちの八割以上は戦わない。

戦争といえばヒュロルフターム。といつほど、ヒュロルフタームが戦い方に浸透していた。

今まで、生身の兵士で機関銃などを用いてドンパチやっていた。

それをヒュロルフター<sup>ム</sup>が変えた。

なんせヒュロルフター<sup>ム</sup>は高さ50m。人間なんてせいぜい1m後半。これだけで違いが全然わかることだらう。

そして、武器も変わった。

今まで『人間に持ちやすく、軽く、頑丈な』武器であったが、

持つのは人間ではなく、ヒュロルフター<sup>ム</sup>に変わったことにより、武器の幅が広がった。

例えば今まで重量などの制約上一チーム一個までしか所有できなかつた移動式コイルガン、これでもステルス戦闘機一機分くらいの重量がある、だったがヒュロルフター<sup>ム</sup>はこれを50個所有して、装備している。それだけで人間とヒュロルフター<sup>ム</sup>の違いが解るだろう。

「だから俺ら兵隊はなんのためにいるんだかなあ……」

グラムはあぐいをしながら小さくつぶやいた。

解散して、サリドとグラムは基地の外に出た。

雪は、降ってはいないものの踏むと靴が沈んで隠れるほど積もっている。

「うーつ、寒い」

今はサリードとグラムはあの軍服の上に迷彩柄のジャンパーを着ている。言わざもがな、防寒対策だ。

かれらの右手には小さな機関銃がある。

しかしヒュロルフター<sup>ム</sup>が来てしまえば役には立たない。シロナガスオオクジラにイワシ<sup>ジ</sup>が立ち向かうようなものだ。

故に、ヒュロルフター<sup>ム</sup>“さえ”倒されると、それは負けを意味する。

なぜなら、

今の人間にヒュロルフター<sup>ム</sup>を倒すすべがないから、だ。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>を倒されると、残された軍隊に待つて<sup>いる</sup>のは、死。

それを恐れるものは逃げるしかない。逃げて。逃げて。逃げて。逃げて、それでもヒュロルフター<sup>ム</sup>が持つ射程5kmの巨大レールガンには敵わないのだが。

だからこそ。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>を倒されると、あとは逃げるしかない。

冬の天氣は変わりやすい。

先程まで快晴だったのに、今や1m先も見えないほど<sup>の</sup>ブリザードとなつていた。

しかし、そんなときにもはつきりと見えた。

緊急装置を使って脱出したノータの姿が。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>を倒された兵隊を待つて<sup>いる</sup>のは、死。

これは、この戦いでも適用される。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>が一歩歩くとに地面は揺れる。

そしてブリザードで前があまり見えないからこそ、恐怖が増大する。

今のところ、見えるのは、影。

ただただ、巨大な、それは、ゆっくりヒュロルフター<sup>ム</sup>を失った兵隊のもとへ近づく。

兵隊の、無線機を持っていた人間が、ボタンを押したり放したりしている。

たぶん、これが『白旗』なのだろう。何度も、何度も、その信号を送る。

そして、ヒュロルフター<sup>ム</sup>は動きを止めた。

しかしそれは白旗に賛成、戦争の完結ではなく。

地面が細かく振動を始める。

危険を察知したときには、もう遅かった。

刹那、そのヒュロルフター<sup>ム</sup>が装備していたコイルガンが兵隊に向かって撃ち放たれた。

「くそつーーーこのままじゃこいつもやられるーーー。」

グラムは双眼鏡でその姿をはっきりと見て、言った。

「でも、あの感じじゃあ、向こうには基地を知つてゐるまいね」

「だから逃げるんだろ?... 急がねーと消し炭になるぞ!...」

グラムが叫んだそのとき。

ポン! と赤い煙が空に放たれた。

「……発煙筒?」

「ノータがやつたのかもな」

「?」

「グラム。兵隊にいるなら知つとけよ。ヒュロルフターームのノータ  
は「いついつ時のための緊急用マニュアルがあるんだ」

「ノータはヒュロルフターームの技術を隅々まで知つてゐるからか」

「そう」サリードは頷いて、「だからヒュロルフターームには自爆装置  
があるし、ノータに関してはどんな事をされようとも機密は話して  
はいけないんだ。ノータには戦争の捕縛兵条約が効かないからね」

「おいおい、それって……」

グラムが言葉を濁した。

「……そういふことだよ」サリードは肩にかけた機関銃のヒモを改めてかけなおし、言った。

「だからこれから姫様の救出作戦を行つんだけど君も来ないかい？」

「救出……つたつてどうするんだ？」聞違えたら俺らも捕まつて捕虜だけじますまねーぞ」

「それは解つてゐよ。だからこれを使うのさ」

サリードの手に握られていたのは信管のさかつた何個かの手榴弾。

「確かにこりゃあダイナマイトを何倍にも凝縮したやつだから普通の戦車とかならそれなりのダメージが与えられる。けどな、敵はヒュロルフター・ムだぜ？ 主砲のひとつとも傷がつかないと思つけどな」

「いいんだよ。それで」

グラムの問に、サリードは笑つて答えた。

サリードたちは軍用のリュックにありつたけの手榴弾とレーションをいくつか入れて、戦場にむかつた。

「……死ぬ準備は大丈夫か？」

「ああ。死なないように頑張るさ」

「じゃあ、どこに行く？」

「とりあえず煙が出た場所。ヒュロルフターもそっちに向かってるだろ？」

「そうだな」

サリードとグラムは同時に言つた。

発煙筒が焚かれた場所。

それは森の奥深く。

ノータが入つていた緊急脱出装置が落ちてきたせいで、木はどころどころで倒れていた。

そこに彼女　ノータはいた。

彼女は小さい頃から才能があった。

彼女は小さい頃から将来が約束されていた。

ヒューロルフタームのパイロット、ノータに選ばれる。それは人類から選ばれし『新たなる人間』と呼ばれるべき、こと。大体は作った時に金銭を寄付したスポンサーの子供がなつたりすることだ。

しかし彼女はその高い才能故に「ネなどもなく、一般人からいこまでやつてきた。

それが、彼女にとってどれほどのお嬪か。

それが、今の彼女自身を作った、と言つてもそれほどおかしくはない。

要は、それほどのことなのだ。

「行かなきや……」

彼女は歩き出した。

それはこの戦争のためじゃない。

自分のために。

「『戦闘敗北の際のマニアカル』は果たした……。あとは逃げるだけよ……」

彼女は歩く。その度に右足が疼く。どうやら敵戦をしてしまったようだ。

「へへ……

彼女はその度に足を引きちぎられたような感覚に襲われる。

「耐えろ……。私の足……」

彼女が息を荒げてつぶやいた、

そのときだった。

銃声が、森に響いた。

「まさか、もう敵軍が……」

しかし、銃声は一発では留まらなかつた。

ターン！… ターン！… と、まるで逃げる獲物を追い詰めるつ  
な、そんな撃ち方だつた。

「だれだかわからぬけど。感謝するわ

彼女はその銃声のした方に敬礼をし、また右足を引き摺りながら歩  
き出した。

時は少し遡る。

サリードとグラムは雪原をただひたすらと歩いていた。

「おい……！」このままじゃ雪に体力を消耗されるだけだぞ……！  
なんか方法はないのか？！」

「え？ あるよ」

サリドが足をあげ、そこを指差す。

よく見るとサリドの靴の裏に何かついている。

## 「使い古しの置？」

「そ。あの和風マニアの上官は陽射しで畳が焼けるのがいやだから月に一回ペースで畳替えするんだよね。それで使われなくなつた畳を靴につけて接地面を広げて、足が雪に沈むのを防いだ、つてわけ」

サリジヌ、そつぱうでせたがわす。

「てかそういうのあるなら先に言えよ……」

「うん？」君の鞄に入ってる筈だよ。それに一回言つたはずだし」

「…… どうだつたか？」

「物覚え悪いなあ。グラムは、姫様を助けに行く、って言ったとき  
にそり言つたじやないか」

「ま、いいや。とりあえす俺も装着するから待つて」

言つて、グラムはリュックを開けた。

「よし。これでバツチリだ」

グラムはまだ堅い新しい靴を履いているかのよひ、爪先を地面で叩く。

「……やっぱ、寒い」

「時間的には正午……一番陽射しが当たつてる時間なんだけじね?  
やっぱ冬だからかなあ。陽射しも心もとない気がするね」

サリードは、涼しげな顔で、実際は涼しさを通り越して寒いのだが、言つた。

「これでほんとここ二ヶ月かよ……。環境破壊にも限度があるだろ」

「たしか、グラティアは環境開発技術で有名なんだっけ? だからこのあたりは実験地帯で気候が変化しやすこらしこれど」

「変化しそぎじゃ、ボケ!— どうしてサリードはそこまで冷静でいられんだよ?—」

サリードは手に持つていた携帯端末をグラムに見せて、

「事前資料とかちゃんと見ときなよ。そういうのが勝利の糸口になつたりするんだし」

「……そうだな」

グラムはその直後、サリードにぶつかった。

「どうした？」

「あれ、見てみろよ」

サリードに従い、グラムはその方を見た。

そこにいたのは、兵士。グラムたちと同じ迷彩服に身を包み、手にはアサルトライフル。

「……何人いる？」

「解らない。隠れている、といつ可能性も考慮しなきゃいけないし……。もしそれがないとするなら3人かな」

「……姫様は捕まつたのか？」

サリードは悴んだ手を皿らの息で暖めながら、「さあ、どうだろ？でもあの感じからするに奴らも緊急装置の落下ポイントはわかつてたみたいだね」

「向こうはアサルトライフル三挺。に対してこっちは機関銃、しかも旧型の17-15年製が一挺に手榴弾とプラスチック爆弾が幾つか……」

「どうする？」「グラムの問いにサリードは笑いながら、「行くつきたないでしょ。俺らの目的は姫様を救うことだ」

刹那、彼らは敵陣に飛び込んだ。

そのじる、和風マニアの暴力上官」とコーフガット・エンパイアはブリザードの中を、生き残った兵士たちとともに歩いていた。

「弱まるのじるかますます酷くなるばかりね……」

リーフガットは、つぶやくよつて言った。

「あの問題児たちも行方を眩ますし……、問題は山積みね……」

そんなどき、彼女の無線機に通信が入った。

相手はその“問題児”。サリド＝マイクロショフからだった。

「サリド＝マイクロショフ。そこで何をしているの？ といつか今  
はどう？」

あくまでも怒りは消し去り、冷静に質問するリーフガット。

それに対してもサリドは、

「俺らは今クラーク雪原の森に来てます！ そこであつた敵兵と銃  
撃戦中です！」

タタタタタン！…と会話の合間に会話中に聞こえてくる。おそらくそれが敵の銃声と味方 嘴ちサリドたちの銃声なのだろう。

「サリード。作戦は失敗したのだ。ヒュロルフタームも壊され、グラディア軍に立ち向かえるものはない。急いで戻つてこい。本国に戻れば『クーチュ』の予備がある。それを用いてまた進撃すればいい」

「でもその間に敵も回復しますよね？ そしてまたやられた堂々巡りじゃないですか？」

上官の事実上の“退却命令”にサリードは返した。

「……堂々巡り。たしかにそつかもしれない」

一息。

「ならばお前ヒュロルフタームが倒せる術があるとでも？ お前らもヒュロルフタームの邊さは解つていてるだろ？」

「解つてこまか」サリードははつきりとした口調で、「解つています。解つているからこそ戦いに行くんです。それに……」

「それには？」

リーフガットの言葉にサリードははつきりと答えた。

「勝機ない、あつまつ」

サリードはリーフガットとの通信を切り、指でオッケーのサインを作  
る。

それを見てグラムは、「おいおいおこおこ。まじでの暴力上官、  
そんなの許可したのか?!」

「うん。許可、といつか反論出来ないよつにしといた」

「なんなんだお前、詐欺師の方が向いてるんじゃねえか?」

「ま、そりがもね

……サリードたちの周辺には何もなかった。

最初から、何もなかつた。

「つーか、さすがの暴力上官も戦闘中に通信することはない、って  
思うんじゃねーのか?」

「そこは一種の賭け、つてやつだよ」

サリードとグラムは話ながら森の中を進む。

「こしてもどうすつかなー。ヒュロルフタームの攻略法

「なつ？！　まだ決めてなかつたのかーー！」

「いや、決まつてゐるんだけど、それじゃあなんか決定打に欠ける気がするんだよねえ……」

「どひかるんだよ？　俺に話してみる」

グラムが囁つて、サリードはグラムの耳元で囁いた。

「……つてやつなんだか、どひかな」

「悪くはないけどそこまで誘き寄せるのが難しいな。失敗したらとんでもねーことになるけど」

「まあ、失敗したら仲良くあの世行き。とつあえず敵のヒコロルフタームを探そつ」

「お前とあの世行きとか死んでもやだけどな」

サリードとグラムはもう話ながりて森の奥へ進んだ。

ズシィイン、と地面を搖らすよひな音がサリードの耳に届いたのは、そのときだつた。

「どひかるのよひだな」

「ああ。じゃあ、グラム。お前が困な

「はへー。ナーナリード、お前じゃないのかよーー。」

「だって、この作戦の発案者は俺だ。俺にできる時間で考へてある。ということはお前が囮になるほかないだろ？」

「……」グラムは舌打ちして、「解ったよ。じゃあ俺は相手のヒュロルフターをあの場所に連れていきやあいいんだな？」

「ああ。よろしく頼むよ」

そう言つて、二人は別れた。

成功したら前代未聞となるであろう、『人間がヒュロルフターを倒す』作戦のため。

サリードはグラムと別れ、雪山を登っていた。

雪道を歩く、ところのなとでも体力を消費する。

「……疲れる……」たかが研修であつて、いた学生には碌くではないことだ。

「でも、やる気をやられる……」

サリードは歯を食いしばつて進む。

「グラムはまくやつてんのかなあ。あつちで失敗したとか言つたらキレるだ」

そのころ、グラムはどこかで手にいれたオフロードカーを運転していた。

彼は16歳　さしあたつて運転免許をとることが出来ない年齢のわけだが。

近年、軍隊全体の若年化が進み、軍用免許に限つては16歳から取得できることが許されている。

「といつてもこんな最新型運転したことねえ……」

ガクン、と車体が上下に揺れる。おおよそ崖か砂利道に突入したの

だろ？。

後ろから追つてくるのは、最新鋭の大型戦闘兵器・ヒュロルフター  
ム。

では、なかつた。

「なんだよ、あれ！！ 初耳だぞ！！ 社会主義の国にも戦闘兵器  
がいるだなんて！！」

「グラム・リオールからサリド・マイクロショフへ！」

グラムは即座に無線機をとり、周波数を合わせ、叫んだ。

『なんだ。グラムか？ 今逃げ回つてゐる最中じや……』

「いいからよく聞け！！ 僕らが戦つていたのはヒュロルフター  
ムじゃない！！ それにうまく似せた人形だ！」

『……なんだと？！』

たすがのサリドもその事実には驚いたようだ。

「嘘じやねえ！！ あれはダニーだ！！ よく考えれば社会主義国  
を名乗るグランド・ティアに資本主義国の象徴であるヒュロルフター・ムが  
あるわけないんだ！」

しばらく、サリドからの返事はなかつた。考へているのか、驚いて  
何も話せないのか。

それに関係なくグラムは続ける。

「いいか。ひとまずあの戦闘兵器にヒュロルフターMほゞの装甲があるとは思えねえ！－」ここにある武器でなんとかやってみながら、あの場所に誘き寄せる…。さつきのは最悪な意味、といふことでもいいな！」

『わかった。死ぬなよ。グラム』

「お前もな。サリード」

そう言つて一人は通信を切つた。

サリードは通信が切れてからまた雪原を歩き出した。

といつても今は切り立つた崖を登つてゐる。

「なんであつたつて……、登山道がないんだよ……」

サリードはまつり咳く。よく考えれば当たり前のことだがこの周辺は環境開発技術の実験地帯である。

よつて逐次変化する環境により植物は破壊され、残るのは荒地と一部に眠る悪環境に強い植物のみ。

「まあ、当たり前か……」

サリードはさう言いながら崖を登りきつた。

そこは、山の、といつよつは小高い丘の、頂上。ここから見える風景はすべてが白い。

彼は目でグラムを追う。

やはり、簡単に見つかった。

「あれだな……。最新型のオフロードじやん。よくあんなの戦場に落ちてたな」

サリードは双眼鏡を取り出し、そのオフロードが走る方角を見た。

「あれが……『敵のヒュロルフターーム』か。……グラムの言つ通りあれは違う……」

サリードは踵を返し、「さて、俺もあれが定位置にくる前に準備しなきやな」

笑って、言った。

通信が切れてから、グラム。

「なんだよなんだよー！この車軍用じやないのかよーー！」

グラムは運転していて横目で車内の装備を見て、愕然とした。

軍用のオフロードカーで迷彩柄であつたのに中にあつたのはカメラ、マイク、フィルム……

「……これ、報道機関の車か。ややこしい装備しやがつて」

グラムは唾を吐くよつて呟いた。

しかし、そんなことはもう関係ない。今更この車を捨てて逃げるだなんて無意味かつ無謀だ。

「とつあえずあるのは護身用のライフルと、手榴弾……、しかも『レイリー・パー・ポレーショーン』製じゃないのかよ……。どんだけ弱小なんだ、このパバラッチは」

レイリー・パー・ポレーショーン。

世界一の軍事企業で『資本主義国』の軍はすべてその会社の武器を用いている。

「……まさか、社会主義国のパバラッチか？ 資本主義国のパバラッチはみんなレイリー御用達の筈だしな。ああ、めんじくせー」

グラムはおもむちやに飽きた子供のような表情で、呟いた。

「とつあえず……、反抗しちゃますかね」

そつとつてグラムは手榴弾の信管を抜き、後ろから追つてくるパー・レムに投げつけた。

「ドォオオオオン！！ と耳をハンマーで叩かれたよつた衝撃がグラムを襲ひ。

「……やつぱゼロ距離からの手榴弾は自殺行為だなー。」

爆発の衝撃でグラムの両耳が耳鳴りを起してしまった。

「……………」

不意に、車のバランスが取れなくなる。

人間は耳にある二半規管といつ半円状の三つの管でからだの平衡をとっている。

それが衝撃を負い、一時的に使えなくなつたとしたら?

「うおおおおおおーー!」

グラムは叫びながらがむしゃらにハンドルを握り、左やら右やら回す。

バランスを取り戻す作戦は見事に失敗し、グラムの運転した車は樹に激突した。

「…………畜生…………まさかこんなところだ……」

グラムは激突し、見るも無惨な姿と化した『報道機関』の車から抜けた。

「…………つなりや、足で逃げるしかねえな」

言つて、グラムは自身の装備していたアサルトライフルを構える。

「避ける……グラム……飲み込まれるぞ……」

そのとおり、サリードの声が雪原に響いた。

その声を聞いてグラムは咄嗟に走る。

ゴーレムもグラムを追おつしたが

刹那、ゴーレムを覆つよひに、雪崩がやつてきた。

「ゴゴゴゴゴ……」とまるで戦車のキャタピラーの音のような轟音で、雪が、その雪によつて倒れた樹が、ゴーレムとグラムがいる谷に流れ込む。

「うおおおおおおおお……」

叫びながら、グラムは雪崩に飲み込まれないよつて走る。

ゴーレムはピギヤギギゴゴガガ……とまるで何かの鳴き声を最初は発していたのだが、暫くして、雪に埋もれたのか、その声は聞こえなくなつた。

雪崩が收まり。

「助かった……。あれがなくちゃ今頃あの『カブツ』の餌食だつたぜ」

グラムは腰に提げていたウエストポーチから袋を取り出し、そこから“唾液で喉を潤すための乾いたもの”を取り出し、一粒口に入れた。

「まあ、成功した方かな？ にしてもほんとにヒュロルフタームじやないなんてね」

サリドは雪崩の残骸からなにかを取り出す。

「なにそれ？」

「ゴーレムとやら、見た感じ『生物』っぽいんだよね。とりあえず採集しようと」

「大丈夫かよ。もしさまた起きたりしたら」

「大丈夫、大丈夫。……さて、これで一つ目の目標は達成だね」

サリドの言葉にグラムはうなずく。

そして、サリドは言った。

「姫様を、救いに行くよ。何も武器を持たない弱腰ナイトの一人でね」

彼女は閉じ込められていた。

強度は世界最強とまでいわれる青い服は、といひどいろが破れていって、そのといひどいろから血が滲み出していた。

彼女は、資本主義国の列強『資本四国』の中にあるレイザリー王国の人間だ。

その国で、最強と呼ばれた存在。

国を、まもる存在。

彼女は、ヒュロルフターのパイロット、ノータだった。

そのころサリードとグラム。

「畜生。ここで姫様の生体反応が切れてる。ここで捕まつちましたのか？」

「そうかも。だつて見てみるよ」

サリードが指差した方向には、なにもなかつた。

「……なにもねーぞ？」

「ちやんと見なよ。雪にあんなに変な感じに埋もれるとかおかし

いだろーよ

「……だな」

グラムは納得した。

戦争はヒュロルフターミームの戦いである。

故に狙われるのはヒュロルフターミームと、その操縦士、そしてそれを整備する機材や替えのパーツなど、だ。

だから、機材は隠す必要がある。

「だからってあんなあからわまに隠すとはな……。よくバレなかつたな……」

サリードは笑いながら、「今まで機材に直接攻撃がこないからじやない? この国がヒュロルフターミーム一機しか持つてなくてよかつたよ

「しかも紛い物だけどな」

サリードの言葉にグラムは続けた。

サリードとグラムはその不自然に盛り上がつた雪を払つた。

すると、

「やつぱりな。俺の言つた通りだ

その下には銀色の金属が見えた。

「しかしだな、サリード」

「なんだ？ グラム」

「今敵の本拠地を発見した。これはいいことだが」グラムは顔をしかめ、「実際入口はどこにある？ またこのだだつ広い空間のどこかに埋もれてるとするなら探しには骨が折れるぜ」

「簡単じゃん。そんなの」サリードの答えは意外にもあっせつしたものだった。

「別にだだつ広い雪の中を風漬しに探さなくていいんだよ。どいつも考えたつて入口は雪に一番近いところかなにか物体、しかも自然の、があるといいんだよ」

「……なんでそつだつて言えるんだよ」

「グラム。考えてみるよ。今や電気通信がすべて手玉にとれる戦場で無線なんか使つてみる？ 虚偽の事実を流されて自軍が混乱させられちまつ」

「つまつ……、どいつもことだよ？」

「お前はほんとに閃きが鈍いな。それでも兵隊か？」

「……所詮俺は『貴族』で父親が政治家の七光りですよーだ」

「ヴァーリヤー上院議員だつだけか。ヒュロルフタームプロジェクトを推進する一人だつたな」

「ああ、そうだよ。『クリーンな戦争』を心がけていたらしいが、最近は結果主義で結果を得られない兵は即辞めさせられる。嫌つてるやつも相当いるんだろうな」

「ヒュロルフタームが中心となつた戦争でどう活躍すりやいいんだろ？」「サリードは手元にあるアサルトライフルを眺めながら、「本題に戻すか。つまりわたくしの理由から無線は無理だ。即ち有線にする必要がある」

「しかしそれじゃあ断線とかさせられて閉じ込められるんじや？それにチャンネルを逐次変えるサイン無線波なら大丈夫だと思つんだが」

「サイン無線波はコストがかかるし資本主義国内にしか流通しない技術だからそれは有り得ないよ」

サリードはアサルトライフルを構え、言った。

「つまり、このあたりの雑木林にスイッチがあつて、そこから入れる。……『建物は下から入る』という常識を覆してはいるよね」

「おまえそんなこと言つたら地下室は常識の範囲外なのかよ？」

グラムはサリードの言葉に苦悶を嘗める。

「……そんな」とゆり、やつれと行ひ。『地下帝国への入口』を探しに」

間違えた恥ずかしさを無くすためか、一瞬物事について深く考え、  
そして言った。

『地下帝国への入口』といつのは意外にも簡単に発見された。

雑木林の中に一本だけ、違う樹が生えていたからだ。

「……バレバレにもほどがある。罷か、それともただのバカか」

「罷でもバカでも入るしかないよ」

サリドはそう言い、スイッチを押す。

刹那。

「ガガガガガ……」と地面が低く唸りを上げる。

そしてそこからなにかが競り上がりをしてくれる。

その形は、いわば円柱。

「おーおー、マジかよ……」

グラムが驚きながらも、呟く。

「ほんとうだよ」サリドは競り上がる円柱を見上げながら、「きっ  
とこれが入口だ」

そのころ、どこかの牢屋。

といじゅうじゅうが切り裂かれボロボロになつた軍服を着た少女は、声も出さず泣いていた。

心が、折れかけていた。

プライドが碎かれかけていた。

彼女の、『ヒュロルフター』のパイロット、ノータとしての。平民からここまで登り詰めた、という彼女のプライドや霸氣はもはや消えかけていた。

風前の灯火。

彼女の状態は、そんな感じだった。

「あれ？　じーじ、どこだろ？？」

彼女の聞いた声は一瞬、幻のようにも感じられた。

しかし、それはすぐに覆された。

「サリード、てめえ、迷いやがつたな！　畜生……。じーじはこつたい

「どうだ？」

「見た目から牢屋とか、そんな感じかな？ 少なくとも有益なものはなさそうだね。はやく姫様を探しに行こうよ。グラム」

名前の知らない、二人組。

この声は聞いたことがある。彼女は確信した。

作戦前に出会った兵士。

なぜ彼らはここにきたのか？

そのとき、サリードと呼ばれた少年から言われた目的。

『姫様を探しに行こう』

彼女自身が軍内で姫、と呼ばれているのは彼女自身もわかっていた。ノータに特別な意味を持たせる、兵士に兵士とノータの違いを見せる、ための“あだ名”という名の敬称”。

他のノータは『蟻蜂の騎士』とか『火薬娘』とか『闇の袂』とか、なんだかかっこいい名前をつけられているのに。

国の定めか、単純な『姫』だけ。

姫、と言つても国を指揮したり、王様の隣に座つたり、豪勢な城にいるわけでもない。

彼女は指揮される立場で、座るべき場所はヒューロルフタームのロッカピットで、彼女にとつての城がヒューロルフターム・クーチェなのだ。

「おーーー もしかして……」

兵士の声が、姫様の前で響いた。

「えっ」姫様は声をだした。

つもりだつたが聞こえなかつたのか、兵士は耳をたてる。

「グラム、どうしたんだ？」

「サリード、姫様が見つかった

「えっ」

どうやら先ほどの兵士たちだつたのか、と姫様は安堵する。

「立てるか？」

「グラム、それより足枷手枷を外そつ」

「おつと、そつだな。針金とかあるか？」

「あつたら簡単なんだけどね。生憎そんなのはないよ」

「へへ、上へなつたら……。姫様、動くなよ」

グラムはホルダーから小型の銃を取り出し、それを彼女の両腕と両足につけられている枷に向かって撃つた。

サイレンサーをつけていたのか、音がその牢屋に響くことはなかつた。

総ての枷が破壊され、自由の身となつた彼女。まずは手足をひやんと動くか確認するように動かした。

気づいたら彼女は泣いていた。

なぜだかは解らない。

ただ、無意識に、彼女は涙を流していた。

「お、おい？ 大丈夫……か？」

グラム、と呼ばれたサングラスをかけてラッキーストライクを吸つているのが似合ひそうな青年は尋ねた。

「どうして、ここまで来てくれたの？」

「？」

「何を言つてゐるんだ？」

今度はサリードと呼ばれた年相応に見えない幼い顔の青年が答える。

彼はアサルトライフルのAK47を肩にかけ、「困ってる人間を救つちゃ悪いのか?」

「……いや、別に

姫様はサリードの予想外の発言に何も返すことができなかつた。

「じゃあ、脱出するぞ……、って姫様怪我してんじゃないか。こんなところだと破傷風にかかるしちまつ。とりあえずここを脱出しよう」「ひょじて

グラムは姫様の怪我をした右足を見て、言つた。

「……今は、救護室。

今は姫様の怪我を治療しに危険を省みず『』までやつてきた。

「これで大丈夫かな」

サワードは包帯の巻かれた姫様の右足を見て、言った。

「……ありがとうございます」

「……こいつのことよ。とつあえずさつさと脱出してよしひぜ。援軍が襲つてくるかもしだねえ」

「グラムの言つ通りだ。でもヒュロルフター・ムはさつさも言つたけどひとつしかない。それも紛い物のね」

「……あれが偽物なの？ わたしが戦つた感じからしてあれは『第2世代』のヒュロルフター・ム並みに強かつたけど？」

姫様は続ける。

「それにあれが偽物とは有り得ない。ヒュロルフター・ムはヒュロルフター・ムでしか倒せない。その原則をやぶることになる。それを『社会主義国』が出来るとは思わないけど？」

「それはそうなんだよな……」

サリードは姫様の言葉に答える。

「セシが問題なんだよな」

サリードは続ける。

「まあ、ひとまずこれも手にいれだし。十分頑張ったんじゃないかな」

そう言つてサリードは透明のカプセルを取り出す。

「ああ。セシきの戦闘兵器の肉片ね」

グラムは素っ気なく答える。

「肉片?」

しかし、それに姫様が食いついた。

「ちょっと待つて。なぜそれを先に言わないの? それじゃあヒュロルフターの類いなわけないじゃない」

「黙つてたわけじゃない」

「……とつあえず、本国に帰ろつ。もつ俺は疲れたよ」

グラムのその言葉を聞いて、サリードたゞまひつそりと救護室から外に出た。



「」は資本主義国の列強、『資本四国』の「」のひとつ、レイザリ一王國。

「」の国は“王”国であるものの、実質的な支配は4人の実力者によつて形成される『四天王』と呼ばれる組織が行つていた。

飾りだけの王、とはなんとも心細いものだらうか。

家具や柱や壁の至るところに漆や金や銀が貼つてあつた。

しかし唯一天井の着いたベッドに犬のぬいぐるみを抱き抱えている少女が、何故かそれに浮いて見えた。

彼女は「」の部屋の持ち主なのに。

彼女は「」の国を支配していたのに。

彼女は「」の国の“王”と呼ばれる存在であつた。

時折、苦しそうな表情を見せ、頻りに下腹部からそのなだらかな胸のあたりまでをさする。

「……う……あつ……」

なにか吐き出しあつた感情。それは彼女はおろか誰にも止めないと  
はできない。

「王様」

扉の向こうから、深い低い声が聞こえたのはそのときだった。

王と呼ばれた少女はその声を聞いてすぐに表情を明るくし、けつし  
てそれが悟られないようにした。

「入れ

少女が出した声は先ほどとのそれとは違い、深く低いものだった。

「失礼いたします」

そこに入ってきたのは茶がかつた肌に白い顎鬚を蓄えた紅い眼の人  
間だった。

「……ヴァリヤー・リオールか。どうした?」

「……今回の戦争の功労を労うための祭に出ていただきたいのです  
よ

女王は軽く咳き込みながら、「わかった。いつの間にどう?」

ヴァリヤーは手帳を見ながら、「ええと、今日の17時に軍飛行機  
が空港に降り立つて凱旋したあとなので……20時からですかね」

「それはまた急だな」

「なにしろその彼らはすぐに別の戦争に行かねばなりませんから」「彼らも忙しいな。早くこの戦争が終ればよいのだが、……」

「ええ。その通りでござります」

ヴァリヤーは恭しく笑いながら答えた。

凱旋パレードを終え、宴の会場にやつてきたサリードとグラム。

「あんたたちは知らないだろ? けど、宴の最初に表彰があるからね。勲章ものだから盛大だよ」

上司であるリーフガットはタブレットを弄りながら言った。

「へえ、それはすごいですね」

「なに余所者風を吹かせてこる。表彰されるのはサリードとグラム……あんたらだよ?」

会話の後。

「すげえなあ。俺ら」

「え? なんで?」

「だつて考えてみろよ。この戦争で勲章だぜ? しかも紛い物とは

「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」

「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」

「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」

「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」

「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」

「なんだいその知ってる素振りは

「は言える」

「俺も一応『貴族』の端くれ。小さい頃から『王族と仲良くしてお  
くよつに』と言わせてな。王族のことは結構学んでるつもりだぜ。  
たしかその名前は……」

そのとき、グラムの言葉を遮るよつて角笛の音が響く。

「おひ、始まるみたいだな。急いでいくぞ」

「だな」

二人は小さく頷き、舞台に上がった。

舞台は四角く作られていて、そこに四つほど席があり、そこに軍服  
を着た人間がそれぞれ座っていた。肩につけられた星の数が、それ

を物語つていた。

「グラム……。おれ、いつこいつのは緊張するんだよね……」

「これで緊張しないやつはいねえよ。当たり前のことだぜ……」

両者が聞こえるか聞こえないか位の声で、一人は話をする。

「では、これから勲章授与を行いたいと思います」

優しい、白髪を蓄えた軍服を着た老人は、その口から嗄れた声を出した。

「グラム・リオールにサリード・マイクロシヨフ。両氏はヒューロルフトームをなんと素手で倒したと言つのですから、驚きです」

次の発言に、

ヒューロルフトームのこと学ぶため、学校に戻らうとした学生と、

軍をやめ、平穏無事な生活を送らうとした貴族の、

『幻想』は打ち碎かれた。

「是非とも、その力を、次の戦場で使っていただきたい！ 両氏の末永い健康を願い、勲章を授けたいと思います」

その発言のあと、カニギとグリムはなにをしたのか、覚えてはいなかつた。

あの言葉はさうした意味だ。信じられない。と、思っていたのだが。

宴が終わり、リーフガットの一言。

「じゃあ、宴はここまでー。明朝、プログラマーとの戦争に臨むのをやめのつもりでー。」

リーフガットの発言に五十たちほ声ともつかない声を立てる。叫ぶ。

「ちよつ、ちよつと待つてくださいよ」

「なんだ? サポート・マイクロツーフ」

「……俺、もう帰りたいんですね」

「あら? 素手でヒュロルフターを破壊した。あんたらを軍が簡単に手離すとも思つた?」

サリグは返せない。

「ちうこいじよ。じゃあ明朝は8時出発だから、ちうことに充分で調整しようよ」

「……! もう2時廻つてゐじやないですかー! いつたい何時まで宴会をする気で?」

「ちうか。あんたらははじめて参加するのよね。じゃあ町とくナ

ど“夜通し”よ。日の出まで��くわ

んなあほなーつ！ とサリドは思つていたが、

「まああんたははじめてだし大事な人材だから早めに戻つてゆつ  
くり寝る。一応言つておくが逃亡は銃殺刑だからな？」

どつやうじの一人の軍務は、まだまだ続きそうである。

### 13 (後書き)

ひとまず第一章完結です！！

12/11追記

読みやすくなつてるpixiv版刊行しました。<http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=669170>

## プログラマー帝国。

世界一広大な国として知られ、その広さは『資本四国』とほぼ同じとまで言われる。

また資本主義国と社会主義国、どちらにも属さない、所謂『独立権』と呼ばれるグループのひとつである。

かつてはその豊富な鉱物資源から栄華を誇っていたが、今は影が落ちつつある。

先述のとおり、この国は資本主義国にも社会主義国にも属さない国である。

この世界は自らの信念、『資本主義』と『社会主義』を貫かんとする人間によって構成されている。

そして、その信念を世界に広げようと戦争を起こす。

かつてはこの世界にも資本主義と社会主義が共存した時代があったといふ。

戦争も別の目的で起きていたといふ。

しかし、そんなことは今の世界を見る限りで有り得ない事実。しかしそれは真実。

そんな人間たちが、どちらにも属していない国であること。

それは、なんだろうか？

「ビッグ・フロート?」

「ええ。プログラマー帝国軍の皆と言われている場所よ。半径1.5kmの円に、高さ1kmの塔が立っている。そこを攻めて陥落させれば私たちの勝ち」

「でも海上に浮いてるんですね？　海水の分子を崩して沈めたり、戦闘機で爆撃したり、水上戦に特化したヒュロルフター<sup>ム</sup>ムを使つたりすればいいじゃないですか」

机を挟んで、三人。

サリードとグラムは不機嫌な表情だつた。

しかしサツドは疑問に思ったので、今のことを見机のむかひにこる上

「そんなので壊せるなら15年も戦争を続けていいわよ」「

「やつやそりですかね」

「なにしら、」

リーフガットの答えは予想を翻すものだつた。

「分析できない謎の力の結界がそれを覆っているのだから」

「『分析できない謎の力』？」

「……彼らはそれを『奇跡の業』とでも言つてゐらしげがね」

「しかしレイザリーは資本主義国の中ではトップクラスを誇る技術国。それくらいのことも簡単に」

「解らないから戦争が泥沼化しているんだ。さつさとわかれ」

サリードの言葉を、少しイライラしているのかリーフガットはぶつ切りにして言つた。

「……で、俺らは実際にどうすりやいいんです？ まさかその『ビッグ・フロート』とやらにある結界を解除しきだなんて……」

「まさにグラム。あなたの言つた通りよ」

サリードとグラムの皿が同時に点になつた。

「あんたちは『ビッグ・フロート』の結界を内部から破壊する、こと。それだけでいいわ」

ブリーフィング後。

「さらりと書つたけど、5年間出来なかつたことを俺らにやらせるつてビビリに」となんだよ」

サリードとグラムはキャンプの廊下を話ながら歩いていた。

「でもグラム。考えてみりや成功したら英雄だぜ？ プログライトは力こそないもののその『結界』のせいでいわば最強と呼ばれてる。結界さえぶち壊せばこいつのもんだよ」

「サリード、お前はどんどんだけ楽観主義者なんだよ……」

グラムは頃垂れながら、サリードはグラムがなぜ頃垂れているのかわからぬまま、廊下を歩く。

「おひ、姫様」

サリードの声に氣づいた姫様はさりげなく笑顔を振り撒く。

「…………たしか、サリード…………誰だっけ？」

「グラムです！ グラム・リオール！」

グラムは今まで頃垂れていたのが嘘みたいに大声で言つた。

「そう。グラムだったね。覚えたよ。じゃあわたし訓練があるから

そつぱつて姫様は去つていつた。

「……で、どうすりゃいいんだよ?」

談話室のような部屋で巨大な消しゴムのようなレーショーンを口に入れ、グラムはサリードに尋ねた。

「ブリーフィングどおりで行くとなるとなんとかフロートの中に入つて結界を生み出す源を壊す、だね」

「……生身でヒュロルフタームぶつ壊すよつマシか?」

「そあ、どうだひつね」

「ナヒニヤサリド。これつて資本四国と社会連盟こみの戦争なんだろ? どうしてレイザリー以外来ていないんだ?」

「敵も味方もそれ別の戦争で忙しいんだろ。グラディアの一件みたいに」

「……実質一騎討ち?」

「うふにゃ、違うよ。実際は『チヒス』みたいなもんぞ」

「チヒス?」

「うふ」 サリードは手に持つっていたourkeーを一口飲み、「つまり、王 ここでいえばプログラマー皇帝を捕まえればいい。資本四国が先か、社会連盟が先か、ってね

「どうこいつ」とだよ。資本四国と社会連盟がぶち当たるんじやねえのか?」

グラムの質問に、サリードはため息をつぐ。

「だったらプログライト帝国の本拠地となる『ビシグ・フロート』を攻め込まなくていいよね?」

「あ、ああ……。そうだな……」

グラムはようやく理解したようだ。

と、同時に甲高くサイレンの音が鳴り響く。

「またかまた」の音をきくはめになるなんてね

「サリード、その通りだ」

二人はそつ々会話を交わし、談話室をあとにした。

何もない、乾いた大地。

かつてあったであろう都市群の瓦礫が目にひく。

「ひでえな。これがすべて戦争の結果か」

「『戦争はなにも生み出れない』とか言ったのはどこの学者だったつけか」サリードはグラムに尋ねた。

「ああ。どうだろうね。もしそいつがそこにいたら、その通り人間は馬鹿です、とでも言つてやるつか」

グラムは端末に手をとつ、言つた。

「サリード、なにやつてんだ。おまえ?」

「地形調査」サリードは端的に述べ、「人為的に作られた空洞を探してゐるだけだ。見当たらないね」

「サリード……? これなんだ?」

『氣づくとグラムはサリードの持つ携帯端末の画面をじっと見ていた。

「ん……?」サリードはグラムが言つてることに気がついた、「ああ。これはエネルギー反応を示すやつだよ。だから地上に青白い一つの塊があるだらう。それは僕らだ」

グラムは頭を搔いて、ひとりと「よくわからん」と不貞腐れたように呟いた。しかし、すぐになにか思い出したのか、

「……じゃなくて、深度7m付近のHネルギー反応につれて俺は言いたいんだ」

「え？」

サリードはそれを聞いてもう一度携帯端末とじめてしまう。

するとグラムの言ひ通り、その場所には高Hネルギー反応を示す緑の膜がみられた。

「……なるほどね。妨害電波を送っているのか、はたまたフロートの熱を逃がす管か……。行ってみる価値はあるね」

サリードがそう考察した。

「おこおこサリード待てって！ その確証はあるのか？ 假に後者だったら俺ら焼け死ぬぞ……」

「それでも、行ってみる価値はある」

「……分あーつたよ。行きやいいんだろ？」

「君がそういう性格で助かる」

「好きでこんな性格じゃないんだがね」

グラムはため息のよひごとを吐き出しつた。

先ほどの観測地点から南に800mばかり進んだところ一人はいた。

「……どうしてここに来たんだ？」

「入口か、もしくは通気孔があると踏んで」

「通気孔……か」

グラムは遠い眼で空を見つめて言つた。

「そんな暗い顔するなよ、グラム。どうせ簡単に見つかるからさ」

「こんな状況でも笑つていられるお前の方がおかしい。おまえオーニ子なんじゃねえの？」

「よく“オニー”とか言えるね。それは大神道会の信義じゃないの？」

サリドは笑つて、答えた。

この世界はたしかに『資本主義国』と『社会主義国』の一強が争つて切磋琢磨している世界だ。

しかしながら、その一強が支配出来ていないわずかな『中立地帯』ができてたりする。ここ、プログライト帝国も、そのひとつ。

プログライト帝国はもともとあった世界で、世界一人口の多い国だ

つた。人の種類も世界一だった。

争いも絶えず、人が人を殺し、人の血で喉を潤す。いわゆる残虐な世界がそこにはあった。

しかしそれも核戦争によつて大半が滅び、残った人類は団結し、今世界を作り上げた。

「でも、争いは絶えなかつた。絶えるわけねえよな。もともと戦闘本能や他人と優劣をつけたがることなんて人間の遺伝子に昔から染み付いてることだしな」

「そうして強い、と弱い、が生まれた。弱い人間はカミという偶像にすがるようになつた……。まあ、それが結果として神殿協会や大神道会といった二大宗教が生まれたんだけどね」

「……サリド。話をぶつたぎるようで悪いが見つかったのか？」入口は

グラムが尋ねると、

「ああ。見つかったよ」とサリドは笑つて答えた。

そこには、あつたのは小さなマンホールだった。

そして扉を開けると、そこには人一人がやつと入れる縦穴があつた。

「もうちょいにマシに隠せよなー。まあ、あいつらもまさかこんなところから潜入するなんて誰も思つてないだろ?」

サリードはさう言つて、梯子を降りようとして しかしそれをやめ、訝しげに中を見つめた。

「……どうした?」

グラムはサリードの行動に疑問を抱き、尋ねた。

「……いや、なんでもない」

そう言つて、サリードは縦穴を降り始めた。

縦穴はそれほど深くなく、五分と降りる内に通気孔らしき空間にたどり着いた。

「……ひでえ匂いだ。鼻が曲がるくらいだぜ」

グラムが鼻を触りながら、言つた。

サリードは端末からアンテナのよひなものを突き出し、「やつだね。でも食べ物か何かが腐った匂いだから、有毒なガスとかではないと思うな」

「なぜそんなこと言える?」

「グラム。そりやう自分のもつ携帯端末の機能くらい覚えておいで。この端末にさういうのを測るセンサーがあるんだよ」

「へえ、初めて知ったな」

グラムは携帯端末を適当に弄りながら、言った。

「んじゃ、向かいますか」

サリードはさう言つて歩き始めた。

そのころ、ベースキャンプにいたリーフガット・エンパイアはノートパソコンを開いて何かを見ていた。

「……遅いわね……。そもそもてもおかしくないのに……」

彼女はとある資料を見ていた。

それは、これから来るはずであるヒューロルフタームパイロット、ノータの資料。

「『蟻蜂の騎士』……か。しかも『第2世代』のヒューロルフターム、

「ローに乗つてこる……」

彼女はため息をついて一言。

「せめて設計図的なのをつかめれば今後の直接戦争に役立つのだけどね」

そのとき「コンコン」と言葉を遮るよつてドアがノックされた。

「どうぞ」

リーフガットが入室を許可すると、扉は開いた。

その入つてくる姿を見て、リーフガットは驚いて何も言えなかつた。

「すみませんね。我が国は『資本四国』の中でも情報統制が厳しくてですね。このよつな不意打ちのよつなことをしてすいません」

そこにいたのは 10歳くらいの女の子。

緑色のぴちぴちの防護服が彼女の体型を強調している。

「……ライバック共和国第五ヒュロルフタームパイロット・ノータ、アリア・カーネギーですね」

リーフガットは、静かに書類を見ながら言つた。

「ええ。間違ひありませんよ?」

「女性……よね」

リーフガットは小さく呟いたつもりだったのだが、アリアはそれに反応し、「女性ですが、何か？」私はあなた様みたいにそんな大きい“脂肪のかたまり”をつけてはおりませぬ故。だいたいそんなのあつたら肩が凝りますし、コックピットが狭苦しく感じますわ」

鼻をヒクヒクと震わせながら、言った。

「しかし……『蟻蜂の騎士』が来るなんて。敵はそんなに強いのかしら？」

リーフガットは机上の紙の書類を整理整頓し終えて、立ち上がった。

「……強い？ そんな簡単に言い表せるほど敵じゃないわ」

「それは、いつたい？」リーフガットは一瞬考え、その言葉を口にした。

「……メタモルフォーズ」

アリアは唇をほとんど動かさず、ただそれだけを言った。

続けて、「神話上に出てきた、と言われる『神の使い手』。人によつては『神獣』とも言つかもしれないけど、それを知るのは軍でも一握りの存在」

「その、メタモルフォーズが、敵？」

「いいえ違つわ。確かにあれはメタモルフォーズの形を為してはいるけれど、」

「けれど?」アリアの言葉が一囁切れ、不審に思つたリーフガットが尋ねる。

「けれど、あれは違う。神話によればあれの放つ咆哮は下手すればこのプログライト帝国を一瞬で消し去る程の力を持つてゐる。でも、そんな素振りはない。……ただ、それだけのこと」

「つまり」リーフガットが机に手をやつて言つ。

「あれは、偽物?」

リーフガットの質問にアリアは笑つて、「偽物、というか劣化版のほうが近いかな。と言つても我々にそれを研究する術がないがね。まず肉片からでもほしいところだ」

それを聞いてリーフガットは、アリアに悟られないようにではあるが、内心驚いていた。

(つまりグラディアでサリドたちが倒したのは偽物。あの肉片を調べれば何か解るかも、ということね)

そんなことを考えながら。

「……ところで、なぜこの情報を簡単にも教えてくれたのかしら?」リーフガットは薄汚れた銀のコーヒーカップをコーヒーマシンに持つて行き、Hスプレッソのボタンに手をかけて言つた。

「……我々だけ知つてもフェアじゃありませんからね。なにせ今回はレイザリーとの共闘。精々足を引っ張らないようにお願いしますよ」

そう言つてアリアは部屋を後にした。

一人残つたリーフガットは苦虫を潰したような表情で出来上がったエスプレッソをちびちびと飲み始めた。

そのころサリードとグラムは通気孔を潜り抜け、なにかの施設にたどり着いた。

直方体の機械がたくさん並んでいて、それら一つ一つが赤やオレンジや緑、といった色が点滅したり激しく光つたりしている。

「これは……何の施設なんだ？」

グラムが天井のほのかに光る蛍光灯を見て言った。

「携帯端末は圈外だからリアルタイムの情報は入らないけど、たぶんここがビッグ・フロートの真下じゃないかな」

サリードは携帯端末のタッチパネルを触りながら言った。

「敵のアジトの真下か。こいつあ簡単に着くもんだな」

「油断するなよ。グラム。いつどこに敵がいるかわからんねえからな」

そんな瞬間は、そう遠くはなかつた。

刹那、グラムの首筋に冷たいものがあてられた。鋭く、冷たいものが。

グラムはそれに気づき振り向こうとしたが、あてられた冷たいものを見て、それをやめた。

「……どうやら襲撃のようだ

サリドは何もできなかつた。いや、しようと思えば出来たのだろうが、グラムの首筋にある鋭く冷たい刃がそれを許さなかつた。

抜かつた。よく考えれば社会連盟は資本四国などとは違つて専門の傭兵部隊がある。仮にそれでないにしろプログライト帝国は少ないながらも皇帝の私設軍があることはブリーフィングで聞いていた。なのに、なにも対策をしなかつた。誰が悪い？ 無論俺が悪い。何も考えず通氣孔という唯一であろう入口を発見して張り切つっていたばかりに！

「あ、あのー？」

そこでサリドの思考暴走が唐突に停止した。なぜならサリドとグラム以外 即ち襲撃者 の声が聞こえたからだ。

その声は資本四国の公用語である英語であつたものの、なにかアクセントがおかしかつたり、なんというか、英語を習いたての人間が話しているような、そんな感じだつた。

「だからですね？ 我々は、このプログライト帝国を、内から、潰そうとしている、ただそれだけのことなんです」

片言の英語で、その黒に身を包んだ人間は言つた。

一時間前。

結果から言えば襲撃者は味方だつた。ただプログライト帝国を内から潰そうと試みて半ば個人的に活動していたそつだが、今のところは秘密裏で表立つた活動が出来ていなかつた。そしてなかば

諦めかけていたようだが。

そこでサリドたちが潜入してきた。

即ち敵軍が、ここを潰すために、いや正確には『結界』を壊すためにやってきた。それに便乗しない手はない。と考えたらしい。

こうしてその人間はサリドたちを襲撃して、話の場を設けた、とうわけだ。

「……話は解つた。しかしなぜここにニンジャがいる？」

グラムはようやく口を開いて、言った。

ニンジャ。

それは古来より暗殺術や潜入術を学んだまさにアサシン的存在。

その元祖はかつてあつた国、ニッポン。

今はレイザリーに取り込まれ、レイザリー王国ニッポン自治区となつてはいるが、未だにその文化は生きている。そしてその文化はレイザリー王国の人間にも浸透しつつあった。

畳、抹茶、米を食べる文化、日本語などがそのいい例だ。

ニッポンは、『核戦争』前から生きる数少ない国の一つだ。なぜ生き残ったのかは判らない。噂には『冷凍保存した旧人類がいる』とか訳のわからぬ話があるくらいだ。

「なぜ、私たち二ンジャがここにいるか、ですが」

その人間は綺麗な、声で話した。

口に布をあてているせいか、少し声が聞こえずらい。

「……すいません。一応、外すのが、常識でしたね。それと、日本語は、話せますか？ 聞き取れますか？」

人間は布を外しながら、聞いた。それにサリドたちは視線を外さずに頷いた。

驚いた。

彼、いや彼女はくの一だったのだ。

くの一、とは女の二ンジャである。

「……話を続けます。我々は3年前のプログラマー潜入作戦のメンバーでした。たしかに我々二ンジャならば誰にも気付かれずに潜入することは簡単に出来ますからね」

「……仲間は？」

「先ほどあなたたちを襲つた時にいた一人だけです」

「なるほど。戦力が倍にはなつたものの、それでも四人……か」

「プログラマー帝国の要だけあつて迷いやすいですし、罠もありまし、敵も多いです……。我々もやつと11Fまでの内部しか解つ

てないんですよ」

「 1 1 F か……」

サリードはただそれとなく呟いた。

そのころ、乾いた大地には一体のヒュロルフター<sup>ム</sup>が蠢いていた。ひとつは、陸も海も川も山もある程度の力を発するスタンダード型。俗に言う『第1世代』。

かたやこぢらは地上戦に特化した『第2世代』。

この「一体が組む」とよってなれば戦局は決まったようなものだ。なぜか?

相手は一体しかいないから。しかもヒュロルフター<sup>ム</sup>じやない。劣化版“と見られている”ものだ。

「……手を引っ張らないよつてお願いしますわね。オホホ」

とか、お嬢様のように笑っているのは『蟻蜂の騎士』アリア・カーネギー。

「あなたこそ第2世代という力に振り回されないよつにね?」

眉間に皺を寄せながら、言つのが『姫』。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>をえ抜きにしてしまえばただの可愛い喧嘩で済んでしまうがヒュロルフター<sup>ム</sup>があるために、それは、世界を滅ぼす

ことにもなりかねないのだから。

ところで、姫様が乗っているヒュロルフター・クーチュ、と蟻蜂の騎士が乗っているヒュロルフター・ゴローにはたくさんの差違がある。

まずは足下。クーチュは海上でも楽に行けるようにフロートが簡単に装着できるように普段地上から2mほど浮かせている。これは『地球は巨大な磁石である』という学説に基づいて考えられたものであって足の底に強力な電磁石を組み込むことによって浮かべる。

それに対してゴローにはそんなものはない。なぜなら、地上戦に特化したヒュロルフター・ム。クーチュも浮上の理由が海上時のフロート装着時なので、ゴローはフロートを装着する必要がないからだ。

次は武器。クーチュはスタンダード型と言われているくらいに平均になんでも装備が可能だが、そこまで“グレード”の高い武器を装備することができない。

グレード、とは武器の威力を示していて、これが高ければ高いほど、強い武器である。

一方ゴローは装備できる武器の種類が限られる代わりにグレードの高い武器を装備することができる。

この一つにこんな違いがあるのは、ただ造られた国の技術の問題ではない。

ただ、“進化”しただけ。既にレイザリーでも第2世代はできてい

る。

なうば、なぜ？

ノータは、一つのヒュロルフター<sup>ム</sup>にしか乗ることが出来ず、二つ以上のヒュロルフター<sup>ム</sup>に乗ることは難しい。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>を発表したヨシノ博士の論文の一節である。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>とノータはノータが操るため、ヒュロルフター<sup>ム</sup>が放つ微弱電波とシンクロする必要がある。

そのためにノータはヒュロルフター<sup>ム</sup>に精神の波を合わせる必要があるのだ。そんな簡単にできることではない。とてつもない時間にとてつもない苦労、とてつもない精神的疲労がかかる。

要するにヒュロルフター<sup>ム</sup>はノータさえいなければただの赤ん坊。考えることも出来なければ、本能のままに行動する。

そこへ、それがやつてきた。

『第1世代』と『第2世代』。一體のヒュロルフター・ムがいるのに  
も関わらず。

ただ、それはその普通なら最悪であつた状況を鑑みず、やつてきた。

「……やつてきましたわね

「ええ

二人のノータは会話を交わす。

「じゃあ……、まずは、私からつ……！」

そつと聞いて蟻蜂の騎士が乗るヒュロルフター・ムはその砲口  
に光を溜め込む。

「粒子砲……？！ センセイそんなものを使ってエネルギーは持つ  
の……？！」

「おほほ、『心配の』ようなので先に申してあげますが、私は予備バ  
ッテリーを常に持つていつてゐるのですよ。だから常に最大出力が可  
能になる……！」

そんなことを話している間に、粒子砲の中には光がどんどん集ま  
つてくる。

そして、ついには。

粒子砲が、劣化ヒュロルフタームに向かって撃ち放たれた。

たしかにヒュロルフターム・ユローの放った粒子砲はヒュロルフターム擬きを命中していた。粒子砲は摄氏350度。その気になればヒュロルフタームの装甲をも融かすことができる。

筈なのに。

その擬きはびくともしなかつた。

「まさか……。」私のヒュロルフタームの粒子砲を耐えた？！

蟻蜂の騎士はこれまでに見たことのないほど慌てていた。当たり前なのかもしれない。これまでどんな戦闘においても冷静沈着、時には味方をも平気で撃ち抜く、と言っていた彼女が、いつも慌てているのだから。

予測範囲外の事態。

彼女ら一人はそう考えた。

「ならば……」

そう言つて姫はコックピットにあるレバーを引く。

ジャキッ、といつ金属と金属が擦り合わさつたような音が響く。

「……これしかないわ

『リリー・ダレンシア少尉！ なにをするつもり？』

気づいたら通信が入っていた。それは上面のリーフガットからだつた。

「粒子砲がだめなら、コイルガンを撃つ。それでだめならレールガン。手はまだある」端的に述べ、通信を切つた。

……のだが。

『ダメよ。リリー。それは許されない。たとえ「ノータ」としても、その命令は受理されない』

「鬭わずかに指揮だけしてゐあなたがよく言えることですね」

リリーの声は平坦だつたが、それは明らかに怒りの表情が入つていた。

『だめよ。リリー。それは絶対に「さよなら』

リーフガットの話が終わる前に彼女は通信を強引にシャットダウンして、

砲にためていたエネルギーを一気に射出した。

撃ち放つたのはコイルガン。

コイルガンとは電磁石のコイルを用いて弾丸となる物体を加速、発射する装置のことだ。このヒュロルフターMに使っているコイルガンの原理はとても簡単で、弾丸を走らせる細長い管を包み込むように一定間隔にして複数個のコイルが設置されており、そのコイルに電流を流すことで発生する磁力を利用して弾丸を素早く引き、段階的に速度を上げ、射出する。といったものだ。

まるで音速の戦闘機が走ったあとに発生する、ソニッシュブームのような衝撃と音があたりに響いた。

それはビッグ・フロート内にいた一人にも例外なくやつてきた。

「……なんだ。今の轟音」

「グラム。ここから外が見えるみたいだ」

サリードとグラムはあの二ンジャに連れられ、ひたすら長い螺旋階段を上っていた。なんでもここが一番警備が薄いんだとか。

窓を開けるとそこに見えたのは、ヒュロルフターMが一体と、グラディアで見たような擬きが一体。

数から行けば勝てる筈なのに。

なぜかそこにはとじねじるボロボロの一本があった。擬きだけが綺麗な姿を保つている。

「おこ、グラム」

不意にサリードが呟いた。

「どうした。もしかしてこの風景に圧巻をされたとか？」

「馬鹿野郎。そんなわけないだろ。擬きの足跡を見てみるよ」

「は？」

グラムがサリードに睨まれて、足跡を見ると、

そこには、『なにもなかつた』。

「足跡が……ない……だと？」

「わつ」サリードは笑つて頷き、「おかしこじだと思わないか。あの一体であら空氣の急激な射出とかで足跡は出来るにも関わらず、擬きにはできてない」

「まさか……」グラムは一つの結論に辿り着いた。

「わつやうれはサリードも同じよつで、

「ああ。わうかもしれない」

一息。

「あれは幻影で、本体はどこにあるよ」

「ちょっと待てよ。そしたらあの一人はそれを知らないで……」

「だらうね。あのまま無駄にエネルギーを射出し続けて空っぽになつた隙を……窺つてこるのがも」

「おこサコ。」そのままじやまづこぞ。どうするんだ?.

「どうするかしら?」

サコは通信機に手をかけて、言つた。

「僕らがどうにかするしかないだろ?」

「サリードは通信機をてにとつ、どこかに通信を始めた。

「サリード・マイクロシヨフから本部へーー！」

「はい、どうした？ サリード」

なぜか通信に答えたのはリーフガットだつた。

「なぜリーフガットさんがそこにあるかは知りませんけど单刀直入に言いますね。今ヒュロルフターMが戦つてるのは幻影です！！本物はどこか別のところに」

サリードがそこまで言つたとき、不自然なノイズがかかりはじめた。

「あれ……？ つな……い？ とりあ……れわ……んぞう……」

リーフガットが聞き取れたのはここまでだつた。

「迷惑をかけたようで失礼する」

ノイズがひどくなつたあと、よつやく回復して、リーフガットはもう一度通信をとろうと思つたときのことだつた。

そのあとに聞こえてきたのは、壮年の嗄れた声だつた。その声はリーフガットも聞き覚えがあつたようで。

ヴァリヤー・リオール。

レイザリー王国で上院議員を務めていて、『四天王』という実効支配組織の一員でもある。

（なぜ四天王直に通信を……？）

そんなことをリーフガットは思っていたわけだが。

「先ほどサリード・マイクロソーフ、グラム・リオール両氏が流した情報は確証を掘めていない。彼らは劣化ウラン弾による放射線被曝によつて『戦争症候群』に陥り、論理的思考力と記憶力が低下して、錯乱したとみられる。繰り返すが先ほどの情報は間違いの可能性が高い……」

そこで、通信は途絶えた。

通信は、無論サリードたちにも聞こえていた。

「畜生……あのくそ親父いつたい何言つてやがるんだ?…!」

グラムはサリードから通信機を奪い取り、

「おい!! 聞いてるか!! 僕たちの言つてることは嘘じやねえ!! だれか応答しろ!!」

「無駄だ。グラム。もはや誰もお前の事を聞かぬよ?」

「…………」

「まうまつ。遂にはそつ呼ぶよつになつたか。親は大事にしろよ。」

「お前なんか親と呼べるか！！ 貴様こそ虚偽の情報を流してぢうするつもりだ！！」

グラムは通信機に吠えた。虚しく廊下に声が響く。

「……知つてゐるか？ 南のリフティラのレジスタンスの活動が活発化してゐることを？」

「？」サリードは聞いたことに首を捻る。

「お前らの『ヒュロルフター』ムを素手で倒した』勲章は全世界に知れ渡つた。それによつて『人間でもヒュロルフター』ムは倒せる』と認識されてしまつたのだよ？ そんな“偶然によつて生み出された”認識によつて世界の秩序は崩れつつあるのだよ？」

「だから俺たちを都合よく殺すというのか？！ 『戦争で勝つのはヒュロルフター』ムと明確に位置づけるためにか？！」

「……人類の歴史には犠牲を伴つのだよ。それを解りたまえ」

ヴァリヤーは、さりに淡々とした口調で語る。

「なぜ解らうとしない？ 強いものが、この世界を支配するのだよ。それを覆してもらつちゃあ困るんだよ」

「だから……殺すのかよ？ でもここヒュロルフター』ムはいないぜ？」

それを待つてたと言わんばかりに、ヴァリヤーは笑いだし、

「なにも殺すのはヒュロルフターームとは決まっておらぬよ？ 今二体のヒュロルフターームが戦っている敵の本体は一体どこのかねえ？」

「……まさか……！」

サリードが言つた瞬間。

ドゴオオオオン！！ と何かが爆発したような音が、響いた。

「なんだ? !」

ニンジャのひとりはクナイ　彼らがよく使つ小刀のいとらじい  
を構えて言った。

「……お出ましだな」

サリードはやつ眩き、ウエストポーチからなにかを取り出した。

「おまえ、なにを……！」

「手榴弾だ。場合によつてはこれを投げて目眩ましのかわりにする」  
ズウウウン、と地響きが、さらにも大きくなつていぐ。

「……ヒュロルフタームか？ それともグラディアで闘つた生物兵  
器か？」

「『メタモルフォーズ』ですね」ニンジャは端的に答えた。

「メタモルフォーズ？」

「ええ。一般には、神の使い手、とも呼ばれる、巨大な獣。一説に  
よれば、一回の砲撃で、国がひとつ消せる、とも言われるくらい  
しい」

ニンジャの声はとてもまっすぐで冷たく、まるで機械のよつな声だ

つた。

それは彼らに潜む恐怖を後押しするような、そんな感じでもあった。

ついにそれは、姿を見せた。

「これは……魔神? !」

サリードは思わずそう呟いた。

壁を崩して出てきたのは、人形の何か。しかし、そんな簡単に明言できるものではなく、例えば肩には大きな棘が五、六本生えていたり、顔は般若の面のような険しい顔をしていた、要するに『人のようで人でない』何かが、そこにはあった。

「おいおい…… いくらなんでも『こつら』は倒せねーぞ? !」

グラムが頭を抱えながら。

だが。そう呟いて彼は何故かかけていたサングラスを外して投げ棄てた。

「やるつきやねえんだろうな。なんせそれが俺らの仕事であり命令だからな」

「「行くぞっ！…」」

二人は叫んで、その“魔神”に突っ込んでいく。

まず、二人は小型の銃を取り出しそれを魔神に向けて撃ち放つた。

ズドン！… と何らかの衝撃で車のバンパーがへこんだような音を立てる。

しかし、それはびくともしなかった。

「ならばこれなら……！…」

そう言ってサリードは手榴弾の安全装置を引き抜きそれに向かって投げ棄てた。

「……つておい！… こんな狭い空間で手榴弾なんか爆発させたら俺たちまで被害を被るぞ？！」

グラムが手榴弾を投げる前にそんなことを言っていたような気もしたが、それは完全に無視をした。

刹那。

目映い光とともにサリードたちは後ろへと衝撃で押された。

「いたた……」

サリードは田を覚ました。

グラムたちも氣を失つてはいないものの、倒れていた。

「メタモル……フォーズは？」

サリードは立ち上がり、あたりを見渡した。

まわりは、手榴弾の爆撃によつてもたらされた土煙で視界を遮られていた。

ポタリ。

どこからか地下水かなにかの零が落ちたような、そんな音がした。

そう遠くない距離と判断して、サリードはその零が落ちるまゝへ向かつた。

そこまでこつて、サリードはふと思つた。

『ここはヒュロルファームの戦いが見れるほどの高さなのになぜ水の零が落ちているのか』といつことに気がついたのだ。

「……なんで零が……？」

その答えは、直ぐそばにあつた。

そこにいたのは。

傷を負つて、そこから大量に血が出ていたニンジャと、

それに押さえ込められているメタモルフォーズの姿があった。

「おい！」

サリードの声にニンジャは氣付いたのか、傷付いて血にまみれた顔で笑つた。

無垢な、表情。

メタモルフォーズは、もう動かないようだつた。

「……大丈夫か？」

サリードの問いにかけにニンジャは僅かに頷いた。

「なら、いいんだが。えーと……」

「ストライガー」

「？」

「ストライガー・ウェイツ」

「あ、ああ。名前ね。因みに俺の名はサリード・マイクロソフ

「へい？」

「ああ。もう終わったがな

そう言葉を交わして、二人は握手をした。

そのころ、リーフガット・エンパイアは書類の山と格闘していた。

「……怪しい」

リーフガットは書類の山からとある書類を取り出し、呟つた。

そこには『ヒュロルフター・プロジェクト第85次報告書』と達筆なコンピュータ字体でかかっていた。

そこにはこう書かれており

1年前、ゼロ号機の暴走により死去したヨシノ博士の娘はヴァリヤー氏が引き取ることとなり、我が委員会の案件もようやく一つ減った。

次はヒュロルフターの量産である。これは機械さえあれば出来ることだが、"もうひとつの"核がない限り難しい。我々が最初から望んでいた『十一使徒をヒトで作る』ことはできないのか……。まだまだ試行錯誤が必要だ。

なので、我々はもうひとつ的方法を思いついた。それが『チルドレン・ノータシステム』だ。これは、ヒュロルフターの量産機に装着されない『オーレズ』の代用のため、人間のノータをたてて、そのまま操舵などを出来るようにし、オーレズ無装備でも装備したヒュロルフターに事わりなく使えるようにするということだ。

直ぐ様、我らは既に完成割合を満たしていた一號機から四號機のノータを決めるこことした。決めるには、全人類から無作為、というわけにもいかない。寧ろ問題はそこなのだ。そこで派遣・調査院を設置し、そこのメンバーがノータに足る能力を持つ子供を選別していった。

そして、ようやくノータが決まった。彼ら彼女らはまだ幾ばくもない年齢の者達だが、ヒュロルフタームとの同調を考えればそれでいい。

彼らのことは、育成機関に任せておく。どうせこれから軍の狗だ。ちゃんとした教育もする必要はない。軍に必要な教育さえしておけばいい。

文書を読み終えたリーフガットは、眠そうな顔をしていた。

(さすがに30時間はきついわね……。少し仮眠でもとろつかしら)

とふとリーフガットは立ち上がり、

異変に気づいた。

「やけに、静かね」

そう。今まで外ではヒュロルフタームたちがドンパチ、コイルガンを放つたりしているはずなのに。

まるで何もないかのようになにかが静かだつた。

（……終わった？）

リーフガットは思つて、そばにあつた扉を開けた。

しかしそこには、リーフガットが予想したとおりの状況があつたわけ。普通の通路、青軍服の人間たちが慌ただしく歩いていた。

「私の思い違いだつたのかしら」と呟くよじてリーフガットは言って、自分の部屋に戻つていつた。

ただ、それだけのこと。

そのころ、ヒュロルフターーム。

「あら……。動きが止まりましたわね？」

「本当だ。どうしたのかしら？」

一人のノータは話をしていた。

そして結論を打ち出した。

この敵はもう死んだ、と。

キャンプベースでは、宴が行われていた。なんでも勝利祝いだとか。

「どうせ本国に帰つたら盛大にやるのにどうしてこのレーシヨンだけで宴をしようと考えるのかねえ。はやく帰つてフライドチキンが食いたいよ」

グラムは特大レーシヨンにかじりつきながら、言った。

「はつちやけたい気分なんだろ。たぶん」

サリードはいつものサイズのレーシヨンをスプーンで掬つて一口食べた。

「それはそうだな。ま、俺たちもいらん嫌疑が外された祝いという

「」とだ」

「なんの祝いだよ。元々知らなかつたし、別にどうでもいいんじやないの？ 少なくとも俺はそんなかんじにプラス思考で考えているけどさ」

サリードはまた、レーシヨンをスプーンで掬つて呑つた。

「ふうん。そんなもんか」

「ああ。そんなもんだ」

「サリード、グラム。どうした。辛氣臭い顔をして？」

サリードとグラムの会話に、私も混ぜてくれよ、と言わんばかりにリーフガットが混ざり込んだ。

「どうしたんですか。リーフガットさん。仕事は終わつたんですか」

「始末書とか今までのことをワープロに打ち込むことを仕事とは呼ばん」

確かにそうだ、とサリードは思つた。

「で……。あの騒動は誰が……？」

「サリード。それはあんたらが一番知つてこる」とじやないのか？ 犯人はヴァリヤーだよ。あいつしか今のところこんなことが出来る所業の人間はいない」

でもな、とリー・フガットは続けた。

「証拠がないんだ」

「証拠？」

「やつや。やつは確かに我々に向かって情報攪乱を目的とした通信を行なつた“としている”」

「……としている？」

「考えてもみる。あの通信は録音はしてある。声色の判定からも、ヴァリヤー本人と確定するだらう」

だがな。

「それが『ヴァリヤーが国を裏切るために情報攪乱を行なつた』と、いつ証拠にはならんのだ」

「？！ なぜ……？」

驚きを隠せないサリードにリー・フガットは続ける。

「世の中には著名な人間の声色のデータを手に入れて情報を攪乱させる、というテロの常套手段があつてな。まず國のお偉いさんはそつちの方向から調べ始めるわけだ。その人間にとつてはまさか『本人が情報攪乱のためにやつている』とはおもわぬだらうへ」

「確かに、その通りだ……」

サリードはもはやレーシヨンを掬つスプーンの手もやめ、ひとり頃垂れていた。

「まあ、そんな簡単に頃垂れて、諦めるんじゃねえよ」

リーフガットは手に持つたマグカップをビニカに置いて、

「あんたちは十分頑張つた。一先ず休め。いつ戦争にまた駆り出されるかわからん時代だからな」

リーフガットは笑つて言った。

サリードは彼女の笑顔を初めて見たような気がした。

リーフガットの助言通り、帰りは休むことにした。床について、目を瞑る。でも、なんだか眠れなかつた。

なんだかおぞましい感じがして、寝ることを許されなかつた。

そして、ひどく寒い。四季が豊かな本国に来た証だろ、とサリードは納得し、よつやく深い眠りについた。

本国に帰つて表敬が終わつたサリードたちには一週間の休暇が設けられた。

「サリード、聞いたか？ 僕たち一週間休みだとよー」と、スイッチをオンオフしながら、グラム。

「さうか。でもその感じじゃ一週間過ぎるとまた戦場に駆り出されるつぽいな」と、なにか壊れた機械をドライバーでらはんだじてを使つて直しながら、サリード。

「どうか……、お前は何をしているんだ？ もつかから中毒のあらそくな匂い吹き出して」

「……まさかこの人ははんだの危険さを知らない？！ はんだといつのは体内に入つたら出されずに蓄積されていくものなんですよ？」

「えつ、まじで……。でもサリード、お前は大丈夫そうじやん

「俺は透明なマスクつけてからこーの。意外といつのは常識だぜ？」

サリードはさう言つて、また作業に戻つた。

そんなこんなで休日一回を迎えたサリードとグラムである。

「なあ、サリード。毎日ソロロルフターの勉強したいのはわかるが、  
今日へりい遊びに行かねえか？」

グラムが、そんな提案をしてきた。

サリードは暫く黙っていたのだが、

「……やつだな、それもいい」

よしあくまでサリードのサインを出した。

グラムとは次の日の朝、首都から少し離れたショッピングモールで会つこととなつた。

ショッピングモール、といつても仮に戦争で爆撃されないよう地下に何層も分かれている、いわば“地下都市”の中にあるのだが。

そしてサコダは、そのままここにいた。

サコダはそこまで私服を気にしないタイプなのか、ジーパンにTシャツ、それにウエストポーチという軽装だった。

「……まあ、どこ行くかわからんしな……。データとかじゅあるまい」

サコダは独り言のように呟いた。

「よし。やっぱ早かつたな

サコダとの待ち合わせ場所にグラムがやってきたのは、それから五分ほど経つてからだった。

「ああ。待ち合わせをしたからにはそのどんなに遅くても五分前には着くよなってしてるからね」

「ねえか

といひで。サリドが尋ねた。

「隣にいる女の子は誰なんだい？」

待ち合わせ場所にきたのはグラムだけではなかつた。正確に言えば。

グラムの隣には女の子がいた。栗色の髪にキラキラとした瞳（輝いている、と言つたほうがいいのかもしない）。ともかく光が当たつて輝いているのだ）、顔立ちも整つていて、水色のワンピースを着ていた。

「彼女は……？」

「ああ。ここつか」グラムは後ろに振り向き、そちらのほうを指差して、そして言つた。

「妹だ」

「い、妹？」

グラムの隣にサリドの対応はとても冷ややかなものだつた。

「わう。妹。俺の

「まじかよ……。まさかお前に妹がいるだなんて……」

「その発言には少し問題があるんだが？」

グラムはすこし顔をしかめながら言つた。

「あ、あのっ」

その話の中心にいた少女は、恥ずかしがりながらも、サリードに話しかける。

「ん？ どうしたんだい？」

サリードはそれに答える。

「いや、あの……。いつも兄がお世話をになつてしまふ」

なんと丁寧にお辞儀までついていく。

「出来る妹と出来ない兄、ねえ……。普通逆じやないの？」

サリードはグラムに話しかける。

「うるさい。なつちまつたもんはしうつがないだろ」

グラムはつづけんじんに返した。

ところわけなので、サリドたち三人はショッピングモールで遊ぶこととなつた。

ショッピングモールはサリドたちが今までいたプログラマーのベースキャンプ（あれでも一つの国がすっぽりと入ってしまうくらいのだが）が一個ほど入つてしまつほどの大規模だ。とても一日では回り切れない。

「んじゃー、まざじに行くか」

グラムがマップをつまらなれつつに眺めて、言つた。

「お兄ちゃん、私洋服買いたいんだけど」

妹が話しかけてきた。

「あ、そう? わかつた。じゃあそこまで行くよ。キャティ」

グラムがそう言つとキャティは嬉しそうに小走りになつて、通路の先に向かつた。

「兄弟、つていいなあ」茲へよひにサリドは叫ぶ。

「そうか? あれでも会つたらいつも喧嘩だぜ? 思春期の妹、つて結構めんどくさいもんなんだ」

「そんなもんなのか?」

「ああ」

そんな世間話をしながら一人もキヤティの後を追つた。

そのころ。リーフガットはとある場所にいた。

いつものように軍服じゃなく、黒いスーツでびしっとしている。ところで、ここは何処なのだろうか？

ここは、議員会館、と呼ばれる場所で、この国の全議員の事務所がある所だ。

彼女はその最上階にいた。そこには噴水やら小高い山やら、はたまた滝まで付けられた庭が広がっていた。

「これが事務所ねえ……。もはや別荘じゃない」

ここにいる人間はただひとり。

ヴァリヤー・リオール。

先の戦争で妨害行為を行なつたと見られている人間。そんな現在は自主的に中に籠つている。

「なにも工作していなればいいのだが……」

そう言って、リーフガットは庭の終着にある扉にたどり着いた。

「やあやあ。リーフガットくん。よく！」おでやつてきたなあ

扉を開けると、その嗄れた声。

ヴァリヤーの声だった。

「ひとつ、お尋ねしたいことが」「やつこおして来たのですが」

「まあ、座るがいい。大丈夫だ。罷なんぞ仕掛けではおらんよ」

ヴァリヤーがやつこいつのドリーフガットはそれに従つて近くのソファに腰かけた。

「…………して、聞きたい」ととは?」

「これ、読ませていただきました」リーフガットはカバンからある本を取り出す。

それを見て、ヴァリヤーは僅かに眉をひそめて、「いかんなあ。これは書物庫に保管されていた、持ち出し厳禁のやつじゃないかね? こんなものを持ち込んで……、君も只では済まんだらう?」

「こんかいは委員会の協力を得た上です」

リーフガットは即座にそれについて返す。

それを聞いたヴァリヤーは思わず立ち上がった。

「まさか……!! 委員会は私を裏切つて……! こんなことを」

「なにを仰りますか？」

リーフガットは笑つて、

「貴方が国を裏切つたんでしょ、」

「違う！ 私はただ……つ。世界の安寧とソコロルフタームの「」を思つて……」

「その結果のためにやつたことが妨害か？ ほんと何を思つているのやつ？」

「……もつ、我慢なさい」

「ん？」

「許せん…… 許せんつ…… せめて貴様だけでも殺すつ……」

そう言つてガラリヤーは近くにあつたボタンを押す。

「なんでわしがこんなビルの最上階にいるのか、わかるかね？」

「ガウン、と低い唸り声が部屋の中に響いた。

「あやか……、このためだつたと……？」

そこには小型の大型戦闘兵器。

ヒュロルフタームだつた。

そのヒュロルフター・ムはヴァリヤーを手のひらに乗せて、ウオオオオオン、と“雄叫びのよくな音”を出した。

その衝撃波にリーフガットは思わず足がすくんだ。

「……まさか、ヒュロルフター・ムをも操っていたなんて……！」

「ヒュロルフター・ム・プロジェクトの創始メンバーであつた私を見  
くびつでもらつちや困るなあ」

ヴァリヤーはそう言つて、コックピットの中に入つていく。

そして今度は、その声がヒュロルフター・ムに内蔵されている拡声器  
から発せられた。

「今まで」れを封印していたが……。もう我慢が出来ぬ……！  
「こいつを使ってレイザリーを中からつぶし、私だけの国家を作り  
上げる……！」

「……そんなこと、ほんとに出来るとお思つで？」

リーフガットは乱れた髪と服装を整えながら、さも戦場ではない、  
ここは日常空間であることを意識した上で言つた。

「私にはヒュロルフター・ムを倒す馬鹿野郎どもがいましてね」

そのころ、ショッピングモールで遊んでいたサリードとグラムにもその雄叫び　本人たちにはそうと聞こえなかつただろうが　がはつきりと聞こえた。

「サリード。今の聞こえたか？」

「ああ。地響きにしちゃあ、生ぬるい、気持ち悪い音だ」

サリードは氣だるやうな表情で言つた。

戦闘は一人を待たせなかつた。

直後。

ドバアアアン！　と上から滝のよじに瓦礫が落ちてきた。

瓦礫の中心には、鉄球。

この世のものとは思えないほど暗い、鉄の球。

「なんだよ……。どうやら敵は待つてくれねえよーだな！　こちとらヒューロルフタームとの一連戦でやつと取れた休暇なのによーー！」

「ああ。そうだ。だがグラム。ここで落ち込んでる場合ぢゃないとおもつぞー」

「落ち込んでるんじゃねえ！！ 怒ってるんだ！！ 一体何処のど  
いつがこんなことしゃがるんだ！！」

グラムは叫びっぱなし。

それでも、敵の猛攻は緩まない。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
材が崩れ落ちる。

「もう許さねえ！！ 行くぞ！！ サリードー！」

「キャティちゃんは……妹はどうするんだ？」

「……」

じぱりくの」と二人は思考を停止していたが、

「大丈夫。キャティはここにいる。だからお兄ちゃんたちは敵を倒  
してきて」

強く、真っ直ぐな眼で、彼女は告げた。

「……そつか

「うん。だから安心して世界を救つてきてね？」

キャティのその言葉を聞いて、一人は走り出した。

そのヒューロルフター・ムの猛攻が地上にて続いていた。

「おのれえ……！……どこつもこいつも私の邪魔をしあつて……！」

「如何なさいますか？」

「コックピットには一人の少女が座っていた。

お姫様 レイザリー王国に所属するヒューロルフター・ム・パイロット と同じくらこの背格好、まるでまな板のような胸まで同じときた。まるで双子のよう。

その少女は機械のよつこ、抑揚のない声で今一度尋ねる。

「如何なさいますか？」

「わうだな」ヴァリヤーは暫く考え、「まずは国の施設を破壊していくとしよう。そして……あわよくば『あれ』の回収を行いたい。それが出来ねばそれすらも破壊せねばならなくなるな」

淡々と語った。

そのころ、ショッピングモールから脱出したサリドとグラムは螺旋状の階段をひたすら昇っていた。

「……まさか非常用電源になっていたとは。エレベーターも動かないわけだぜ」

「地下だから無線も通じないしな」

グラムとサリードがそれぞれ言つた。

「しかしこいつたい誰が？ まさか社会連盟と市を組んでレイザリーを潰す気か？」

「実は世界滅亡<sup>すがたかたち</sup>」が目的だつたりして……まさかそりゃねーか

グラムはグラムで自己完結した。

「とつあえず氣を抜けねーな。まだ姿貌<sup>すがたかたち</sup>がわからぬーんだ。ビッグ戦いになるかもさつぱりわからんねーぞ」

「もうだね。それにビッグでレイザリーの中心まで来れたのかな……？」 それも聞いておきたいけど

「まあ。行こうぜ。くそつたれを潰す戦いの地に、な

グラムはそう言つて壁にあつた非常用シャッターのボタンを押した。

「……どうなってるんだよ。これ……」

地上に出たサリードとグラムを待ち受けていたのは、黒い球体のようなものから手足が生えたような、ともかく、謎の物体がいた。

「……待ち伏せかよ……。」

そう言つてサリードたちは思いきり走る。

刹那。

ドゴォオオオン！と地下街の出入口が崩れる音がした。

「畜生！……あんな街中でコイルガンなんか撃ちやがつて……！……あらがもたらす磁場がどれほど影響をもたらすつて知らねーのか？」

！

サリードは叫びながらもコイルガンの砲暈から逃げるために走る。走る。走る。

「というかだ。サリード！……なんでこんな街中に50m級のヒューロルフトームがいるんだ？！……格納庫にみんな保管されてるはずじゃねえのか？！」

『これは、私独自の所有物だ』

背後から声が聞こえて、思わずそひひを振り返る。

声がする方向は ヒュロルフター<sup>ム</sup>からだつた。

「なんだ？ 最新型のヒュロルフター<sup>ム</sup>には自動音声装置でも着いてるのか？」

グラムは驚いたように言つた。

「いや、違うな。たぶんどつかにスピーカーがあつてコックピット内のマイクを通じて……」

サリードがそこまで言つたときだつた。

『「」答へ まさかそんな簡単に解くとはね。ヒュロルフター<sup>ム</sup>の設計士を指しているだけある』

スピーカーからまたも嗄れた声が聞こえてきた。

「まさか……親父、か？」

グラムが慌てた素振りで話した。

一瞬の間があつて、『私は絶望したよ。まさかお前が素手でヒュロルフター<sup>ム</sup>を倒すことになるつとはな

「……素手でヒュロルフター<sup>ム</sup>を倒す。このことに何処で絶望を感じつて言つんだよ」

『解らないか？ 前にも話したが、人間がヒュロルフター<sup>ム</sup>を倒すこととは「あつてはならない」のだ。今までヒュロルフター<sup>ム</sup>は最強

の存在、と呼ばれていたからな』

「……だからってな、その結果がこれか？」

グラムはすっかり瓦礫の山となつた街を眺めた。

『ああ。そうだ。世界を元に戻すためにはどんな犠牲を払つても構わん。そして、その先にある事までもな……』

「ふざけんなよ」

グラムは声に抑揚をつけず、ただただ平坦な声で言った。

「なんでてめえの勝手な野望のせいで街が破壊されなきゃなんねーんだ？ 死ぬ必要のない人間が死ななければならなかつたんだ？！」

グラムの叫びは地面を微かながら揺らした。

それでもヴァリヤーはひるまなかつた。

「言ひたいことはそれだけか？」

ただ、それだけを述べて。

とある少年は瓦礫の中に埋まっていた。

少年は母親と一緒に街を歩いていた訳だが、そのところヒュロルフタームの猛攻に巻き込まれてしまつたのだ。

彼は、彼の母親の名前を叫ぶ。何度も、何度も。

でも、母親は答えない。

少年にゾワッ！… とこれまで以上には感じない悪寒を感じた。

俺は死ぬのか？

少年はついこの前兵隊に入つたばかりでプログラマー戦争にも出陣していた。今回は休暇だったわけだが。

俺は死ぬのか？

その言葉だけが頭にリフレインする。

希望はどこにある。絶望はここにある。現実は絶望を、ここまで簡単に、単純に、かつ恐ろしい方法で与えるものなのか。

少年は何かに取りつかれたように体を丸くして、そのまま動かなくなつた。

俺は……。

少年は決意する。

それは何かをも動かせない程の小さな意志だが、一人の人生を変えるには大きな意志でもあった。

俺は、生きたい！

そのころ、グラムとサワード。

「ほんと……、仲間だと心強いのだけど敵になると悪々しい……！」

「リーフガットさん！」

「なぜここに……？」

サワードとグラムはそれぞれ違った反応をした。

それを見て、彼女は少しだけ笑った。

「……ヴァリヤーを追い詰めて、捕まえようとしたらこのザマヨー！ まったく、まさかあんなかくし球があるなんてね！！」

「あれはなんなんですか！？」

「あれは試作品のヒュロルフターM『第三世代』……『コードはたしか』

『ビースト、や。やうだつたかな？ リーフガットくん』

リーフガットの代わりに、ヴァリヤーが述べた。

「獸……。即ち戦闘能力が第二世代と段違いなのよ……。こいつに敵うのはヒュロルフターMしかいないし、第三世代も幻としてとらえられていた……。だから細かい資料なんて、残つちやいない……。」

精一杯の声で、リーフガットは叫んだ。

「第三世代……」

グラムとサリードはただそれだけを呟く」としかできなかつた。

『驚いたかね？ この第三世代は対社会連盟用に制作された最高傑作！ 貴様らなんかに簡単に壊せる代物ではない……。』

「ふーん。だつたらそれじゃあ、」

サリードはウエストポーチのポケットのチャックを開けた。

「試してみようか」

サリードが手にとつたもの。

それは手榴弾。

しかし、ただの手榴弾ではない。そんなものを投げても無駄、という前例があるからだ。

なのに、なぜ彼はその失敗すると決まつての道具を使おうとするのか？

『ハハハ！！ 手榴弾だと？！ 血迷つたか！！ お前らはそんなのは無駄だとグラディアとプログラマーで学ばなかつたのか？！』

「……何を勘違いしている？」

なにつ、と思わずヴァリヤーは小さく、だがサリードたちに聞こえるくらいに声を発してしまつた。

サリードは続ける。

「だれも、『外を壊すのが目的』にこれを使つだなんて言つてないんだけど？」

そう言つて、サリードは第三世代に向かつて手榴弾を投げつける。

刹那、

閃光が辺り一面に弾けた。

手榴弾は確かに爆発した。

ヴァリヤーが思った通り、“第三世代の外装の負傷は”一切見られなかつた。

「閃光で一時的に視界を封じるか……。まあそれもよからう。しかしこちらにはセンサーがある。これがあればどこに隠れようと……」ヒュロルフタームには何者がいないか探すために赤外線センサーや鉄分検知器、これは血などから何処にいるか判断するものだ、などがあり、常に稼働している。

しかし、今そのセンサーの反応を示すはずの画面が、砂嵐と化していたのだ。

「？！ そんな馬鹿なッ！ なぜセンサーが反応しない？！ ……何故だ……！」

ふと、ヴァリヤーは思った。

サリードといつ青年が最後に放つた手榴弾。

実はあれは『外にダメージを『える』ものじゃなく、

“ジャミング”によつて中の機械にダメージを『える』ものだつたのではないか、と。

レイザリー王国は資本四国の中でも一番の技術国だ。仮にそんなものが作っていてもおかしくはない。

ただ、思つたのは。

仮に、それがあつたとして、なぜあの青年は知つて いるのか?

そして。

手榴弾の爆発の一瞬の隙を狙つて、近くのビル  
ば瓦礫の山に近いのだが どちらかと言え  
に隠れたサリド、グラム、リーフガット  
トの三人は、息を整えていた。

「…………！ あんなことするなら先に言っておきなやつ」の馬鹿！  
！ 思わず死ぬところだったわ！ ！」

リーフガットはサリドに食つてかかるように叫んだ。

「でもあのヒューロルフタークから逃げるためにはあれが必要だつた。あれしか方法がなかつたんですよ。何も言わなかつたのは申し訳ないと思つてますけど

サリドは息が切れているのか、途切れ途切れに言った。

「だからつてあれはねえよ……。なんでお前手榴弾なんか持つてんだよー！ ここは戦場じゃないんだぞ！！ お前はいつもウエストポーチに手榴弾を入れておかないと不安な人間なのか？！」

「いや、グラム。違うんだよ。このウエストポーチ、いつも持つて

いつてるから軍のところにも持つててるんだよね。……で誰かが悪戯でいたんでしょう

「危険すぎるなそれ！！ 最悪自分のウエストポーチで爆発するんじゃない？！」

「でも今回は手榴弾入れた人間に感謝するわ

「それは俺も同じだ。サリード

グラムはそう返した。

「ひとまず逃げたが……、どうする？ にしても『フラッシュ・ボム』の爆発時に発生する微弱な電磁波によるジャミングをするとはな。さすがの私も驚きだつたぞ」

リーフガットがサリードに語りかける。

「兄ちゃんが武器開発に一役買つてましてね。たしか『オプグラン  
ドセキュリティ社』だつたかな」

「オプグランド……。たしかリフティアに本社を置いていたな。神  
殿協会御用達の武器制作会社だつたか」

神殿協会。

大神道会と並ぶ一大宗教として世界を蹂躪しようとしている組織。

まあ表向きには『全知全能の神「ドグ」の御言葉によつて世界を安寧に導く』ということらしいのだが、彼らは大神道会と違つて神の名のもとで、と言つて武力行使をもする連中である。

「……じゃあお前の兄は神殿協会なのか?」

「兄ビヒロが家族全員が神殿協会ですよ」

サリードは悪々しそうに咳いた。

「……そつか。なんか済まないな

リーフガットは何かを悟つてこれ以上聞くのを止めた。

刹那。

サリードたちが隠れていた瓦礫の山が爆発を起こした。

「サリード!! 逃げる!! お前が爆乳上官と話してこるうちに第三世代の通信機器は復活したよつだぞ!!」

と瓦礫の山から外を眺めて、グラムは叫んだ。

「やべえ!! つい話してたらこのザマだ!! じつやつじつを倒そう!!」

「倒すよつか行動不能に陥らせたほうが早い気がするけどな!!」

サリードとグラムは走りながら、話す。

生憎、あの第三世代はプロトタイプだったせいか速度が遅い。それがサリドたちにとっては運がよかつたことなのだろう。

「……待てよ。行動不能……か

サリドは何かを思い付いたのか、

「…………。グラム！－俺の言う場所を端末で調べてくれ……」

そう言ってサリドはある場所を囁く。

「…………お、おいつ－！ そこはたしか…………」

「……から調べる－！ たしかこいつから近いはずだ－－」

「…………わかった」

そつとつてグラムは携帯端末に指を滑らしあげた。

発電技術は少なからず向上しているとおもつ。

昔は火力やら水力やら、あつた。

一番パーセンテージを占めていたのは原子力。しかしこれは何度も問題がおき、暫く前に全廃となつた。

今は、なんの力を使つてゐるのか？

「たしか今は黄リンの非常に低い発火点を利用してタービンを回してゐるんだよね。圧力を操れば常温でも自然発火を起こしちゃうから」

「それでここにきたのか？」

「サリードとグラムの二人は暗い廊下を走つていた。

「リーフガットさんは？」

「軍隊に命じていろいろな戦車やらを連れてきて対抗するらしい。まあ、それでも一時間が闇の山かな」

「せうか。じゃあとりあえず俺らはさつとあれとあれのある部屋を探さなくちやな……。外の部隊が全滅してしまつ前に

「なあ、サリード？ いつたいなにを探してゐるんだ？」

「一人のこじるこじはレイザリー中央発電所。

レイザリー王国の全世帯の6割の電気を賄つてこじるといふだ。

「グラムさあ。話の流れからわかんないの？ 僕が何を使おうとしてこじるか」

「……まさか」

サリードの思惑を知つて、グラムは口が塞がらなかつた。

「やつれ。それを使つてあのヒュロルフター・ムを破壊する。だから、君も少し手伝つてもいいつよ？」

そのころ、外では激戦が繰り広げられていた。

かたや世界最強の装備、ヒューロルフターM第三世代。

かたやヒューロルフターMの製造によつて発展を妨げられた時代遅れの武器。

勝ち田は、見た田の時点で一田瞭然だった。

「……これほどこ、強いだなんて……！」

『じつやう頃は見くびつていたようだな？ 第三世代の凄さを』

「……じつして動力源を取り払つても動くことが……」

『「ノーナ・ビースト」』

ヴァリマーの言葉を聞こうとリーフガットは島震いした。

『名前だけなら聞いたことはあるだろ？』

「……いえ、意味すらも知つてあります」

リーフガットは深く息をついて、

「『ヒューロルフターMの抑えつけられていた真の力を引き出す』」  
「……」

『そりゃ。その「コードをつかえばおおよそ無制限に力を使つこと」が出来る。しかし「デメリット」も存在するわけだな?』

「たしか、暴走をする 正確にはヒュロルフターム個別の認識で動く……。だからノータの意志が通用しない」

『その筈だったのだよ。第一世代まではな』

ヴァリヤーが笑いながら、話を続ける。

『もしも、もしもだね。ノータがヒュロルフタームに溶け込んでそれで深いところから操つていてはたら?』

「……！ それは我々人類にとつては禁忌のはず…… どうしてそれができる…… サルベージできなかつたらどうするつもりだ！」

リーフガットは思わず第三世代に向かつて叫んだ。

しかしヴァリヤーは声色を変えず、

『禁忌？ サルベージ？ そんなの関係ないだりう？ 今私にとつて必要なのは』

『「私にとつて使えるか使えないか」だよ』

ヴァリヤーの言葉にリーフガットはうちひしがれていた。

「私は……、こんなやつの下に仕えていたのかつ……！」

『……疲れたるつ、君には結構重荷を背負わせていたからなあ』

「……なにを」

リーフガットがふと上を見るとリーフガットに向けて砲口が向けていた。

恐らく、いや確実に、リーフガットを狙っている。

『君は今今までがんばってくれたよ。私の計画の為にな。だから思つことなく死ね』

リーフガット目掛けてコイルガンが撃ち放たれる　！！

……はずだったのに、肝心の弾丸はリーフガットの体を貫いてもないし、そもそも発射されたかも怪しかった。

『……なぜだ！？　なぜヒュロルフターのコイルガンが効かない？！　この至近距離で撃てば避けられるはずがない！！』

ヴァリヤーが狼狽えていると、

『なにやつてんだくそ親父。こんなところでコイルガンを撃つとか何考てるんだおまえアホなのか?』

発電所のメガホンごしに声が聞こえた。

『その声は……グラム!! 貴様いつたいなにをした??!!』

『何をしたつて? さあね。俺は何にもしてねーよ』

グラムは、乾いた笑いの後、

『ああ。発電機をフル稼働させてコイルガンの弾道を変えるほどいの磁力を発生させたことだけかな?』

ガクン!! とヒュロルフタームの機体が揺れる。コイルガンに装填されている金属に反応している。このままだと動きに制限がかかる、簡単に動くことができない。

『……』

ヴァリヤーは考えていた。

(まさか磁力を発生させるとは……。しかもコイルガンの弾道を変えるほど、だと? そんなの無理に決まってる)

しかし。ヴァリヤーは思わずそれだけを口に出した。

(結果的に今、それが為されてしまった!! このままだとまとも

にコイルガンを撃つ」とは難しいし、コントロールも不十分になつていいく……さて、どうしたものか……）

「マスター

不意に、無機質な声が聞こえた。

「う……む

ヴァリヤーはその無機質な声に曖昧に答えた。

声は、続く。

「マスター。このあと、どういたしましょう。出力をあと14・78%上げれば動力炉を傷つけることなく磁力にどうわれることなく動くことが出来ます」

「……そつか

「稼働、させますっ

少女の答えたと同時に、コックピットが小刻みに揺れた。

「ゴウン、と音が響き、揺れはさらに増す。

その上、外にいたサリードたち。

「……あのままだと、また復活しそうだ？… サリード、どうゆる  
……」

「まあ慌てるなって、グラム。わかつてると、それくじこた

そつまつてサリードはグラムに向かを渡す。

「合図と同時にこれをやつに向かつて投げる。その隙を狙つてゴシ  
クピットに侵入する」

「サリード、おまえ何こいつなんだ？… #じでそれをやるつもりか！  
！」

グラムの間にサリードは大きく頷く。

「頼めるのはおまえしかいない。今から俺はあいつに向かう。それ  
を確認して、五秒経つたら投げてくれ。わかつたな？」

「……わかつた」

グラムは頷いて、それを受け取る。

そして。

サリードは第三世代に向けて走り出した。

横から行くのでもなく、真正面から。

「？！ あいつ、馬鹿か？！ いくらなんでも真正面から行くだと  
？！」

グラムは双眼鏡から遠ざかつていぐグラムを眺めて言つた。

それは第三世代の中にいたヴァリヤーも考えていたわけだ。

「マスター。正面からサリード・マイクロショフと思しき人間が走つ  
てきます」

「馬鹿な。」この第三世代に素手で、しかも一人で挑もう、とでも？  
そんなのは無理に決まつている」

「では、どうしましょう」

「どうもひつもない。コイルガンでも撃つて恐怖を植え付けるか

「……了解しました」

ノータは僅かに躊躇つた後、改めて操縦かんを強く握つた。

そのときだつた。

パン、ヒ。

銃声にも似た破裂音が響いた。

「？」

それを聞いて思わずノータは操縦かんから手を離した。

「お、おーー、何をしてるー、さつさと彼奴に向かって「コイルガンを……！」

「無駄だよ」

冷たい、音がヴァリヤーの首筋に響いた。

ヴァリヤーはそれを聞き、狼狽えもせず、静かに尋ねる。

「……サリード・マイクロツェフか？」

その質問に対し、銃を持つ男はもう一度冷たい音を響かせ、言った。

「ああ。そうだ」

サリドたちがやった作戦は単純明解である。

まずサリドが真正面から敵に向かつて囮になる（しかしあの一人もまさかサリドが真正面から行くとは思つてなかつただろうが）。

次にグラムたちから意識の離れる一瞬を使ってグラムが第三世代に向かつて手榴弾を投げつける。

手榴弾による電磁波によつて第三世代に取り付けられているセンサーが乱れている内にサリドが中に侵入し、ヴァリヤーを取り押さえる、といったもの。

……確かに、ここまでは作戦成功だった。

そつ。“ここまでは”。

「さあ、どうする？」

サリドは未だに銃をヴァリヤーの首もとにあてて、言つ。

「何がしたい？ 何が望みだ。サリド＝マイクロショフ」

「これはじつちのセリフだ。ヴァリヤー」

「国のトップに近しい人間を呼び捨てとはね？ 君も覚悟のうえか？」

「「つるわー。黙れ」

そう言って今度はヴァリヤーの頭に銃を置く。

ヴァリヤーは何をする素振りもなく、ただ両手を上にあげていた。なにか手があるのか、と思つていたが手にはなにも握つてないような感じもないので、その可能性は振り払つた。

「さあ、目的はなんだ？ あの子か？ それともヒュロルフターム第三世代か？」

サリードは尋ねると、彼は嗄れた声でこいつ言った。

「私はヒュロルフタームという人類の作り出した欠陥のある人間が好きなわけでもないしほしいわけでもない」

続けて、

「だがそれが私たち委員会の目的に合致するものと見なされば、なんだつて使うし、なんだつてする。人からモノを奪つたり、その為に殺したり、な」

「委員会？」

サリードは怪訝そうに顔を歪め、

「ああ。何れ人類の要へとなる存在」

「『フォービデン・アップル』だ」

「……『隠された林檎』？」

「……辿り着けるかね？ 我々の求める真実まで？」

ヴァリヤーは笑っていた。

首に銃口を突き付けられ、いつ命を落としてもおかしくないのにもだ。

「……『知恵の木の実』……」

サリードは思い出したように呟いた。

「……それさえわかれば我々の目的に大分近づいたと言えるな」

そう言つてヴァリヤーはサリードが氣を緩めた一瞬の隙を狙つて、横腹に拳をあてた。

「ぐ……あ……」

「君にここまで潜入をせられた以上、計画の実行は難しい。私はここで逃げさせてもらいつよ」

「あ……て……。」の子は……。」

「ああ。私が消えて暫くしたら催眠がとけるだらつかひ。慌てず待てば良いのじやないのかな？」

『さあ、とじわアリヤーの背中には簡易のパラシューがついていた。

「……待て！」

サリードが言ったのも虚しへ、ヴァリヤーは大きく扉を開け放ち、そこから飛んだ。

「『フォービデン・アップル』ねえ……」

第三世代を安全に停止させたのち、サリドはリーフガットとグラムに今までのことを話していた。

「なにかわかります？ リーフガットさん」

「たしかヒュロルフターム・プロジェクトの管理団体がフォービデン・アップルという名前だったわ。でもあの団体は三年前に解散させられたと聞いたけど」

「もしかしたら、今回の一連はフォービデン・アップルが関係あるかもしれないんです」

「……だらうな。ヴァリヤーが国を裏切ったのではなく、フォービデン・アップルそのものが裏切った、ということなのか。いや、そもそもそれはなんなんだ？」

「たしか『知恵の木の実』と言つたあのとき、『それさえ解つていれば正解は近い』などと謂われましたけど」

「それを早く言え馬鹿」

リーフガットは言葉よりも先に拳をサリドにぶつけていた。

リーフガットは一回咳払いをして、「……ともかく『知恵の木の実』。まためんどくさいものをヒントにしたわね」

恵々しそうに呟いた。

「そりいえばノータはどうした?」

グラムは、話の話題を変えようと半ば必死に尋ねた。

「…………」

サリードは後ろを指差す。するとそこにはサリードの肩くらいの身長の少女が恥ずかしそうに立っていた。服はノータが着るものだが、それが原因なのだろうか。

「…………名前は?」

リーフガットは笑いながら、丁寧に、最大限の優しさ（自称）で尋ねた。

「…………」

「フランシスカ＝リガンテ＝ヨシノ」

彼女は泣きそうな声ながらもはつきりと、自分自身の名前を言った。

そのころ。

ヴァリヤーは瓦礫の街を逃げていた。

最初は走っていたのだが、軍人とはいえ体は老人。体力も尽きて、ゆっくりと歩いていた。

「こんなことになるはずは……」

ヴァリヤーは息も絶え絶えながら、呟いた。

そんなときだった。

「逃げるのか?」

ふと、背中から声が聞こえた。

「……貴様、なぜここに？」

「逃げるのか?」

それはヴァリヤーの言葉に聞く耳をもたず、ただ繰り返した。

ヴァリヤーは声の発生源があるとみられる後ろに振り向くことができなかつた。しなかつたのではない。できなかつたのだ。

「……フィレイオか……。何のようだ?」

ヴァリヤーが振り向かない理由。

それは、熱。

背中から伝わってくる、熱でヴァリヤーはまるでサウナに入っている  
ような感覚に襲われる。

「……私をどうするつもりだ？」

何度も尋ねるヴァリヤーにフィレイオは答える。

とても、静かな口調で。

「なに、簡単なことですよ」

刹那、轟！… と空気を吸い込み、炎の渦が形成された。

無論、振り向かないヴァリヤーにはそれを解ることはできない。

「まさか……委員会が裏切ったとしてもどうのいか？… ヒュロルフタ  
ーム・プロジェクトの創始者である私を？…」

「ああ、やうやう。忘れていました」

フィレイオは歌つやうに言葉を紡ぐ。

「ライジヤックさんから一言、伝言です。『』お前がやも『』ってね

そして、

炎の渦がヴァリヤーを包み込んだ。

そのころ。

会議室のような部屋で大きな丸テーブルを境として何人かが座っていた。

全員分埋まっているように見えた座席は不自然にひとつだけ空いていた。

「ヴァリヤーがやられたらしいな」

一番右端にいた男が言つ。

「……やつは結構横暴でせつかちだつたからな。仕方はないだろう」

別のところにいた別の人間が答える。

「しかし、ヒュロルフタームプロジェクトに関わっていた人間を殺すとはだいぶ惜しい事をしたがね」

「なあに、仕方あるまい」

「計画の方が先だ」

ひとまず、サリドたちの「」の事を報告すべく、国王や関係各位に連絡をつけた。

そしてヴァリヤー・リオールを全世界に手配することに決定した。

……もういない人間であるといつのこと。

ただ、そのことはサリドたちにはまったく解らなかった。

ところは変わり。

「……まったく、一番“殺し”でめんどくさいのは“死体の処理”だよねー」

フィレイオがずるずると何かを引っ張っている。

それは“見ようによつては”人に見える、なにか。

「やーっと」

フィレイオは思いきり力を入れて、既に掘つてあつたであろう穴にそれを放り投げた。

フィレイオはその穴に適当に土を放り捨て、どこか当てもなく歩いていた。

「……まったく最近は組織の人も人使いが荒いよ。僕ら『オリジン』をなんだと思つてゐるんだか」

「ええと、次は何処だつたつけ?」

フィレイオはポケットに入れてあつた紙を開く。

「ふうん。南、か。まったく。次こそは面白い戦いになつてほしいもんだよ……。ありや?」

フィレイオがポケットを探ると、封筒があつた。

「これなのあつたつかな?」

フィレイオは口笛を吹きながら、ほんとうに楽しそうな感じで、封筒を開いた。

その中に入つっていたのは　写真。

「なに。次の指令はここから焼けばいいの?　……久々に面白くないそうだねえ」

フィレイオは写真を見て恭しく笑っていた。

その写真は　サリードとグラムの写真だつた。

そして、混乱も收まり、休暇も終わりを告げた。

「あー。なんだか、長いようで短い休みだったなー」と欠伸をしながらグラム。

「だつて一週間のうち2日は戦闘。3日は清掃。残りの2日もリーフガットさんの始末書を書くのを手伝つてたからねえ。休みなんてないようなもんだったよ」となんかの雑誌を見ながらサリド。

「どうか、サリド。おまえ、何読んでるんだ?」

「ああ。ヒュロルフタームのミリタリー雑誌。オリハルコンとか人エプラチナとかの新素材を特集してるみたいだから一冊買ってみた」

「へえ。それいくらなんだよ…… 3万ムル?! なんでこんな100ページもない雑誌がこんな高いんだーっ!…」

グラムの怨念にも似た叫びを聞いて、サリド。

「ああ。なんだかね、これが付いているみたいだから」

そう言ってグラムに手渡したのは……サイコロほどの大きさの小さな立方体。

「……なんだこりや?」

「なんでも『クロムプラチナ』って言つらしよ。硬度で最高を誇るプラチナと柔軟性に長けた炭素を組み合わせたとか。ヒュロルフトームの関節とかに使われてるんだと」

「……こんなもん販売しないと思つがな」

グラムは胡散臭そうにそれを眺めていた。

サリドたち一人がいた部屋に、リーフガットがノックもせずに入ってきたのは、それからしばらくしてだった。

ティータイムを優雅に迎えていた一人にとつてはこれ以上の邪魔はないだろ？

しかし彼女は一人にとつては上官。命令は絶対服従なのだ。

「リーフガットさん……？　どうしましたか？」

サリドがまず声をかける。

「どうしたもんどうしたもない。また戦争が始まるとあんたらを回収しにきたのよ」

「へえ。つぎはどうなんですか？　個人的にはリフティラだけはちよつと……」

「どうして？」

「ほら。ちょっとリフティラって気候はいいから過ごしやすいんですけど、レジスタンスが活発に活動してるじゃないですか。これまで以上に泥沼な戦いはあまり……」

「やうかー。リフティラがいやなのかー」

リーフガットはわざとらしい口調で言った。

「残念だ。ホントに残念だ。リフティラは南半球だから夏だぞ？  
楽しいバカンスになるかもなあ」

その後その二人が快諾したのは言つまでもない。

透明病、というのを知っているだらうか。

初めは風邪に似た症状を起こし、その後末端から体が透明になつていく。

そして、やがては完全に肉体が消失してしまつのだ。

原因は解つておらず、今も一千万人の人が苦しんでいとるといつ。

対処法と言えばただひとつ。毒を吸い取ることに限る。

ただし毒を吸い取る、と言つても、機械を用いるのではない。

かつて、吸收と排出を自由に操る能力の人間がいた。それも遠い昔の為、伝承に過ぎないのだが。

その人間の子孫　正確にはそうといわれている人間は排出に出来ないがどんな物質でも吸收することができる。

ただし、その物質の保管は、能力者の体内、だ。

例外は、ない。

その能力者は『シスター』と呼ばれ、自分たちのことを『シスター部隊』と呼んでいる。

一度透明病に蝕まれた体は例え毒を抜ききつても正常な肉体となる

とはいえない。

即ち、そういうことなのだ。

さて。

あの一人はどう立ち向かう？

バカنسスといえば。

海である。水着である。

しかし、いつも考えられないか？

「リフディラつて南半球かー。しかも1~2月つてことは//ニースカサンタが挙めるのか？」

「まじかつ。それはなんとも素晴らしいぜつ」

トラックの中、サリード＝マイクロシフとグラム＝リオールの二人はそんな話をしていた。

彼らは今、トラックの中であつて、トラックの中でない空間にいる。

それはつまり。

「しかしまあ、こんな飛行機でトラックを何台も運ぶなんてなあ。今回ばかりは金のかかってることだ」

「グラム、相変わらず情報収集をしない人間だね？ 今、リフディラになにが蔓延つてゐるか知つてる？」

「反乱軍だつ。それくらい解つてゐる」

「そうだ。反乱軍だ。しかし、そいつらが何をしてゐるか、それは

解ってる?」

「……」

グラムは黙つたまま答えない。

「……ヒュロルフターームは、様々な金属から構成されている。また、それは、何か一種類の金属が欠けたとき、ヒュロルフターームは完成しないことを意味している」

「なにを煙にまいたような発言していいんだ。さうと云つてくれ

グラムは半ば苛つきながら、云つた。

「だからな……僕らが今から行くのはヒュロルフターームの材料となる金属の鉱山に行くんだよ? あれをあのままにしちゃ、反乱軍の収入源となってしまうからね」

「なるほどな。即ち俺らはそれを反乱軍から取り上げるために向かう、と言つことだな」

「取り上げる、よつかは取り返す、に近いかもね。今行くことはリフティラ独立以前はうちの領土だつたらしいし」

サリドは端末を指で弄りながら言ひ。

「……とこつか、暑くなつてきたな……。これが今のリフティラか

「……」

グラムが腕を捲りながら言ひ。

「じゃ、涼みに行けば？ 今なら飛行機の冷凍室が開いてるよ。た  
だし氷点下七十度だけど」

「……サリド。つまりそれは俺を凍死させる、といつ意味か？」

リフティラ民主主義共和国。

15年前、レイザリーから独立した新興国である。

レイザリーの国土の半分にも満たない小さい国であるものの、資本主義国としてヒロルフトームも保有している立派な国家である。

しかしながら、現在、社会主義を追求する反乱軍からの攻撃を受け、政治は不安定である。豈ひならばやじりべえのよつなものか。

「そのやじりべえが完全に崩れるのを防ぐのが今回の我々の仕事だ」

ブリーフィングで、まるで大学の講堂のような広い部屋で、マイクを持つて話すのはリーフガット・エンパイアだった。

「まず鉱山にクーチュをセツトする。相手は」の前のよつた巨大生物兵器を保持している可能性が高いことみていく。みんな、心してかかるよーに」

挨拶とも言ひともされる声を兵士たちは発して、一礼し、どんどん去っていく。

「おこおこ。いくらなんでも早すぎやしないか?」

「何言ひるんだ。グラム。侵攻は深夜だよ。みんなは今から床につくの」

「……寝るのかよーー。とこつかいの雰囲気の中寝るとがある意味猛者だなー！」

「何言ひてるんだ？ 一番先に寝る君が言ひセリフじやないだろ？」

グラムの驚きとは裏腹にサリドは少し馬鹿にするように笑っていた。

そして、辺りが宵闇に包まれた頃。

「……眠い。サリド、コーヒーくれ

「そんなものないよ」

「それじゃ、お前が今手に持つてゐるいかにも暖かそうな湯気を出したカップに入った黒い液体はなんだ？」

「これはリーフガットさんの。さつき、持つてこいつて命令されたんだ」

サリドは退屈そうに言つた。

「………サリドこの間こそんな関係を作り出してたんだ？！」

「すく意味が違つ風にも捉えられるからやめてくれないかな

大きな欠伸をしながら、サリドは言つた。

少しして、リーフガット・エンパイア率いる部隊はブリーフイングどおりの配置となつた。

と、言つても何をするかは単純明解。

鉱山を壊さなによつてクーチェを出し、反乱軍を殲滅する。それだけのこと。

「あれだな。いくらなんでも今度こゝそは暇だよな。だつてまわりにいっぱい仲間がいるんだぜ」

とグラム。

「さうだな。俺だつてもともとこヒュロルフタームの設計士を目指す為にきた学生だぜ？ なんで誰もやらないよつなことをやるよつになつたんだろ？」

とサリード。

彼らは今いつたいじここにいるのか、と言へば。

「……にしても暑いなー。なんでこんな暑いところにこなきゃいけないんだ？」

「命令だから仕方ないだろ。ともかく俺はまじこで待機して仲間を待つんだよ」

サンドiegoとグラムはあるでテンプレート通りの南国にいた。

ヤシの木に、青い海、白い砂浜。

そしてそこには釣りあいの白いコンクリートの建物と迷彩服を着てアサルトライフルを持った男が一人。

「……ああ。泳ぎたい」

「暑いもんな。泳ぎたい気持ちは俺にだってわかるさ」

「それを言いたいのは私なのだがなあ」

サリードとグラムの会話に横入りしてきたのは彼らの上司、リーフガットだった。

彼女は今、普通の青い軍服にを着ているが、やはり彼女も暑いのか、持っていた書類を団扇代わりにして扇いでいた。

「ああ、暑い。ほんとうに暑い」

つづったそな口調で彼女は言った。

「でも一番暑いのは姫様でしょうね」

「わう思つでしょ？　でも実はヒュロルフターのコックピットは熱が隠らないようにしてあるし、温度を自動調節しているのよ。ノータがかく汗がノータ自身の不安要素になるらしいからね」

「なるほど。たしかに部隊の要であるヒュロルフター・ムのノータには最大限の配慮が必要ですしね」

「とうあえずやつやと終わらせね……。今回は反乱軍殲滅と同時に暫定自治の部隊引き継ぎもあるから一〇日程滞在せねばならないんだ」

「リーフガットさん。初耳ですよ、それ」

サリードがため息を、ただしリーフガットやグラムには聞こえないほど小さなものだが、つきながら言つた。

さて。リーフガットとサリードとグラムが会話をしているとき、問題の戦場はどうなっていたかといえば。

「……そんな馬鹿な」

拡声器から、声が響く。ヒュロルフター・ム・クーチェに乗るノータによるものだ。

彼女は今、部隊の半とともに反乱軍が支配する鉱山にやつてきた。

そこまで無傷でいたことがまず奇跡だが、よくよく思つと本拠地にも人がいなのでは話にならなかつた。

「……いつたい、どうこうこと?」

と、姫様は少し咳き込みながら言った。その際兵士の一人が心配して声をかけたが、姫様は「大丈夫」とだけ言って、その場から撤退した。

結論から言おう。

基地に戻つてすぐ、姫様が倒れた。

熱をはかると普通の風邪程度ではあるものの、十分に休息をとらせることとなつた。

「……疲労かしらねえ。ここ数ヶ月忙しかつたし

リーフガットは、一応予防の為にマスクを着用しているが、姫様の額に冷たいタオルをのせながら、言つた。

氷水を持つて廊下を歩くのはサリードマイクロジョンだつた。

「絶対この氷水多いよな……。普通なら水枕にしてくれよ……」

と愚痴を溢しているが、先程それは修理工のばあさんにも言つたらナットが飛んできたのでリーフガットの前で言つのはあまり好ましくない。

さて、グラム＝リオールは何をしているかと言えば。

……全員の服の洗濯である。

「……つたく、なんで俺ばかりこんな不幸な仕事ばっかり押し付けられなきやいけないんだ?」

グラムはそう言いながらも手際よく10台以上ある巨大洗濯機のスイッチを押した。

こうじうとうの機材というのは音があまり出ない、静かなものとなつてゐる。理由は単純明解で、その音によつて、敵に居場所を知

られてしまつたのを防ぐためだ。

「あー、暇だな……」

と言つてグラムは近くにあつた雑誌に手を取る。

それはサリードが朝読んでいた雑誌でグラムも横田で観ていたのだが、まあ、暇潰しなはうつてことはない。

その雑誌はミリタリー雑誌ではなく、世界の様々なニュースを取り扱つた雑誌だ。ニュースペーパーの廉価版とも言つべきだろうか。

グラムは適当に飛ばし飛ばしで読んでいた。

その雑誌に書かれているのは嘘であり真である。もともとは小さなニュースだったのが記事によつて誇大化される　ところのもよくあるケースだ。

だがしかし。

グラムはひとつ記事に目を向けた。

それは透明病についての危険を喚起したものだつた。

そこに書かれていたのは透明病が初め風邪のような症状で、後に高熱を伴つことが書かれていた。

「あれ……？　これってまさか……？」

グラムは一つの可能性を提示した。

そう。透明病というのは、

今の姫様が患っている症状そのものだったからだ。

リーフガットは医者を呼んでいた。医者といつても部隊に備え付けの軍医だが。

「ふむ……」

医者は聴診器をあて、怪訝な表情を示した。

「どうですか?」

リーフガットが心配そつた顔で見詰めていた。

「芳しくありませんね。薬を投与しても治らないならば風邪ではないのかも……」

「風邪でなければ……」

「透明病」

医者はじょじょに、齒くちばしで言つた。

「……透明病、ですか?」

「聞いたことがないよひですな。たしかにレイザリーでは縁も所縁もない病名であつましまつからな」

「その……透明病、とはなんですか?」

リーフガットが医者に丁寧に尋ねる。

「簡単だ。早い話が消えてなくなつてしまつのだよ」

医者は何の躊躇もなく話した。

「消えて……なくなる」

「ああ。そうだ。この症状の進み方から行けば……1ヶ月くらいで  
そうなつてしまつんじゃないのかね」

「助ける方法はないのか。あなたは医者なのだろう?」

「と言わてもねえ。僕は神でもないから。確かに僕は何千人もの  
人を救つてきた。だから『生と死の番人』とも喚ばれるが、さすが  
に今回ばかりは……いや、」

話が不意に途切れた事に思わずリーフガットは目を合わせる。

「そういえば、まだいましたね。透明病の毒を吸い取り、ある程度  
の条件つきだが、治してくれるところが」

「どこですか?」

そして、医者は呟く。

「……シスター部隊」

と。

「シスター部隊……」

「ええ。 そこならば姫様を助けられる筈です」

医者はすっかり髪のなくなつた頭を撫でながら言った。

「……まで。 ならばシスター部隊はどこにいる?」

「今は全国を回つて『』いる筈ですからリフティラの何処かにいるかと」

「阿呆。 リフティラと言つても単純計算でレイザリーの半分はあるんだからね……。 そこを風漬しに探すといつても1ヶ月で済むかどうか」

「大丈夫です。 大体場所は把握しています」

医者はまるで直射日光の太陽のように爽やかに笑う。

そして、医者は静かな口調で言った。

「『』から北へ60km離れた首都ウェイロック……。 そこにシスター部隊は駐留しています」

「なるほど。……しかし軍医」

「なんでもございましょう」

「なぜそれを知っている？」

「私とて昔はシスター部隊に関わりのある医者だったのですよ。その際仲のいいシスターから聞かされましてね」

なるほど、ヒリーフガットは呟いた。

「こじても……。誰に姫様の警備を頼むか……」

ヒリーフガットが虚空に手をやつた。

そのときだった。

ドアのノックが部屋に響いた。

そして。

「どうやら来たみたいですね」

笑つて、言った。

「失礼します。氷水持つてきました」

一人目はサリード＝マイクロショフ。さつき彼が言つた通り、氷水を  
ここに持つてきただ。

「失礼します。ちょっと用があつて」

丁寧な口調になれていないのか、少しイントネーションがおかしい  
二人目はグラム＝リオールだつた。

「サリード。グラム。ここで待て。すこし話すことがある」

リーフガットの平坦な口調に思わずサリードとグラムは肩を震わせた。

「……なんですか」

サリードがようやく口を開いてリーフガットに尋ねる。

「……まさかまたあの生物兵器を俺らだけで片づけようと言つたじ  
やないですよね？」

グラムがサリードの発言に付けて足したようになつた。

「違つ違つ。もっと重要な任務よ」

「？」

「リーフディラの首都ウエイロックに行って、姫様の診断が出来るシ  
スター部隊を探しに行くのよ。出来るだらうへ」

「首都へ……！……姫様に何が？　ただの風邪じゃないんですか？」

「まあ、ただの風邪ではない」とは言つておいた

サリードの聞ここせんわつとコーフガットは答へる。

「……透明病、じゃないですか」

「……グラム。お前それを何故

「……サリードが持つてたミリタリー雑誌に書いてあつただけです」

グラムの話を聞いてリーフガットは思考する。

「とつあえず」

口を開いたのはリーフガットではなくサリードだった。

「姫様を助けるために医者が必要なんですね？」

「あ、ああ。やつこい」とだ

「行きます

サリードはあつとこつ間に即決した。

「サリードおまえ……。少し考えるとかしねーのかよー。普通なら態々敵のスパイがいるであろう国を回りうなんて思わねーよーーー！」

「じゃあグラムはまつとくんだね？ 姫様を」

サリードの問いかげグラムは言葉を失つた。

答えられる言葉が、彼には浮かばなかつた。

そして浮かんだ彼なりの言葉は至極ベクトルを変えたものになつた。

「……それって好き嫌いの感情抜きなのか？」

「うつらうつらとは限らない。危険と隣り合せよ。透明病になるのは確実。それでも？」

「リーフガットさん。任務を断る理由なんて僕らではないですよ」

サリードは笑つて答える。

ところへ」と。

サリードとグラム、そして姫様を対象とした臨時のブリーフィングが開かれた。

姫様は他人間のことも考慮して閉鎖空間にひとりぼっちでテレビ電話というシステムで行われることとなつた。

それを見てサリードは少し悲しくなつたが、そんな気休めばかりの言葉をかけても意味はないと思つた。

「どうあえず首都ウロイロック迄の計画を図つわね」

リーフガットが田の前の机に大きく地図を広げた。

「ウロイロックはここから西方70km。そつ遠くはないわ。軍用車を貸すからたぶん三日とかからずに着く筈よ」

「問題はそれから、ですね」

サリードの言葉にリーフガットはしおりしげてうなづく。

「シスター部隊は何処かの宿屋に停留しているらしくて。白地に赤の十字架の旗がかけられているはずだから、それを田んぼ」

「それじゃあ、オーケー?」

リーフガットの言葉に三人ははつきりと頷いた。

「それじゃあ、行こうか」

次の日、サリードとグラムは軍用車に乗り込んでいた。

後ろの座席は取り外されてベッドが置かれている。そこに寝かされているのは姫様だ。今日は調子がいいのか上半身を上げ、ぼんやりと外を眺めていた。

「大丈夫かい？ 姫様」

助手席に座っていたサリードが後ろを向いて言つ。一応いつてはおくが運転するのはグラムだ。

「……大丈夫。今日は気分がいい」

「無茶しちゃ駄目だよ。寝れるときに寝ておいてね」

「……分かった」

サリードは微笑みながら、後ろのドビラを閉めた。

「サリード、ほんとにこの道であつてるんだよな？」

グラムはサリードが姫様と会話を終えるのを見計らつて言つた。

「ん？ 合つてると思つけど……？ ちょっと待つて。地図見てみ

る

そう言つてサリードは助手席の前にある収納スペースから少し埃がついている古こ軍用の地図を取り出した。

「えーと……今は」S76だね。このまま行けばウェイロック首都自治区に入るからあとは道なりに行けば

「りょーかい」

そう言つてグラムはアクセルを踏み込んだ。

「にしても、辺鄙な土地だよなあ。誰も彼もやる気がないみたいだ」

「みた感じ雨があまり降らない土地みたいだし農業を諦めてるんじゃないかな？ 土地も随分栄養がなくて瘦せ細つてるしね」

サリードはまたも雑誌を読みながら言つた。

「サリード。お前はほんとに雑誌を読むのが好きだな……。ってか今は何の本なんだ？」

「ん？ エーと確か……『ラミアーラの電氣学が丸』とわかるガイドブック『だけど』

「なんじやそりや

2時間後。

日が傾いてきたころによひにへへ三人を載せたトラックは首都ウロイロックに到着した。

ウェイロックはもともと城塞が建築され、それを中心として広がつた、言わば城下町である。

堅牢な建物の間を、蜘蛛の糸のように張り巡らわれている石畳の道路を軍用のトラックが走っているのだ。

一応、レイザリーとリフティアは同盟関係にあるためこいつことしばしても構わないのだが、やはりなんだかそつこつのは緊張してしまうものなのである。

「何処だううな。宿屋は……」

トラックに乗りながら、サリードとグラムは慎重にリーフガットから言われたマークの旗が掲げられた宿屋を探す。

「彼処じゃない? ほり『グラム・モーレ』って書いてあると!」

サリードが唐突に言ったので、グラムもその方を見た。

すると確かにその通り、白地に赤の十字架のマーク……シスター部隊のマークの旗が掲げられていた。

「彼処か

そう呟いてグラムは宿屋グラム・モーレの傍に車を停めた。

「失礼する」

グラムはグラムモーレの扉を開けた。

中は質素ながらも埃一つない綺麗さだった。なるほど、シスター部隊が駐留する宿屋らしいかも知れない。

カウンタに座る無精髭を顎に生やした男にサリードは話しかけた。

「ちょっと聞きたいんだけど」

「ん？」新聞を読んでいた男はサリードの言葉に怪訝な表情を見せて言った。

「（ソ）シスター部隊がいると聞いたんだが」

その言葉を言った瞬間、男の眉がぴくりと痙攣したかのように動いた。

「……あんたら余所者だろ？ しかも服装からしてレイザリーだな？」

サリードは頷く。

「だめだ。諦めな。シスター部隊は今は結構忙しいらしいからな」

そう言つてまた男は新聞を読み始めた。

「どうしたんですか？」

サリードたちが諦めて帰らうとしたそのとき、奥の方から声が響いた。  
それはとても透き通つた声で、声を聞いた者を優しく包み込むよう  
な……そんな声だった。

「シスター・ビアスター。何故この時間にここへ？」

宿屋の店主は先程とはうつてかわって、緩めた口角をこれでもかと  
いふほど高くあげ、優しい声で言つた。先程の峻厳そうな近寄りが  
たい雰囲気を放つていた店主は何処へやう。

そしてシスター・ビアスターと呼ばれた方は白いローブを着ていた。  
頭に被る帽子の部分は今は後ろの方に置いてあり鮮やかな黄色の髪  
を見せている。彼女はまるで羽と輪っかさえあれば天使のようにも  
見えてしまう存在だった。

「薬草を調合していたのですよ。ところで……どちらね？」

「ああ。じつは……」

シスター・ビアスターが困惑の表情を示しその視線をサリードに送つた。

今度は店主が困惑の表情を示した。

サリードは「じつは」とばかりにまくし立てるよつと言つた。

「透明病の患者がいます」

空気が凍りついた。

誰も何も言わない状況。

「……おや。それは不味いですね？」

シスター・ビアスターは先程の困惑の表情のまま首を傾げた。しかし、その眼は獲物を狙う蛇のように鈍く光っていた。

「とりあえず一階に運んで下さい。店主。奥の昇降機を借りります」

そう言つてシスター・ビアスターは素早く階段を登つた。三人の返答を得ないます。

とりあえず、シスター・ビアスターの言つ通りにする」とした。

車に寝かせていた彼女を下ろし、一人がかりで奥にある昇降機に持つていった。

この世界で昇降機は珍しくない。油圧式の昇降機は現在、殆どの国的主要都市に使われているからだ。まあ普通に考えれば何十メートル級の大型戦闘兵器があるのでそれくらいの技術があつてもおかしくはないだろう。

「にしても、こんな一宿屋にねえ。儲けてるんだなあ」

グラムが呟くとグランモーレの店主は恭しく笑った。

驚くべきことに、この宿屋グランモーレはシスター部隊の貸し切りだという。五階建てらしいのだが、その五階までがシスター部隊の場所として埋まっているのだという。

そして……」二階。ベッドが大量に置かれていて簡易の診療所となっていた。

シスター・ビアスターは三階に着いてから席を外すので少し待つように命じ、昇降機を用いて上に向かっていった。

……三人は残された部屋でただ俯いていた。

「……大丈夫なのかな」

サリードが唐突に呟いた。

「え？」

「たしか透明病つて永遠に治らないものなんだろ？　このまま治らないで死んじまつたら……」

「ばかやうつ」

グラムから今まで押さえ込んでいた苛立ちが零れた。

彼はたぶん何を考えていたのかわからなかつただろ？　彼は言葉より先に体が動いていた。

サリードの右頬に衝撃が走り、サリードは少し後ずさつた。

「な、なにするんだつ」

サリードが叩かれた右頬を抑えながら、言つた。

「……サリード。おまえ、何言つてんだ？　姫様も、勿論俺も、あのシスターさんだつて諦めちゃいねえのにお前だけ諦める、つてのか？　そんなの理不尽だろ？！　負けずに必死に頑張つてる姫様は諦めてねえんだ！　お前はそれが解つてんのか？！」

グラムは早口でまくし立て、さうして

「サリード。俺達が諦めちゃだめなんだよ。最後の綱なんだよ。だからお前も諦めるな。俺も諦めないから。な？」

グラムの言葉にサリードは最初は何も反応出来なかつたが、その後に頷いた。

「……あのー、少年漫画のような熱血喧嘩展開は外でやつて頂けると助かるんですが……」

不意に声がしてグラムとサリードはその声がした方を向くと、どうしたらしいのか解らずに慌てている、何か大量の物をもつたシスター・ビアスターの姿があつた。

「ははあ、それでですか。確かにこいつのは初めはとっても心配しますものね」

「申し訳ない」

グラムは何故か顔を紅潮させて、謝っていた。

風邪でもひいたのか、とサリードは聞いつとしたが野暮だつたので止めておいた。

「……とつあえずありつたけの治療薬を探してきました。といつても」

シスター・ビアスターは俯きながら姫様の方を見て、言つた。

「私だけでは完治させるのは難しいでしょう。だから、ひとつ。あなたたちに頼みがあります」

「頼み?」

「はい。あなたたちはこれから北のヌージャヤックという場所に行つてシスター部隊のリーダー、『エンゼルハンド』に会つてここに連れてきて下さい」

そのころ。リーフガットたちがいる基地では掃除諸々を行っていた。なんとなく兵士の霸気がないように見えるのは敵のアジトまでようやく辿り着いたら実はもぬけの殻だった、といつことが響いているからだろう。

「ほら、シャキッとするー。でないと暫定休暇の日数が減るよー」

パイプ椅子に腰かけて書類の束を団扇代わりに使っているのはリーフガット・エンパイアだ。彼女もまた、今回の作戦のあまりにも呆気ない結果に少なからず落胆していた。

リーフガットは自分の部屋の書類の整頓を行っていた。といつてもそこまでではなく、例えば書類の束で机や床その他諸々が覆われているとか、精々軽い掃除くらいだった。

斯くして今はテレビを見ながらアフタヌーンティーを飲んで一段落ついているところであった。

「夏とはいこの辺は寒いな……」

そう呟きながらリーフガットはアフタヌーンティーを一口、口に含む。

テレビではちょうど祭りのシーズンからかその宣伝しかやっていなかつた。といつても今は、仮にそれを見ているのが資本四国の人間としても、つざつたく感じることだろう。

何故ならば今はレイザリーの首都にて行われている慰靈祭の放送をしているからだ。たぶん世界のどこを見ても故人を偲ぶ時に世界トライアスロンの宣伝などするとは思えない。

しかしながらレイザリー王国は資本主義国の最大権力を持つ国であり資本四国でも中心代表国を担つ重要な国であり、それを仮に行つても誰も注意しない。だからレイザリーでは資本と人心倫理の欠如が見られ、それが社会問題にまで発展してしまっているのだ。

話を戻すと、『慰靈祭』とは10年前に発生したとある事故で亡くなつた人間を慰靈するためのものである。

その事故は未だ多くの謎が解明されておらず、遺族と国との間で亀裂が走つていて。

その事故とは、ヒュロルフターの“暴走”。

現在使われているヒュロルフターのナンバリングは初号機からとなつてはいるが、その大本となる零号機が存在していた。

その名はズリ。

ヒュロルフター・プロジェクトが母体となつて試作品エヴァードを作り上げ、それを基にしてズリが誕生した。その後次いでクーチエが完成するのだが……。

その間に起きた事故である。先程にも言つた通りに多くの謎が解明されておらず、また、それを原因として反ヒュロルフター派が生まれたことも事実であった。

「 そ、う、か……。も、う、あ、れ、か、ら、1、0、年、か……。時、代、も、変、わ、っ、た、も、の、だ、  
な、」

リーフガットはそう言って、またアフタヌーンティーを口に含んだ。

サリードとグラムはグラムモーレの一階にある小綺麗なカフェテリアにいた。

カフェテリアは宿屋グラムモーレの下請けで経営しているらしく、シスターが作戦会議をするなら、とそこを教えてもらったのだった。

「さて……ヌージャヤックか。大分距離があるな」

グラムはインスタントのコーヒーを皿そうに啜つた。

「そこに行くには街道を使えば行けるかな。2日もすればいけると思う」

サリードは携帯端末の画面に出てくる色々な情報を指で滑らせていつた。

「……これは結構厳しいな……。姫様の症状が何時まで持つか、あのシスターも解らないって言つてたし……。簡単に済めばいいんだけどな」

グラムは先程頼んだフィッシュ&チップスを一欠片手に取り、それをサワークリームのソースにつけて口に放り込んだ。味は先ず先ずだが腹に入れはどうつてことないし第一あの戦場で味わった軍用レーション消しゴム風味に比べればこの料理は世界三大珍味に等しいものを二人は感じていたのであった。

「……それじゃあ向かうか」

グラムは皿を適当に一ヶ所に集め、席を外した。

サリードも頷いて席を立つた。

二人はここまで来るのに乗ったトラックに乗ることにしておいた。シスター・ビアスターが最新鋭の乗用車を用意してくれたものの、二人は今まで乗つっていた車の方がいい、とそれを丁重に断つた。

二人は今長い長い砂漠の上を走っている。太陽がまるでオープンのように熱線を容赦なく二人に押し当てていた。

「畜生……。こりや熱いな……。まさかこんな砂漠があるなんて」グラムは悔しがったのかアクセルを強く踏み込み、車のエンジンが轟音を上げた。

「まあそう言わずに。これ使う?」

サリードは涼しそうな笑顔でグラムに何かを渡した。

それは、透明な薄い膜だった。正確に言えばその膜はさわると少し冷たくて、柔らかかった。例えるならば、ゼリーのような感触で。

「さつきシスターにもらつたんだ。熱中症予防のフィルムで、所謂メンソール系の薬効成分を寒天に溶かし込ませたものなんだって。軍用のサプリメントと言つて訳の解らない工業製品使うよりこっちの方がいいから、と。ま、よく言つオーガニックつてやつ?」

「……それは意味が少し違わないか?」

グラムはさつ言いながらサリドから貰つた膜を額に付けた。

その頃。

リーフガットは漸く片付け等から解放され、久々の睡眠を取つていた。

もはや戦いはないだらうといつ判断の上でのことだが、警備のため数名の人間は起こしてはいるものの。

夜も更け、生きとし生ける物全てが寝静まつた頃のことだった。

虚空に乾いた銃声が響いた。

リーフガットはそれに気づき急いで立ち上がり、外に出た。

廊下を駆け足で歩くと、慌てた顔で部下と思しき軍人が出てきた。

「上官！ お目覚めですか！」

「御託はいい！ いつたいどうしたんだ？！」

「西南の方角から発砲！ ライフルと思われます！ 数はおよそ一〇～二〇！」

その軍人は端的に敵の情報を告げる。

「ソレにいる全員を叩き起こせ！ ライフル班と光学兵器班を攻撃に回せ！」

リーフガットの命令に、軍人は即座に敬礼をした。

リーフガットはその軍人に命令をしてから自分の部屋には戻らずその廊下の突き当たりにある部屋へと向かった。

扉を開けるとすでに命令がされていたかのように、机にこじ周辺の地図が置かれていたり必要となるレーダー等が駆動していた。

「「苦労。ライズウェルト・ホークキャノン準尉」

リーフガットは部屋に入るや否や直ぐに傍の計器を見つめている女性に謝罪の意を表する。

「別に問題ないですよ。リーフガットさん」

「……私を本名で呼ぶのは家族以外にあの問題兎どもとあんただけだ」

リーフガットはため息をついて忌々しげに咳く。

しかし、当の本人、ライズウェルトは曇りない笑顔で、

「あんた何してんの？ 指揮官なんだから指揮しなさいよ」

「あ、ああ……」

こいつらのが昔から嫌いだつたが、今の関係を維持出来ているのはリーフガットの堅実かつ峻厳な性格とライズウェルトの温厚な性格に衝突がなかつたことも言えるのだろう。彼女が果たして温厚と呼

べるのか、そうには思えないが一番その形容すべきとリーフガットが判断を降したためであつたりするのだが。

「……状況は？」

「芳しくないね。西南に17の生体反応。その何れもがグラディア軍の通信機のチャンネルに設定してある」

「……軍の、リフティラ軍の、クーデター？」

「そりは考えられない。第一、もしクーデターならばもつとたくさんの人員と武器がきてるはず。なのに彼らは少數で行動してるし武器はライフル一択みたいだし。たぶんレジスタンスによるものが正しいかな」

「やつとお出ましつてわけね」

リーフガットは、怪しげに笑つた。

「ああ……。レジスタンスとやらの実力、見せてもらおうじやないの」

リーフガットは笑みを崩さずに管制レーダーを見て呟いた。

それを見たライズウェルトはほくそ笑んで、レーダーに視線を注ぎ、「久しぶりに見たわね。あなたのそんな熱い顔」

リーフガットにぽつりと、聞こえるか聞こえないか微妙なくらい小さな声で呟いた。

リーフガット・エンパイアーとライズウェルト・ホークキヤノンは幼馴染みかつ親友かつ良きライバルであった。

四年前の世界トライアスロンにリーフガットが参加した時もライズウェルトが本人の希望によつて健康管理士に任命されたほどだつた。リーフガットとライズウェルトが出会つたのは6歳のこと。代々軍人であつたエンパイアー家と代々医者であつたホークキヤノン家が出会つたのは多少なりとも無理があつたがそれでもこの友好関係が在るのはお互いの父親が良き友人で理解者であつた、ということだらうか。

リーフガットの父が、彼女が11歳のときにカムスチャル王国で死んだという時もライズウェルトの父は彼女と同じように悲しんだ。

その後はホークキヤノン家の援助を受けつりーフガットは生きていつた。彼女の父は何かあつたら、とホークキヤノン家に援助の約束を取り付けていたのだつた。

そしてリーフガットは父親の後を追つて軍人となり、ライズウェルトはもとから学んでいた通信関係の仕事を生かし彼女もまた軍人となつた。

そしてまるで大きな外の意志が働いていたかのようにリーフガットとライズウェルトは同じ部隊に置かれることとなつた。

リーフガットは父親の功績や彼女自身の功績も含めて所謂エリート

であつたので官位をぐんぐんと上げていつた。

それに対しライズウェルトはもともと仕事は好きなようだが昇進に  
関してはそこまで興味を持つていらないらしく、軍に入った当時の準  
尉という位を保ち続けているのだった。

「ちょっと、ライズ、聞いてる?」

リーフガットの声に、ライズウェルトははつと我に返つた。

「どうした? 眠いなら他の人間に頼むが……」

「いや、大丈夫。心配させてごめんなさい」

そう言つてライズウェルトは氣を取り直し、再びレーダーを見据えた。

そして、そのときだつた。

レーダーに突如ノイズが走り、その正確な情報を映し出さなくなつたのだ。そのノイズは徐々にひどくなつていき、最終的にはそれのみを映すようになつた。

それを見てリーフガットは目を疑つた。

そして、

「何してるの!! いつたいなにが?!!」

ライズウェルトに叩きつけるよひに叫んだ。

「その原因が解つたら苦労しない!!」

セーフライズウェルトは叫んで即座にパソコンを用いて修正を試みる。

大体外からダメージを受けていないとすれば、その正体はプログラムのハッキングによるものだろ？

通信機器を取り扱っている人間は一種類の技能を学ぶ必要がある。

ひとつはレーダーから読み取り、その結果を正確に反映する技能。もうひとつは外部からの攻撃に際しそれを出来るだけ最小限の被害で食い止め、あわよくば敵側に逆に攻撃を仕掛けることに関する技能だ。

前者はアウトプットされた電磁波等の見えないデータが可視化され、それを読み取る。一方後者はインプットしたプログラムコードの、即ち見えるデータが0と1に不可視化されそれを攻撃に用いる。即ち通信士とは『見えない世界』のセクションを務める存在であるのだ。

「出たわ！！ 発信源はunknow... 探知不能？！」

それを聞いたリーフガットも思わず顔を強張らせた。例えそういう道に精通していなくとも、その言葉の意味は理解出来る。

つまり“ハッキングした人間が見つからない”のだ。その人間は、もしいるとするとなるならば、パソコンや携帯端末を経由せずにそのセクションを成し遂げたことと同じ意味を持つ。

「……たぶんそんなことはあり得ない。妨害電波を出しているに決

まつてゐる

ライズウェルトはまるでコーヒーガットの心を読んだかのように呟いた。

レイザリー軍の基地を見下ろせる高台に小さな建物が建っていた。

そこはかつてはリフティラ軍の軍事施設として使われ、表向きは軍人の体力増強の為の研究を行う施設であった。

しかしそれが倫理的に違反してゐるという『大神道会』の判断に基づき焼き払われた。

今はそこにはいつ崩れてもおかしくないような建物の残骸が建つてゐるだけであった。

そんな建物に一人の男がやつてきた。

男の名はレイデン・ミーシェルハイト。傭兵だつたのか体のところどころには傷があり、中でも左目を塞ぐように縫いつけられた傷は彼の回りに誰も近付かせないような、そんな何かが感じられた。

レイデンは地下に降り、その奥に在る扉まで用心深く近づき、ある一定のリズムで扉を叩いた。

扉の中は外觀とは見違えるように綺麗で、雑然としていた。部屋は狭く、二人か三人入つたらもう詰まつてしまつような感じであった。

何故かといえば。

レイデンが部屋に入ると部屋の中には誰もいなかつた。その代わりに部屋の半分以上を占拠する“それ”はいた。

それは旧型のコンピュータらしかつた。

らしかつたとはどういふことかと言えば単純に解らないのである。これがいつ作られたかも解らない、誰が？ 何のために？ それすらも解らない。全てがブラックボックスに包まれた、そんなものなのだ。

名前はアリスというらしい。なぜアリスと解つたかと言えばコンピュータの外装に金属製のプレートが張り付けられており、そこに『Alice』と書かれていたからだ。

科学者の中にはこれを旧時代の物と唱える人間もいる。

旧時代といつてもそもそもそれがあるかどうかも証明されていないのだが、時代区分的には今いる世界は遙か昔に一度滅びたという。その“滅びた時代”を旧時代といい、今“復活してここにある時代”を新時代と呼ぶことにしているらしい。

今、それは目の前にある小さな画面に白で書かれた文字の羅列を長々と映し出していた。レイテンはそちらのほうは疎いのでよく解らないが仲間が言つにはこれはプログラムというものでこのコンピュータは仲間が指示した通りに動いている、とのことらしい。

昔からレイテンはそういうのに疎く、自分もまたそれを改善しようとしたが、なかなかたために今までこれを使えずにいるままだつた、というのもある。

彼の任務はこのコンピュータを守ることで仮にこれが陥落したら錯綜していた情報が元に戻りレイザリー軍は総力を挙げ攻め込んでくる

るだらう。なんとしてもそれは避けたい。

つまりは命綱をこのコンピュータが握つていて、このコンピュータが何らかの影響で異変を起ししただけでもゲームオーバーなのだ。

レイテンはとりあえず部屋の中にあるガスコンロを用いてお湯を沸かした。余談ではあるがこの時期のリフティラはとても寒く、夏といつた割には氷点下になることもあるのだ。

況してやうには地下。地上より寒いところは一目瞭然である。

お湯が沸き上がり、少し薄汚れた銀のカップにお湯を注ぐ。少し猫舌なレイテンは息を吹き掛けながらそのお湯を飲み始める。

そんな平和な一時を破壊するかのよひだけたましいサイレンが鳴り響いたのはレイテンがカップに入ったお湯を丁度飲み終わつたところですこしその余韻に浸つてゐるところだった。

最初は何のことだったが訳が解らなかつたようだが直ぐにその状況を理解し行動を開始した。

先ず行つたことはコンピュータには絶対に触らないよひにして小さな画面を確認することだった。

リーダーが機械に疎いレイテンの事を解つていたために最低限のマニュアルを作つてくれていたが為の行動だ。レイテンは基本何も信じずに基本自分の考えを信念として動いているのだがこの時に限つては例外で彼はこのマニュアルに従つて行動する。それほどリーダーを信頼している証拠なのだろう。

「畜生……。いつたいなにがどうなつてゐるんだ？」

レイテンはマニュアルを見ながら田の前のキーボードを丁寧にひとつひとつ打つていく。

「……Hラーフード74438? ……まさかハッキングだつてのか?」

レイテンはマニュアルに書かれた表と照らし合せたのだろう。その表と画面を日が行き來し、その度にレイテンの田は丸くなつていつた。

「どうやら失敗のようだね」

レイテンの背中に声がかかった。その冷たい声はまるでナイフでも突き立てられているかのような錯覚を呼ぶ程であった。

「リーダー……。なぜこ……いや、違うな？」

レイテンは少し違和感を感じた。それはたぶん普通の人間なら感じ得なかつただろう。僅かな違和感だつたが、それを読み取れたのは彼が傭兵だからであつ。

「……流石だね。僕を見破るなんて。初めてじゃないかな」

レイテンは妙な感じを覚えた。

それは、熱。

背中からじわじわと熱が感じられる。それと考えられないほどの緊張感も合に重なつて、レイテンはそこを振り返ることが出来なかつた。

「君は用済みだよ。だが、その後ろのコンピュータはまだ利用価値があるから大切にしろ、との上からの命令でね？ だから退いてくんないかなあ」

声はレイテンに答える隙をとらずにまた話を続ける。

「僕としてはここを全て燃やしたいんだよ？ でもね、仕方ないよね。彼らには逆らえないし、逆らつてもメリットなんてないし」

「……それを素直に従つとでも？」

レイテンは後ろを振り向き、背中のベルトにかかったナイフを引こうとして、

ふと、息を呑んだ。

何故ならそこにはいたのはレイデンの腰ほどしかない小さい子供だった。しかし目は所謂子供らしい目などではなく光の消えかけた目。腰の据わった田とも云えるそれはつまらなそうな感じにレイデンを見つめていた。

髪は炎のように真っ赤で服は仄かにオレンジ色のポロシャツ、他は……あまりよく見ることができない。しなかったのではなく、できない。

何故ならここは戦場。一瞬の油断が命取りに為り得る場所。だから、レイデンはナイフを引き抜いた。少年の姿を一瞬でも見つめた時点で油断していたことに気付かずに。

「敗けだよ」

少年はぽつりと呟いて手をレイテンの方に向ける。

そして、轟！…と炎が渦を巻いてレイテンの方に轟りこースピードで向かってきた。

レイテンは避けようとして……それをやめた。

そしてレイテンは少年が放った炎に包まれた。

一先ずの作業が終わり、ライズウェルトはほつと一息ついていた。

「お疲れさま」

後ろからリー・ガットがコーヒーを差し出す。

「ありがと」

ライズウェルトは「コーヒーを受け取り、一口飲んだ。

「アメリカンでよかつたよね?」

「ええ。砂糖は?」

「あなたは蜂蜜をスプーン一杯分」

「正解」

「とにかくライズ

「ん? なに?」

ライズウェルトはコーヒーにふつぶつと息を吹き掛けながら、言った。

「あのハッキング……。あなたなりどり見る?」

「あれは私はリフテイラ軍じゃないと思つてゐるわ」

ライズウェルトは特に考えるよつた素振りもせず、答える。

「どうして？」

「だつてリフテイラがそれをするメリットがない

「個人の軍隊がやつてる可能性も否めないでしよう？」

「だからとしても今回の襲撃は国際問題よ？ しかもリフテイラが10割悪いんだからリフテイラは周囲の資本主義国に袋叩きにされて領土を分割されるのがオチ」

ライズウェルトは「一ヒーを飲み終えたのか、カップをもつて立ち上がつた。

「じゃあどうして行動に移したのかしら……。ヴァリヤーも未だ見つかっていないし」

「もしかしたら私たちの知らない間に大きな外の意志が働いているのかもしれないわね」

ライズウェルトは小さく呟いた。

その上。

サリードとグラムはヌージャヤック籠に聳える村に辿り着いた。

エンジンをオーバーヒート寸前まで動かしたからか半日もしないでそこに辿り着いた。

そして今は村にある小さな宿屋で今後の計画を建てていたのだった。

「どうやらヌージャヤック内は洞窟になつていて無限に入り組んでいるらしい。シスター・ピアスターから聞いた『夢月夜草』はその洞窟の奥地にあるらしい、そこにいるんじゃないか、とにかくことだ」

サリードは既に長い間運転をしたのと直射日光に浴び続けたのとでへとへとになつっていたグラムに言った。既に疲れきつたグラムの代わりにサリードが村を回り、情報を収集していたのだ。

「……なるほど。つまりその洞窟を抜ける必要がある、と。厄介だな」

「辺りには金属が埋まつてゐるらしいくて時計もコンパスも正確なそれを表さないみたいなんだ。ほんとうにめんどくさいよ」

サリードはやつてつてグラスに注いだ炭酸水を飲み干した。

『夢月夜草』とは透明病唯一の対処治療薬となつてゐる薬草のことだ。

それは副作用が多少あるものの透明病の進行をある程度遅らせることが出来る、とされている。しかしながらその情報はまだ臨床実験を行っていないからか確証のあるものではない。だから世間に大々的にアピールされているものでもない。

これはあくまでもシスター部隊が独自に研究を進めていった上で知り得た情報であって、これはまだ『知識』の片鱗に過ぎぬものだつた。故に確認がとれない限り、発表は出来ない。それから行けば、姫様に夢月夜草を用いて治療を行うことが初めてとなり、これが成功すれば歴史的な快挙であることもまた明らかであった。

「……まさに最後の一手、って訳だな。それによつては俺たちや歴史に名が載るぜ」

「でもまあ、こゝまで来ると寧ろ何かいろいろとあつて怖いんだけどね」

サリードは携帯端末を片手につまらなそうに呟いた。

「何だよ。サリード。やる気ないなあ。一体どうしたってんだ？」

「君は簡単そこに言つたナビヌージャヤックつてのは人食い山つて罵られるほど遭難者が出てる山なんだよ。それを緊張感無しに登るつとする君がいろいろとおかしいよ」

「緊張感がない、って？ 馬鹿野郎！ 僕だってそれくらい感じてるよ。でも緊張感だけじゃあ登山は出来ないぜ？」

グラムは笑つて、コップに残つた炭酸水を飲み干した。

「さて、明日も早いことだし、寝るとするか……まあ君は早く寝ないだらうけど」

サコッドはひとつ欠伸をして、携帯端末をスリーブモードにする。

「当たり前だ。軍務とはこゝえ、今はプライベートタイムだからな。好き勝手にさせてもらひや」

そつかこ、ヒサコドはベッドに潜り込んで呟く。

「あ、明日苦労するのは間違だし。それは別に問題ないもんね

案の定、だつた。

グラムはその後有料の「ニュージックチャンネルを貪るように観た後、何処からか持つてき映画のDVDを取り込み、観ていたらしくしかし音声は寝ているサリドに気を利かせてかイヤホンをつけていたのだが、それでも画面から洩れる光はなおも彼から眠気を奪つていた。なんとサリドが累計睡眠時間6時間半もの間寝て、起床してもなお起きていた。流石のサリドもこれにはあきれた。

しかし当の本人は「なんだ、もう朝か？」と何食わぬ顔でサリドに返した。彼の目の人下にある立派なくまに彼自身は気づいているのだろうか、とサリドは思つてまたひとつため息をついた。

「まつたく、本当に君は馬鹿だなあ」

サリドはヌージャヤックへと向かうための準備を進めていた。横目でグラムの方を見ると、ようやく眠気がやつてきたのか、口をいっぱいに開け、大きく欠伸をしていた。

「……大丈夫、だよな？　ダメなら俺ひとりで行つてもいいんだぞ……？」

サリドはそんなグラムを心配してか声をかけた。

「大丈夫だ、問題ないぜ。いいからさつとと行つまおつ」

「人はそれを“死亡フラグ”というんだ」

サリードはため息をひとつついて言った。

『ヌージャヤック入口 用の在る方と命が惜しくない方以外はお引き取り下さい』と木の板によく見ればそう読めなくもない良く言えば達筆、悪く言えば達筆過ぎて何が何やらわからない、そんな字が書かれていた。

「すごい注意書きだな……。よっぽど危ない場所なのか？」

「そりやそうでしょ、グラム。昨日も言ったかも知れないけどここは人食い山。例年何十人もの人間が遭難してる、って」

「……緊張してきた」

「今更？ ああ、そうか。寝なさすぎて今まで気持ちがハイになつてたのか」

「ああ、そうかもしんねえな。ま、御託はここまでとしてさつさと行こうぜ」

グラムのその言葉にサリードは頷いて、グラムを先頭として、山の中へと足を踏み入れた。

山の中は当初予想していたよりも相当に入り組んでいた。

行き止まりや埋もれた道、崖すれすれを通らなければならないなど様々なことがあった。

斯くして当初の予想よりも数時間　　あくまでもサリドたちが体内時計を参考にして割り出した迄であって、実際はもつと時間がかかるかもしないし、逆にかかるかもしれないかもしない　　かけて山の奥地へと足を踏み入れた。

山の奥地は真っ暗な洞窟の中であるというのにそこだけはまるで外みたいに明るかつた。よくよく見ると吹き抜けのようになつており、そこから太陽の光が当たつているのだとthought。

そこには湖が広がっていた。この世のものとは思えない、深く澄んだ湖。そのまわりには苔が広がっていた。本当に綺麗な湖には魚は住んでいない。魚が住むのに必要なプランクトンが存在しないからだ。

湖の中には島があった。小さな、小さな島が。そこは今まで見たことのない綺麗な紫の花が咲いていて、そのまわりに一人の女性が立っていた。

まさか、と思いサリドがそちらに向かおうとする前に、彼女が反応し、彼女がこちらの方に向かってきた。

先に口を開いたのはサリードだった。

「もしかしてあなたは」

と、先の名前を言おうとする前に彼女も口を開いた。

「いかにも。私がシスター部隊のリーダーです。同じ部隊の人間からはエンゼルハンドとも呼ばれていますが、それでは呼びにくいでしょ？だから、私の本名をお伝えしますね」

彼女は眼鏡をかけていたが、その眼鏡を外していった。眼鏡越しに見た彼女の目は鮮やかなモスグリーンでとても綺麗だったが、眼鏡が外されると、まるで変態によつて今までの姿を隠していたかのように、より素晴らしい目が見られた。

サリードはそれを見て何も言えず、ただただ眺めているだけだった。

「私の名前はフィリアス・ホークキャノンと言います。以後、お見知り置きを」

笑つて、言つた。

「……そうだ。もしかしてシスター・ビアスターからすべてを聞いているのか？」

「ええ。勿論、あなたたちのことも。グラム・リオール」

「……さすがは国境に隔たり無く活動しているだけはあるな」

「讃め言葉として受け取つてよろしこうしょつか？」

シスター・フィリアスは健やかに笑みを溢して、答えた。

「あなた方は『夢月夜草』を求めてこひやつてきたのでしょうか？」  
それは、あれです」

フィリアスはそう言つて先程彼女が立つていた場所に咲いていた花を指差した。

「あれが夢月夜草？……ビリツ考へてもラベンダーにしか見えない  
のだけど……」

サリードは何度も不思議がつてその花を見た。確かにその花は端から  
みたらラベンダーにしか見えなかつた。

ラベンダーには殺菌や精神安定の効能があると考へてゐる。もしか  
したら『シスター部隊』はラベンダーの俗名を夢月夜草と呼んでい  
るのではないか、と思つた。

「いいえ。確かにこの花はラベンダーに似ているナビラベンダーと  
明確に違つ『なにか』がある。夢月夜草は夢月夜草なのです」

頭がこんがらがつてきた、とサリードは思つたことだらけ。

グラムもたぶん同じことを考へていたに違ひなく、グラムもまたま  
るで頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるかのように上方  
に頭を向かせ、腕組みをして、ただただ考へていた。

そのときだった。

『何やつてんだよ。貴様ら』

空から声が響いた。

それは子供のような声であつて、しかし声のところどころには大人っぽさも感じられた、そんな声。

『ここまで来るので時間食っちゃつたからてつきりもういないと  
つたら……ククク。定時にいるんだもんな？ リーダーの予言もア  
テにするもんだな？』

「貴様……！ 何者だ！」

しきし声は法まで

しきし声は法まで

『おつと。そんな武器じゃ僕には効かないよ。そうだねえ、もつと

……』

「何か来るぞ！ 逃げろ！」

グラムが叫んで三人が急いで走り出した束の間、

『こつじやなくちやーーー』

轟！！と空気を吸い込んで今までサリードたちがいたあたりが炎で覆い尽くされた。

「つ……！なんだあれは？！新種の火薬器か……！」

『……そんな a u t o m a t i c なものじゃないさ。これは“僕自身が放つた炎”だよ』

「……いい加減にしろ……さつさと出でこい！」

サリードが威嚇のために銃弾を一発撃ち放つ。

しかし、当たる気配などもなく、近くの岩壁に正確には岩壁に激突した。

『……やれやれ。解ったよ。この姿は見せたくなかつたんだけどね？』

なぜかつて？

『この姿を見せたものは……生かして帰しちゃいないからだよ……』

刹那、岩壁の一部が破壊されそこもまた炎に包まれた。

炎が一番弱いものは水でなく土である。現に燃え盛る炎に水をかけると大抵は消えるもののその一部は例外として水に浮いた僅かな油を利用して水を駆け上がり、さらに被害が拡大する。

それに対して、土は火の元にかけてしまえば、純粹な土であれば燃

え広がることはない。

しかしながら、その人間が何処からともなく放ったと思われる炎は違つた。

岩壁を破壊しただけでは飽きたらず、その岩壁の破片を糧にさらに炎上するに至つたのだ。しかし意外と長く点くことはなく直ぐに消えてしまつてることは、常識として存在する炎の知識とは別物になつてているのだが。

「やあ、はじめまして」

そしてその炎が完全に消え去つたときに、人の影が、その炎の中心に見られた。最初は陽炎に依るものかと思われたがその少年と思わしき声　さつきサリドたちが聴いた天井から放たれた声と酷似している　が聞こえたのでそれは本当にそこに存在しているものなのだといふことがわかつた。

そこにいたのは小さな子供だった。しかし目は子供のようなキラキラと目に光が入つて輝いてはなく、まるで死神のようなく、目をしていた。

「……貴様、何者だ……？」

サリドがまだ銃を構えたまま、呴いた。

「僕はフイレイオ。『オリジン』の四天王の一人だ」

「フイレイオ……。オリジン……？」

「セツル」

「オリジンとは何をする組織だ？」サリードは銃を構え、銃弾を一発放った。

「脅迫かい？ そんなものは僕には聞かないよ。だって僕が使つてるのは『魔術』だもの」

そつまつてフイレイオはサリードたちの方に手を向けて、

「お返しだよ

短く呟いた。まるで玩具を初めて分け与えられた無垢な子供のよう

に、楽しそうな表情で。

そして、まるでコイルガンによつて放たれたレーザーのよひに一直線に炎の柱がサリードたちの方に向かってきた。

「……なんだよありやあ！ 逃げるぞサリード！」

「え、あ、グラム……！ まだ敵は……」

「敵前逃亡じやねえ！ 戰略的撤退だ！……」

とグラムはあまり意味の変わらない熟語たちを提示して、サリードを強引に引き摺り、走り去つた。

ついあえずグラムはサリードとフイリアスを近くの岩場に引き込んだ。もつとも、それで岩をも碎くフイレイオと名乗った少年の炎から逃げ切れた訳ではないのだが。

「……グラム、どうする？」

サリードはすっかり冷静を取り戻して、沈着な面持ちで言った。

「あいつが言っていた『魔術』が本当なら俺たちは気づかない内にとんでもないやつらに喧嘩を売つてたみたいだな。……しかし魔術ってなんなんだ？」

「触りだけなら教えられることも出来なくはないですが」

シスター・フイリアスが一人の会話に口を挟んだ。

「魔術とはそもそも突然生まれたものではありません。強いて言うならば一滴づつゆっくりと落ちていった雪が溜まってコップに満たされていったような感じです」

シスター・フイリアスは続ける。

「魔術は、所謂旧時代と言われた頃から存在しているとされたものです。しかしながら当時の『魔術』とはとても机上の空論としか言い様のないもので、物理法則を無視するなど、この世界の理を凌駕するものばかりでした。だから旧時代の人間は魔術師を異能として狩りをはじめた。そもそも魔術師の素質のある人間は少ないです

ら。それで魔術師の殆どが死んでしまいました」

「それから“魔術師”という名を冠する者は姿を消しました。しかしながら魔術師の素質を持つた人間は完全に世界から消え去つていなかつたのです」

「旧時代から魔術師と魔術というものがあるとは……初耳だな」

「科学の興隆した旧時代が滅んだ理由も魔術が関係があるとされています。噂によれば魔術の衰退を恐れた魔術師が大規模な魔術を地球そのものに組み上げ、地軸を数度ずらす事に成功したらしい、というのです」

「地軸をずらすとなると世界そのものの気候が崩壊し人間そのものが滅亡するのでは?」

「全くもつてその通りです。現にその魔術は地球の磁気に大きな影響を与えました」

「磁気に? それで人間は滅んだというのか?」

サリードの言葉にフィリアスは首肯し、続けた。

「当時、人間はロボット……人が造り上げた人間、ですね。それを造り上げました。そして人間がすることの殆どを彼らが担うこととなつたのです」

「……さて。CPUは磁気の僅かな乱れにも弱いとされています。それが、その僅かな乱れが地球全体に発生したとしたら?」

「……まさか！」

「そう。 そのまさかです。 CPB が磁気の乱れによって我を失い人間に反旗を翻し、そして人間は滅んだ、とされています。その魔術師が望んだとおり、科学が興隆した世界は完全までに破壊されたのです」

「そこまで知ってるなんてね。あの連中が君を目の敵にしてる理由も何となく解る気がするよ」

気づいたら目の前にフィレイオの姿があった。ビリヤッテここまで来れたのか、と問い質そつとすると、

「だから言つただろう？ 魔術だよ」

地面が、震えた。

正確にはフィレイオが放つた目に見えない何かに大地が共振していった。

その俄に信じがたい行為を三人は目の当たりにしていた。

「マイクロウエーブでも放ちやがったか？！」

「マイクロウエーブ？ ふふん。君たちの方ではそうと呼ぶかも知れないね。でも僕らにとつては違う。これは『龍脈』を用いた簡単

な共振反応だ。あつ、龍脈つてのは大地に流れる氣のことだね？まるで人間に流れる血潮みたいに複雑でこんがらがってる。そのかわつ世界のありとあらゆるところにはあるんだけどね

フィレイオはそう言つて、消えた。

それを見て、サリドとグラムはただ何も出来ず、たじろいでいた。

「……何処に……」

そう叫んだグラムは、辺りを一巡りして、

何かを発見した。

それは彼の隣に立つサリドの後ろにあった。

それはサリドがフィレイオの裏拳をいなして それはグラムの想像だが、たぶんそうに違いない 二人が睨み合つてゐる、そんなところであった。

「貴様……？」

そのときグラムにはフィレイオの顔が大きく歪んだようにも見えた。それはきっと彼より一番近い位置にいるサリドもはつきりとそう見えたことだらう。

「これでも昔は武術をたしなんでいてね？」こうこうゆつくりでスピードが感じられないパンチを受け止める」となんて朝飯前なんだよ」

かつて、ヒュロルフター<sup>ム</sup>による巨大代理戦争が合理化される前はそれなりに昔の戦争スタイルを維持していた。昔の戦争スタイルとは所謂銃や地雷などを使い人と人が闘うものであった。

そんな中、そんな昔の戦争スタイルに取り込まれたレイザリー<sup>特有</sup>の武術が存在する。それは銃弾を一瞬でかわし、地雷を流れから感知する……といったものだ。

ヒュロルフター<sup>ム</sup>合理化によりその武術の必要性は今もなお喪われていない。

その武術を一家相伝する家系こそ。

マイクロ<sup>シ</sup>ュ<sup>フ</sup>家だったのである。

「貴様ア…… 何処まで僕を侮辱すれば…… ……」

「無駄だよ」

サリードはそう言って腰を低く構え、消えた。

「消えた…… ! ! 人間のくせにか? !」

フィレイオは低く呻いて辺りを見渡した。

「人間を甘く見ているからやられるのさ」

フィレイオがその声を聴いた瞬間。

彼の顔が外から受けた大きな力によって大きく歪められた。

サリードの拳による、大きな一撃で。

「う……ぐ…… ! !」

フィレイオは大きく後退り、体勢を立て直そつとする。

しかし、

まるで自動車に激突したような衝撃を、再びフィレイオは浴びる」ととなつた。

サリードがもう一撃拳を加えたのである。

「人間がつ……！」 なめるなよ……！」

そう言つてファイレイオは構えた。

それを見てサリードは無意識に構えて、相手の反応を待つた。

「……まったく。僕がこんな人間」ときに痛手を負うなんて思わなかつたよ……」

だが、それも終わり。茶番もここまでだ。

「みんな、みんな消し炭になつて消え去つてしまえ……」

ファイレイオが叫んだと同時に、彼の掌の上に大きな炎の塊が“突如として”出現した。

サリードはそれを見て一瞬眩を感じたが、なんとか取り戻しそれを見た。

「なんじゃこりゃ……。あんなのにやられたらみんな死ぬぞ……！」

グラムが低く呻いた。それを見透かしてたかのようにファイレイオは鼻で笑つて、

「そうだよ。お前らみんなここで死ね。そして薬も届かないノータが死ねばレイザリーの崩壊、世界秩序の崩壊さ。ああ、なんて面白いんだろ？！」

そつまつてフイレイオは壊れたように笑つた。

「ふざけるな……！」

その口を開いたのはサリドではなくグラムだった。グラムは拳を握つてただその姿勢のまま小刻みに震えていた。

「なんだ？ ビツした。何もできないくせに？ そのお前が何かするか？」

フイレイオはグラムが今まで何もしてこなかつたのを覚えているので、余裕をまた持ち始めたのか、冷笑した。

「世界秩序の崩壊だあ？ そんなのがお前らに出来るかよ！－！ ビいつもこいつも自分勝手！ いい加減にしろ！」

そつまつてグラムはポケットから何かを取り出した。

それは。

「グラム……！－！ お前、それを何処で？！」

サリドが持つていたはずの、手榴弾だった。

「……時間切れだよ。もう終わりや」

フイレイオが手に浮かんだ炎の塊を槍投げの要領で投げよつとした、そのときだった。

どこか古めかしい電子音が洞窟内に響いた。

そしてその音を聞いてフィレイオはポケットから何かを取り出した。

それは、携帯電話だつた。

「もしもし。なんだ」

少し苛立ちを見せて、彼は電話に出た。

『…………』

「なんだ？ まだ任務は終わっていないぞ？」

『…………！』

「解つた。解つたよ。とりあえずそういう方向なんだな」

それだけを言つとフィレイオは電話を切つた。

「……運がよかつたな」

フィレイオはさつて炎の塊を血らの手で消し去る。

「さうやら一時休戦のようだ」

なぜだ？

「そんなことは聞くなよ。あのお方からの命令でな」

さつてフィレイオは血らを炎に包み込み 消えた。

+

一先ず、積もる話はあるにしろこの夢月夜草を持つてシスター・ビアスターの待つあの宿屋 グラン・モーレに帰らねばならない。そもそも、その為にここに来たのだから。

「それじゃあ、これくらいあれば十分でしょ」

さつてシスター・フィリアスは五本ほど花を摘んで、言った。

「それじゃあ帰りますか。この花を用いた治療はなぜか私にしか出来ないのでしてね……」

二日後。

一先ず彼らはシスター・ビアスターと姫様の待つ宿屋グランモーレに到着した。フイレイオという謎の男との謎めいた戦いは置いとくとして、最終目的地であつたここに辿り着いた。

その後、と言つてはなんだが、その治療は成功した。

ただし回復する二二日の期間を要してしまったのだが。

リーフガットにその後連絡を取つたといふ、

「遅すぎだ馬鹿。私がどれほど上層部に頭を下げたと思つてこる」

……逆に怒られたといつ。

その二回。

「どうしてあの者を逃したのですか?」

フイレイオが宮殿のような、洞窟のよつな、暗闇がすべてを支配している、そんな空間について、誰かに問い合わせている。

「……つまり、私に責任があると?」

暗闇の中で、声は答えた。

「ええ。何故逃がしたのか、聞かせていただきたい。彼処で逃がしても我々にメリットは存在しないはずだ」

「ああ、確かにその通り。我々にメリットはない」

暗闇は首肯する。あくまでもそれは実体化したわけではなく、そのように見えただけではあるが。

「だが、それは現在の我々にとつて、なのだ。未来の我々にはそれ相応の価値がある、といつ『予言者』からの思し召しだ」

「また予言者か……」

そいつてフイレイオの顔が苦悶の表情で染まった。

「まあそつ顔を歪めるな。せつかくの美貌が台無しだぞ？」

「『』の男顔を見てそいつとは……。皮肉つているのか？ エレキス」

「いやいや。君は立派な“女性”ではないですか」

エレキス、と呼ばれた人間と思しきそれは乾いた咳をひとつふたつして言つた。

そして、サリードとグラムは本国に帰還するため飛行機 といつても来るときに乗つた無機質な軍用機だが に乗つていた。

「あー。今回も今回で大忙しだったな」

「そうだね。しかしある意味ヒュロルフター「ム」とドンパチやるより疲労がたまつたかも」

「それは言えてるな」

「サリード・マイクロシエフとグラム・リオールはいるか?」

部屋でインスタントの「コーヒー」を飲んでいたサリードとグラムに突然リーフガットがやってきた。

「どうしたんです? まさかまたヒュロルフター「ム」となんかやれとか……?」

「もう俺はヒュロルフター「ム」と曲芸大会じりつて言われてもやるかもしんねえな」

「違う違う。今回は『世界平和』に関わることよ。ヒュロルフター「ム」は一切関係無し!」

そう言つてリーフガットは数枚のB5のレポート用紙をまとめただけの束を一人に渡した。

「……これは?」

「世界トライアスロンのプログラム」

リーフガットからそれを聞かされ、二人の目が点となつた。

「……えーと、つまり、どうこう?……?」

「えーと簡単に言えば、あんたらもトライアスロンに出てもいいわ」

リーフガットはただ無感動にそう言った。

そのころ。

見るからに國の重要人物、所謂VIPが乗るような絢爛豪華な飛行機に一人の少女が乗り込んでいた。

その少女はただ何も言わず、何か怒りを感じているようにも見られたが、彼女自身いつもこの感情であるため変わりはない。

「アリア、気分はどう？」

彼女 アリアが誰もいないファーストクラスの真ん中の座席にこじんまりと座った直後、ちょうど彼女からみて目の前に備えられた小型テレビに映像が流れ始めた。

それは真っ白な壁に白衣を着た茶髪の女性を撮しており、声はその人間から発せられたものだ、といふことが見てとられた。

「ああ……大丈夫ですよ。何も問題はない」

適当に返事をして彼女は目を瞑った。

「そう。ならないわ。なんかあつたらいってね」

テレビに映し出された女性は笑つて言った。その後にテレビの電源が自動的に切れ、彼女もまた深い眠りについた。

「フランシスカ＝リガンテ＝ヨシノ様ですね。」あらがパスポートと旅客券のチップとなります。大切に保管しておいてください」

カウンターにて軍用服を着た清楚な感じの女性がそう言ってカウンター越しに立っている少女に手のひらほどの大きさしかない透明なプラスチックのケースを渡す。

少女はなんだか腹の居心地が悪いようで終始なんだかぎこちない表情を見せていた。

少女はそれを受け取つて、何も言わずに一礼し、立ち去つた。

パスポートや飛行機旅客券などの所謂公共交通機関に乗るために必要なもの、今はデータ化されている。データの方が管理がしやすいし、仮に何かあった場合直ぐ様反応が出来るようにしてあるためだ。

少女は軽い鼻歌混じりでショッピングモールの大通りを進む。彼女は時々花屋や服屋、さらには本屋によつて自分の欲しいものをチェックしているがそれもウィンドウショッピングまでに留めている。

何故ならば。

「いけない……。あと3分で待ち合わせの時間じゃない？！　あの護衛「バカ」なんで起こしてくんなかつたのよ！－」

そう言つて彼女は乱暴にキャリーバッグを引き摺つて走り出した。

## オリンピアドーム。

かつて旧時代では常夏の島としてリゾート地になっていたという群島も今は機械的に気候が調整された人工浮島になっていた。ここはもともとかつて存在していた世界連合軍の施設であつてそれをレイザリーが改良して造り上げたもので、一言でまとめるならばここはレイザリー軍の軍用施設であるのだが、現在は一年に数回だけ一般人に開放される。

今行われている世界トライアスロンが、その例だ。

戦争に関わりのない一般人にとっては戦争は負のエネルギーの塊と思われるるのは明らかである。昔と違つて戦争の勝敗が明確に決められなくなつたので、国民は尚更戦争に向けて猜疑の心を傾けているのだった。

しかしながら、この世界トライアスロンは違つ。

資本四国、レイザリー王国が主催したこのお祭りは資本主義国に置かれた企業の巨大な宣伝の場となつてゐる。さらには自社の生産する武器の平和志向性を世界にアピールする場にもなるのだ。

世界には戦争をショービジネスとする人間もいる。

これほどまでも武器を“他の国々にアピールできる機会”は少ないからだ。

しかし戦争の非人道的な生産性を排除するべくレイザリー王国が数年前に始めたものこそが、この世界トライアスロンなのであった。

「それが世界トライアスロンの成り行きってわけか。まったく、レイザリーも訳の解らないものを作り出したな」

神殿のような、石柱の立つ空間には一人の女性が立っていた。

白い修道服に身を包み、あるいはとか口の方までも布で覆っていた。

女性は、田の前にあつた大きな像を一瞥した。

それはその話している女性によく似たものだつたが、それとなく違つてゐるのが見てとれた。

「レイシャリオ枢機卿」

ふと、レイシャリオは声がかかつたのに気付いた。

隣を見ると教会の牧師が着るような黒ずくめの服を着た茶髪の男が立つていた。

「ナウラスか。どうした?」

レイシャリオが尋ねるとナウラスは待つていたかのように話し始めた。

「部隊030が準備を開始しました。いつでも準備は完了です」

ナウラスは自分のやつていることは正しい、と見せつけるように胸

を張つた。

「解つた。それでは始めよう。総ての平和を求める人へ」

そう言ってレイシャリオは像に向かってひざまづき、黙祷を始めた。

0 - 2 (後書き)

次回更新：12月11日予定。

……そんな物騒なことが起きてるとさも知らないだらうオリンピアードームは今日も雲ひとつない青空であった。

世界トライアスロンの開始を明後日に控えたオリンピアードームは多少の喧騒はあるものの着々と準備が進められていた。

選手とその関連する人間は既に入場を許されており、それらを含めるとあとはスタッフくらいしかいないので人通りは疎らである。

「……んで、なんで、俺らがここにいるんだ？ サリード」

「仕方ないだろ、グラム。毎年この時期に『これがある』ことくらい解つてんんじゃないのか？ 選手の防衛役抽選。その度にプロのボディーガードを選ぶとお金が嵩むし機密性が守られる、とかどうとかで」

グラムの発言にサリードは携帯端末を弄くりながら なんとなく何かを調べているようにも見てとれるが 言つた。

「まあ、そういうんだろうけどな……。なんで“あいつ”的護衛なんだよ！？」

「グラムは結構なめてるかもしけないけど彼女あれでも相当な実力の持ち主なんだよ。しかも天性の素質を持っていて、かつ努力家。これはさすがの君も真似できないんじゃない？」

サリードはふやけたように小さく笑つた。

「で、その話は出来たら本人が居ないときにして欲しかつたなんですが、  
けどねえ」

フランシスカはサリードの後ろで畳を痙攣させながら、言つた。

「いやはや……。聞こえてたか?」

「当たり前でしょ?!. あんたノータのことなめてるでしょう!..」

「別になめでは居ないんだが……。そんな言葉遣いでいいのか?  
これでも一応世界大会だから粗を世界から探されてしまふぞ」

「そんなの、探せるものなら探せばいいの。私はそんなの一切ない  
完璧ですから」

ああそうかい、と適当に相槌をついてグラムは天を仰いだ。

「着いたぞ」

そこにあるのは、天が震むほどの中さがあるマンションであった。

マンションは一人の選手がワンフロアもうかるという非常に豪華  
なつくりであった。

「えーと……27階か。グラムよろしく」

サリードは荷物を抱えて重たそうに苦悶な表情を示した。

「へいへい」とやる氣のない声でグラムはエレベーターにある27のボタンを押した。

サリドたちを載せたエレベーターが27階に到着し、扉が開いて三人の目に入ってきた光景は、なんとも形容しがたい景色でもあった。まず、あるものは家具全般。だから棚からテレビからパソコンまで。その全てが最高級の品々だった。なぜ解るかといえば、

「凄いな……。まさかここまで最高級だとは。ノータッていつもこんな感じなのか？」

本をいつも貪るように読む男、サリドがいたからであった。

「まあね。でも私は軍職になつたばっかだし。私より仕事が長い人間は国にも困るけどこれ以上の装備なんじゃないかしら？」

フランシスカはため息をついて首を横にゆづくつと一往復振りながらそう言った。

「まじか……。悔れない。さすが国のVIPだけはある……」

グラムは呻くように呟いて、ふと思つた。

確かに、家具はもともとオリンピアドーム側から支給された、いわば備え付けのものである。

しかし、

なら“そのまわりにバベルの塔の”とく積み上がっている大量のダンボール”はなんだ?

グラムがそんなことを考えていると、奥から声が聞こえた。

「おかえりー」

「……ただいま」

フランシスカは鬱陶しい素振りを見せた。もう数える気も失せるくらいの回数彼女はこれをやっていたのだろうか?

「さつさと出てきなさいよ

フランシスカは次いで付け足すように言った。

そこにいたのは如何にも医者のような人間だった。白衣を着て、セミロングの茶髪を首のところで縛っていた。眼鏡をかけていた彼女は笑つて言った。

「はじめまして。私、ラインスタイル・ホークキヤノンと申します。今回フランシスカ＝リガント＝ヨシノの健康管理を担当させていただきます」

「ホークキヤノン？ 聞いたことのあるような……」

サリードはそれを聴いて少し唇を歪めたが、

「はい。先日は妹がお世話になりました」

「……あつー」

「どうしたサリード？」

「フィリアスさんだよ。エンゼルハンドの。なるほど。彼女のお姉さんなのですね？」

サリードが言つとワインスタイルは首肯する。

「私どもホークキヤノン家は医学に秀でた家系でして。代々医師などに就くのが多いのです。シスター部隊にも入隊している人も多いです。……まあ姉は違いましたが」

「姉……？」

「ライズホールトを」存知ですか」

ラインスタイルは言つたが、サリードには聞き覚えのない名前だったし、それはグラムも同じだ。

「やはりわかりませんか……。実はレイザリー軍に入隊しているらしいんですね。たしか通信士になるとかどとか。だから嫁の貰い手が見つからないのよ」

「それはあなたも同じよ? ラインスタイル」

フランシスカが少し苛立ちしながら、やつとつ言つた。

「……、フランシスカ。どうする? まだ準備を始めるには余裕があるだろ? ちょっとこの人工浮島を巡つてみたら? なんか発見があるかも」

ラインスタイルはたくさん積まれているダンボールのうちのひとつを切り、そこから水筒を取り出し蓋を開け、中に入っている液体を口に含んだ。なんとなく彼女の口から溢れて洩れ出した色がどうみても飲める色ではなかつたのが気になるところだが。

「変わり者だろ? あいつは」

フランシスカは傍にいたサリードに小さく呟いた。

サリードはただその風景を見て苦笑いすることしかできなかつた。

さて、とつあえずサリドたちはラインスタイルの助言をもとにこのオリンピアドームをふらふらと巡ることにした。例え島とはいえ、その大きさは計り知れず、島内の移動に車を有するくらいであった。なのでこの島にはレンタカーショップが数多く並んでいる。別にどの車でも構わないが数多の種類の車を借りれるショップは安価で借りることが出来、少ない種類しか借りれないショップでは借料が高価になる傾向にある。しかしながら手入れやサービスの面から考えると後者の方がより丁寧に行ってくれるため、後者はブルジョワ向け、前者は一般市民向けと無意識のうちに分類が為されているのだった。

サリドたちはとりあえず島一番（値段の高さ的な意味で）のレンタカーショップに向かった。目ぼしいものはもう借りられていたのだが唯一一台だけ車が残っていた。

それはよくある軽乗用車で『定員：4人まで』と車の中に入っている札に書かれていた。

色はスカイブルーでナンバープレートは軽乗用車を示す黄色。しかも驚くべきは価格。なんと普通にそのショップで車を借りるよりも一個少ないのだった。車種に値段が比例するとはいえないくらいなんでも安過ぎであった。

「……、これにじょう

フランシスカにより一発で決められる。なんてブルジョワなんだ、

とサリードは改めてノータの世間づれを知ったのだった。

「じゃ、これお願ひしまーす」

最近出番を奪われ氣味のグラムが軽い足取りでカウンターへ向かつ。カウンターに座っていたハワイシャツを着た男 レンタカーショップよりも海の家を経営しているほうがお似合いのような氣もするが は恭しく笑つて、書類を渡した。

「……よし、これで大丈夫だ」

グラムは書類を確認して独りごちる。

「そーいや、これは誰が運転するんだ?」

グラムが書類の束を、恭しく笑いながらサリードとフランシスカが辺々しい親睦を深めている場に割り入つてきた。

「なに行つてるんだい? 僕は“本業は学生”なんだから免許を持つてないし、運転することも出来ないよ? もしかして彼女に運転させられるつもりだったのかい?」

「……、」

グラムは答えられない。

そんなことは解りきつていたのだ。サリードが免許を持つてないから運転させることは、たとえこの平和の祭典としても、許されない。かといって選手であるフランシスカ自身に運転を任せることなんて出

来るわけもない。そもそも彼女は車の運転が出来るのだろうか。

「……いや、ADAがあるくらいだしな」

ADA。

グラムが独り言で言つたこれは正式にはAutomaticaly Driving Abilitiesの略称で、『自動的運転才能』と呼ばれるものだ。

ノータになつた人間には元から備わっていたのか、はたまた改造によつてその能力を“強制的に”手に入れたのかはわからないのだが、そんな能力がノータにはあつた。

簡単に言えば『どんなものでも運転することができる技能』のこと

で馬から車、飛行機なども運転することが出来る。

これの由来としては旧時代にいたとされるどんな乗り物でも乗りこなすとされたアーサーという青年　　のちに彼は“ブリテン”なる國の王になつた存在らしかつたがそれをグラムは知ることはない  
の解析を進めた結果、その能力があることが判明したのだ。しかもそれは遺伝することが分かり、ノータはその遺伝子検査によつて選ばれたとそれでいる。

されている、というのはサリドたちのような軍人や学生が知るような事実ではない、ということで現にサリドたちが知るこの知識も雑誌や携帯端末でブラウジングして得た情報であり、これもまた憶測の域を過ぎないのであつた。

「……、おーい？　グラムどうした？」

サリードの声で、はつとグラムは我に返った。どうやら思考し過ぎて辺りが見えなくなってしまったらしい。猪突猛進な彼らしいことではあるが改善すべき課題もある。

「あ、ああ。ところで、どこに行くんだ？」

「うーん」サリードはガイドブックを見ながら、「とりあえず、適当に一周してみようよ。そうだな。お腹も空いたから田舎っこいところで、飯でも食べようよ。フランシスカもどうだい？」

サリードの言葉にフランシスカはひとつ大きく頷いた。

もう仲良くなつてやがる、と言わんばかりにグラムはため息をついて一人にシートベルトの確認もせずアクセルを踏み抜いた。

## 0・5（後書き）

次回更新：12月13日を予定しています。

一日後。

オリンピアードーム中心にある射撃場に大勢の人間が集まっていた。そこには『射撃場』という存在であるものの、やけに広かつた。きっとかつて行つたショッピングモールに近い面積であるひつじはサリードの目視でもだいたい解ることだった。

射撃場はスタジアムのようになつており、一階席、所謂観客席である場所、にはフィールドにいる人間の関係者というのは明白だった。

サリードは携帯端末をいつものように弄くつてしまいなかつた。きっと入場時に係員から没収を喰らつたのだらう。

そんなサリードは今、表紙に可憐らしい女の子をあしらつたものを読んでいた。

「あれ？ サリード、そんなの興味あつたつけ？」

「ん？」 サリードはグラムの話を聞いて指されている表紙のグラビアを確認する。

「ああ、これは表紙詐欺だよ。中身はちゃんとした特集」

サリードはさすがに半ばめんどくさそうに中を見せる。中にはでかでかとした『シックで『世界トライアスロン特集！』』と書かれ

ていた。

「これを読むと結構面白いのが書かれててね。世界トライアスロンは今年で10回目なんだってさ」

それをはじめに、サリードはどうぞんと話をつづけでいった。

サリードが言つたことを要約するならば。

世界トライアスロンは10年前にレイザリー王国が企画したお祭りである。

銃も、剣も、ヒュロルフタームも、用いない。まさに平和の祭典、である。

競技は全部で7つあり、トライアスロンと「よつかは総合体育大会のほう」がベクトルが強い。

水泳、マラソン、射撃、弓道、砲丸投げ、体操、自転車レースの7種だ。これは固定されて毎年同じ競技をするわけではなく、各国の代表が協議して決めるのだと。

そんな『平和の祭典』ではあるが、やはりそこは今の世界である。

競技者が狙撃され、そのまま戦争に発展してしまつとも有り得るのだ。

「世界トライアスロンの競技者はヒュロルフタームのバイロット、ノータであることはルールブックに記載されており、それは守

うねばならない事実である。

ノータは各国の最高級ノーマンで國に拠つては最高權力者よりも守るべき存在であるといふもある。

即ちその人間が狙撃されるといふことは、仮にダメージを負わなかつたにせよ他国からの攻撃を受けたことと等しい。

世界トライアスロンは各国どつしの不可侵条約の下成り立つてゐるが、所詮それも只の紙切れであつて、それで安全が完全に保証されてゐる訳ではない。

だけどもそれを言つてゐる状態ではオリンピアドームへの観光客が見込めないため、資本四国は連合軍を形成し、その治安を守つてゐるのである。

グラムはサリードから聽いた話にしばらくなずいていたが、そのうちにそれすらもやめてただなか難しい物事を考へてゐるような表情へと化した。

「……つまり、最高級ノーマンで國に拠つては最高權力者によつて世界の平和を再確認させる、つてことか？」

「そーいうこと。ま、今はそれも無くなつたみたいだから余り心配しないでいいんじゃないかな。備えあれば憂いなしだけどね」

サードはつづいて雑誌を閉じる。

グラムはそれを見てしばらく不審に思つてゐたのだが、

刹那、射撃場を揺らす程の歓声が、射撃場自身に溢れた。

「うおっ……！ 始まつたか！！」

「毎年見るけど相変わらずすげえなあ。なんてつたつて世界中の人間が溢れるんだろ？ これが“平和”ってやつなのかねえ」

そう言つてグラムは先ほど買つておいたドリンクを飲むことにした。

「ついに、始まりました～！」

直後にマイクで拡声された女性の声が会場に響いた。

「わたくし、今回の実況と進行役を務めさせていただくレナ・ポールウェルトです！ この一週間宜しくお願いします～！」

レナの言葉の後、会場を何故か先程よりも大きな黄色い声援で包み込まれる。

「なんだありや……。すげい人気だな……」

今度はサリードが驚く番であった。そして今度はグラムが意氣揚々と説明を始めるのだった。

「なんだ？ 知らないのか。ありや、資本四国一のアイドル、レナちゃんだぜ。彼女が動くとそれこそ金が動くって言われてる。今の資本四国のテレビは彼女がいなきや成り立たないだろうな」

「……なんだい。グラムって意外とミーハーだったのか？」

「なんかお前に言わると心底腹が立つな」

グラムはさう言つて再び会場を観る。

「それでは～」

レナはそれを持つのに抵抗を示さなかつたのだろうか。拳銃を持つていた。

もう古い拳銃だ。かつて警察といつ治安維持を目的として設置された組織が愛用していたもので、警察廃止後、おもにヒュロルフター<sup>ム</sup>による戦争が認められてから、その拳銃は使い物にならなくなつていた。

しかし、むしろそれを見てサリードは疑つていたのだ。

今やあの拳銃は治安維持のためではなくむしろその逆に使われてしまつてゐる。

URUという組織を知つてゐるだらうか。

正式にはUnder ground Resistance Uni  
onと呼び、その頭文字をとつたものである。なるべく単語に近い訳し方をするのなら『地下抵抗連合』とでも言ひべきだらうか。

それらはかつて使われていた所謂『文化の遺物』を用いる傾向にある。

彼らの目的はあまりよく解つてはいない。

だからJNA、各國もURUの動きに慎重になるのである。一つの誤つた働きが彼らに好影響を与えては困るのだ。

「第十回世界トライアスロン、開幕ですっ！」

刹那、レナが拳銃を構えた腕を高く掲げ、三発ほど銃弾を撃つた。

それを合図と言わんばかりに射撃場まわりから花火が何発か空に咲いたのだった。

恐るべきことに、初日はこれで終わりである。

「意外とゆるいスケジュールなんだな……。次の競技は明日の午後2時からだとさ。つまり丸一日休みってわけだ」

サリドがグラムの言葉を聞いて携帯端末の時計を見るとまだ午前1時を過ぎたばかりだった。

「あ、フランシスカが出てきたよ？」

サリドが言つてグラムは振り返る。そこには確かにフランシスカはいたのだが、

そこには他の別の人間もいた。

なんだか軽い口論をしているようである。

「だーかーらっ！ あんたからぶつかってきたんでしょ？！」

「違うよ。僕はただ適当に歩いていただけさ……。ぶつかったようなら謝るよ」

「おいおい、二人とも一体何をしているんだ？」

二人の口論にサリドが言葉を入れる。

「君は……、彼女のボディーガードかい？」

フランシスカではない方が、小鳥の嘴のような小さな口から爽やかな声を紡ぐ。

「ええ……。彼女がすいません」

「いや、僕の方も悪かったよ。……時間もかゝりました。一緒にお昼でも如何ですか？」

少女はちゅうど胸のあたりまで伸ばした茶髪をかきあげ、言った。

彼女の髪は茶というよりかはブロンドに近い。オレンジ色のノータ専用軍服も彼女にとつてはまるでファッションショーでモデルが着用しているような、ドレスに見間違えてしまう程であった。

「……なにか？」

じろじろ見ているのがバレてしまったのか、彼女は少し苛ついているようにも見えた。口をへの字に曲げ、なにか言いたげでもあったが……それは彼女の姿形を鑑みてもなぜか可愛く見えてしまつものなのであった。

「あ、いや……そうですね。しかし、あなたのお供は大丈夫なのですか？」

サリードは、訝しげに彼女にたずねた。

「お供？……ああ。ボティーガードのことですか？彼らなら何の心配もしないでしょ。むしろ僕が居なくてせいせいでるくらいでしょ？」

「そうですか？　しかしこれは不可侵条約を違反することも……？」

「オリエンピアードーム理事局は不可侵条約など口の紙切れだと思つてますよ。それに我々は“互いの利益を尊重し合つたために結成”された資本四国の一員ではありませんか？」

資本四国の目的は彼女が言つたよつこ“互いの国の利益を尊重し合うため”に結成された組織である。

まずはレイザリーとライバックが「」・ウェイロック条約を礎とした軍事条約同盟の締結を行つた。

そしてそれにライニア、シャルニコが参加して現在の形になつたとされてゐる。しかしその後の参加国は増え、結果として現在は7か国ほどあるのだが。

「……わかりました。では、お名前をお聞きしたいのですが？」

「ロゼ」短く告げ、「正式にはロズベルグ・アーケンド・リボルティーなのですが、長いのでみなロゼと呼びます。それで結構です」

少女、改めロゼは笑つて言つた。

なぜか彼女が薦めたお店は懐石料理とかの高級店……ではなく一般人も訪れるような純和風の定食屋であった。

「僕はこういうのが落ち着くんですよ。それでも祖国に行くと“じてじて”とした高級感満載のものばかりなんですけどねえ」

そう言ってロゼはオレンジのトレーをひとつ取り、そこに小松菜の「ごま和え」が入った小皿を載せた。

今、彼女たちは完全にオフということもあり私服になっていた。

サリドはポロシャツにジーパン、またいつもウエストポーチも装着している。

グラムはちょっと派手なアロハシャツにハーフパンツにサングラス。少し浮いてる感じが彼らしい。

ノータの一人も彩り豊かな服装であつて、しかし彼女ら一人の服装は両極端でもあつた。

まず、フランシスカから見るとボーイッシュな服装だった。クリーム色のチノパンにグレーのシャツ、それにチャックの着いたパークーを着ていた。

それに比べるとロゼはとても年頃の女の子のような格好をしていて。薄ピンクのブラウスに白のジャケット、オレンジのスカートに黒のニーソックス、ハイヒールといった感じだ。なんとなく、遠くから

見ると一組のカップルが仲睦まじく飯を食べているようになしか見えないが、それは置いておくこととする。

サリドたちが一通り食べ物を選び終え、会計を済まして、混み合つ店内を眺めた。

「こいつは混んでるなあ……。座るところなんてないぞ」

これはまさかの立ち食い（テーブル無し）のトラス席かと思つていたが、

「なんだ。お前らじやないか」

不意に後ろから聞いたことのあるような声がかかり、振り返る。

そこにには、

「……リーフガット…… もん?」

「ああ。……で、お前らどうした? 席が空いてないと見てとれるが」

リーフガットの言葉にサリドは頷いた。

「それなら、私が食べる座敷の方にこい。あそこなら人気もなく疎らだからな」

そう言つてリーフガットはすたこりと歩いていった。とりあえずサリドたちも後を追つことにした。

座敷は和風マニアのリーフガットなら大層喜びそうなものばかりだつた。

全面畳敷き、掘り炬燼に座布団、茶室まであるのだとか。

そんな部屋にサリドたちはリーフガットに連れられ、やつてきた。

「……ほんと人が居ないですね？」

「あんまり声を大にしては言えないけど」こは物好きしか来ないからねえ

リーフガットは少しだけ声のトーンを下げる、言つた。

「……そういうば、なぜ別国のノータがいるんだ？」

リーフガットは不審に思い、尋ねた。

「申し訳ございません。僕の方からお呼びしたのです」

謝ったのは口ぜだった。

「……名前と所属を」

「ロズベルグ・アーケンド・リボルティー。所属はシャルーニュ公国です」

「……なるほど。失礼しました」

名前を聞いて安心したのか、リーフガットはお辞儀する。

「……さ、食べよ。冷えてしまうし」

そんなことを言い出したのはフランシスカだった。

「そうだね。折角作ってくれたものを食べなきゃ。勿体無いもの」

そう言つてサリードは手を合わせる。

それを見てみんなも手を合わせる。なぜか完食したリーフガットもだ。

「「いただきます！」

一斉に言い、サリードたちが食事を始めた。

#### 1 - 4 (後書き)

次回更新：12/15予定

（12/15は諸事情により更新ができない恐れがあります。もしかしたら12/16にずれ込む可能性がありますが、予めご了承ください。）

サリードたちが食事をし終わったのは午後2時を回ったあたりだった。

あんなにロゼに對してぶつぶつさだつたフランシスカも、

「そういえば……栄養管理のことをとやかく言われたりしないの？」

「僕はなんでも独りでやりますから……。やるうと思えば料理だって出来ます」

「これくらいの会話も出来るよつて打ち解けていた。

「やついえばフランシスカさんは家族は？」

「……フランシスカで良いわよ。だから私もロゼと呼ばせて

「わかりました。ではフランシスカ。家族はいるのですか？」

「結局その質問なのね……。ええ、兄がひとり。父はあの事故で死んでしまったから兄だけが唯一の親族、かしらね」

「家族がいるつていいことですよねえ」

ロゼは楽しそうに笑う。そんな彼女の笑みは「」飯茶碗よりもワイングラスの方が似合つ気もした。

「……どういふこと？」

「いやあ、お恥ずかしい話ですが、僕は実は現在の王子の異母弟妹なんですよ。父は現シャルニユ公国国王。母はそこに仕えるしないメイドでした。……彼は母に恋をして、そして僕が生まれた……。もつともそのころは跡継ぎの論争が激しく、僕は彼から捨てられました。……しかしノーダの選出はDNAの検査で行う故に僕だけが選ばれました。まったく、皮肉なものですよね。国王から捨てられた僕が、今や国の最高級VIPなのですから」

場を沈黙が支配した。

「……あの、こんなこと、聞いてごめんなさい」

フランシスカは小さくお辞儀をして謝る。

「いえいえ、元はと言えば僕が話を切り出したからですよ。あなたは悪くありません」

そう言ってロゼは笑つた。まるで、それは天から地を眺め、微笑む天使のようにも見えた。

「さあさあ、とりあえず一人とも、これからどうする？」

サリドが話を切り出した。

二人は同時に首を傾げた。まるで、どうするって？ と言いたいばかりに。

「さつきロズベルグさんの方のボディーガードに確認を取つたのよ。こちらで行動を共にさせてもいいか、ってね。そしたら快く許可してくれたわ」

リーフガットが今は古い形態である折り畳み式の携帯電話を、ポケットに入れて、言つた。ポケットの外から出た湯呑みを象つたキー ホルダーが揺れる。

「……、」

「じゃあ、一緒にどこか回らない？ ロゼ」

二人の反応は両極端であったが、ロゼはフランシスカの発言を聞くと、我に返つて、

「あ、ええ。それもいいですね」

ロゼは堅苦しい言い回しで言った。何処と無く忙しない感じがした  
がそれがフランシスカ以下に『気つく』とはない。

「じゃあ、六時までに帰ってきてね。それからは、トレーニングや  
調整を行うから」

リーフガットの発言に一人は頷いた。

さて、

「どうあえずドリに向かつ? ロゼ」

「そうですね。ウエストエリアでカーニバルをやつてますが、そち  
らに行きますか? それともセントラルターミナルの海底トンネル  
に行けばそこでしか見れない魚が見れますよ。もししくは……」

「ストップ。ロゼ」

フランシスカから停止命令が出てロゼは訳が解らないながらも、言  
葉の砲撃を停止する。

「どうしました? 体調が悪いですか。確かにこの頃はお腹が痛く  
なるけど」

「黙つて。そうじやないわ

「……？」

「……、まあ、とりあえず、セントラルターミナル？ だつけ？ にある海底トンネルに行きましょう。何処に行くかはそれから考えるわ」

フランシスカはそう言つてロゼと手を繋いで歩き出した。

ロゼがあまりよくわからずフランシスカの顔を見ると頬が紅潮しているのが見てとれた。

「……な、なによ

「友達が、居なかつたのか？」

「……、」

ロゼの言葉にフランシスカは小さく頷く。

「今まで友達なんて出来なかつたから……。私は今まで研究所にいたし、そういう学校に通つてた。それに気づいたらもう私はヒューロルフタームなんていう人造人間型兵器に乗せられていた。名目上は人間だけど、そんなわけはない。あれは“バケモノ”よ。あれを人間と呼ぶ方がおかしいわ」

フランシスカは泣きそうな目でロゼに訴えていた。

「そんなわけはない。あれは立派な発明だよ。今まで人間程の大きさにしか作れなかつたロボットが、50mのものになるんだもの。ヨシノ博士　君の父親が産み出した“それ”は世界を画期的に変えたんだ」

「違う」フランシスカは小さく横に首を振つて、

「そんなわけない。例えヒトがどんなに綺麗事を並べたつてあれは兵器にしか他ならないわ。あれが内部爆発を起こしたら主要なエネルギー源としてるプルトニウムが原子炉から漏れ出してしまつわ。炉心溶融を起こしてしまつかもしれない」

「いいかい？」ロゼはフランシスカの肩を持つて、

「確かにそうなつてしまつ可能性もゼロではない。でも、そういうマイナスばかりを考えていると何も進歩はしないんだ。だつて、そうだろ？　人間の少なからず大きな犠牲によつてそれ以上に利益をもたらした大きなものが産み出される。まさか、君はこの世界が何の犠牲もなく今まで成長し続けた、とでも思つてゐるのかい？」

ロゼの問ひにフランシスカは答えない。

「……こんな話はやめにしよう。今は『トーントの場』なのだから

ロゼはひとつため息をしてフランシスカの手を握り返した。

「ええ。そうね」フランシスカもそう言つて彼女の手を握り返した。

セントラルターミナル。

名前の通り、オリンピアドームの中央に位置し、まるで深いスープ皿を交互に載せていつたようなそんな形をしており、ターミナルと名前が付いているから解ると思うが、ここは他の国とを結ぶオリンピアドーム唯一の空港である。

しかし全てが空港というわけでなく、滑走路、今の飛行機は滑走路が殆ど必要ないタイプになつていて、アリは上の僅か10エリアに過ぎない。残りのエリアは所謂お土産屋やアミューズメントなどの興業施設となつていて空港自体はそれで収入を得ている。

「うわあ……広いわねえ……」

「別に僕は広くは感じませんが……。レイザリーにもこの程度、いやこれ以上の設備が為された空港があるはずでしょ？」

ロゼの言葉にフランシスカはため息をつきながら首を横に振る。

「それがさあ……。本国の方のボーティーガードが飛行機の時間を一時間勘違いしてたみたいで。私のプランだったら一時間は空港をぶらぶらと巡れたんだけどねえ……」

「アハハ。でも今回は制限はありませんよ。こんな僕で宜しければ

「スコートしますが？」

ロゼは笑って、フランシスカの掌を再び強く握った。

先程ロゼとフランシスカが話していた海底トンネルはそのセントラルターミナルの地下に存在する。

トンネル、といつてもある場所とまたある場所を繋いでいるようなのではなく寧ろアトラクションに近い。海底をただ決められたコースで一定時間めぐれるといづどちらかといえばカッフル向けの施設だ。

なので、その場所もその時も男女のカップルが沢山来ており、なんだかここだけ異空間のようにも見てとれた。

「二人分お願いします」

「はいよ。700ムルね。……もしかして友達かい?」

受付の女性が三枚の硬貨を受け取り、次いで変わりにチケットを一枚渡す。

それを受け取り、フランシスカは愛想笑いを浮かべた。

チケットを貰つて、フランシスカはロゼのこゝにさしつけてきた。

「フランシスカ。私がエスコートすると……」

「『めんなさい。なんだかやつてみたくなつちやつて……。さ、行きましょ?』」

フランシスカはチケットをロゼに渡し、また愛想笑いを浮かべた。

+

海底トンネルを進むための潜水艦は一人乗りの小さなものであった。黄色のミニクーパーのような形をしていて、この特徴的な潜水艦の形もここが有名スポットである理由のひとつだ。

二人はそれに乗り込み、ロゼが操縦桿を握る。

グオン、と鈍い音が響いて潜水艦はゆっくりと潜水を始めた。

「綺麗ねー」

フランシスカは剥き出しになつている大きな窓を通して海の中を眺めていた。

風景は思つた以上に鮮やかだつた。エイにヒラメ、クラゲにイルカといった普通の魚からこの場所が熱帯に位置しているからか熱帯魚も多く見られた。

「ほり、あそ」。いそぎんちやくの中にいるの、なんて名前だつたかな」

「ロゼ、あれはカクレクマノミよ。あのオレンジと赤の縞縞模様は多分、そうに違ひないわ」

フランシスカとロゼはそんな他愛もない会話をして、

ふと、気が付いた。

「フランシスカ。後ろから何か見えませんか？」

ロゼがあくまで丁寧にフランシスカに尋ねた。

「……いや？ 何も見えないけど？」

「……シートベルトをしてください」

ロゼは冷たい、感情もない声で言つた。

「え？ ええ……」フランシスカは動搖しながらロゼの言つ通りにする。

刹那、ロゼが操縦桿をおれそなほど力を込めて左に曲げた。現にミシミシとこつ音を立てて居るのだが。

「あ、あやあ！」

小さく悲鳴が聞こえ、ロゼは、

「掴まつてーー！」

やつぱり ひそりで 今度は右に操縦桿を曲げた。

「な、なにを……！…… ロースから離れちやつたよー。」

フランシスカは半ば冷静に状況を判断出来なかつた。

「後ろから敵がやつて来ます！ 急がねば……！」

ロゼの言葉にフランシスカは驚いて窓から外を見て状況をなんとか知りうとする。

しかし、見えるのは透き通つた海だけだつた。

「……やつぱり見えない！……」

「困りましたね……。敵の姿が見えるならまだ対策は打てるのですが……、ここのままじゃ打ちようがない！」

「じゃあー。」

「とりあえずADAでこの潜水艦は完璧に操れるのですが……、問題はどう敵を交わして元の地に戻れるか……」

「ロゼ、どいて」

フランシスカは慌ててシートベルトを外し、ロゼの方に来ていた。

「フランシスカ、なにを……！……」

「いいからどうして」フランシスカはさつやく変わらない、淡々とした口調で述べたのち、言った。

「私にいい考え方がある」

+

その頃、フランシスカたちを追っていた潜水艦は困惑の色を隠せないでいた。

何故ならば。

「何故だ！！ 何故あいつらは壁の中に潜り込むように消えていつたんだ！！」 潜水艦のリーダーであったアーケオス・サンタディアゴは言った。

「ふう……。なんとか撒いたわね……」

フランシスカとロゼを乗せた潜水艦は小さい洞窟の中を巧みに動いていた。

「まさかこんな抜け道があるとは……。なんで知っていたのですか？」

ロゼはフランシスカに尋ねる。もう危機も脱したのでシートベルトは外している。

「リリはもともとレイザリー軍の基地ですからね。軍用の抜け道も

用意してあるんですよ」

フランシスカはなんとか事態を脱却した、とため息をつく。

「どうひでこは何処まで続いているんですか？」

「う、うーん……。えーと……確かにセントラルターミナルの使われてない古倉庫に出る……と思つたけど」

フランシスカはたゞたゞしく言った。その感じでは本当にどう出るのか曖昧なのだろうか。

「まあ……いいでしょ。とつあえず武器は……」

ロゼは辺りを見渡す。

「ロゼ、あんまり見てもないと思つわよ。私もわしが見たときなかつたから」

「わうですか……」フランシスカの話を聞いて、ロゼは深いため息をつく。

「ならば、仕方ありませんね」

そう言ってロゼはスカートの裾を思いつきり持ち上げた。その中にあるピンクのパンツが見えてしまつほどだ。

「なにを……？」

フランシスカはその風景を怪訝に思っていたが彼女の太股にベルトで接着されていたそれを見て、息を潜めた。

小型の拳銃だつた。

「どうしてそんなものを……？」

「いいからさつさと行くよ。仮にあいつらが敵国のスパイだつたら捕らえられて何されるか堪つたもんじやない。なら倒した方がマシや」

ジャキッ、と冷たく鈍い音が潜水艦の中に響いた。

「いいかい？ ここはもう平和の祭典を行う平和な場所なんかじゃない。戦場なんだ。しかも今まで水面下で巧みに動かれていた、それほどの力がある、ね」

そう言つてなぜか口ゼの顔は笑つていた。

逆境を、楽しんでいたのだ。

「……行くよ」

ロゼはそう言つてもう片方の太股に装着されていた拳銃をフランシスカに投げ渡した。

潜水艦から這い出てフランシスカたちがひとつに連つたことの「地図なら」は古い倉庫だったはずなのに……？」

フランシスカたちを大きく囲むようにあるそれは彼女の頭の中に異なる情報と差違を生み出す。

「地図なら」は古い倉庫だったはずなのに……？」

そう。

その、二人を囲むコンクリートは古い倉庫にしては、とても新しきたのだった。

「仕方ないですね……。倉庫として通用しない。何があるかもわからない。そんな場所、でいいですね？」

ロゼはそう聞いて、振り返りついた。

その時だった。

ガギザザザザ！　と上からナイフの雨が降り注いだ。しかしそれは綺麗にロゼの体を傷つけないようにもなつていたが。

しかし彼女が着る服装は別だ。彼女が着ていたジャケットやスカートはズタズタに切られ、裸体が露になつていた。

「ロゼ……」

フランシスカは叫んでロゼに近付いた。

「近付くなーー！」

ロゼは思つきり叫んでフランシスカを制止した。

なぜならまだナイフの歯は止んでいないからだ。そのまま飛び込めば彼女は串刺しとなり確實に絶命することだろう。

しかし、不思議な点がひとつだけあった。

それは、そんなにナイフがまるで歯のように降つていいのに、天井には傷ひとつついていない。まるで天井からナイフが“生えてきた”ようだった。

「……スカートを穿くんじゃなかつた。可愛さを追求した結果がこれですよ？」

ロゼは自分自身を指差し、自嘲するように笑つ。

そして、

「自惚れるなよ。見えぬ敵。絶命をむかふままでその身を打ち砕いてやる」

ロゼは低く、冷たい声で叫んだ。

「（）心配なく。傷付けるつもりは毛頭ない故」

敵の声は予想外にも、目の前から聞こえてきた。

敵の姿はこいつからほよく見えたのだが、その雰囲気でロボヤは感じ取る。

「……神殿協会か」

「……、」

しかし声は答えない。

「答える。そもそもばこのショットガンでお前の体を撃ち抜くぞ」

「……私は神殿協会枢機卿、レイシャリオ・マイクロショフです」

「……で？ その神殿協会サンが何の御用で？ まさか平和の祭典に茶々入れに来たのか？」

「……半分は、合つてますね。……でも、もう半分が足りない。それを言つことないし、その義理もない」

そう言つて影はゆっくりと振り返つて立ち去り、周りの影と同化していった。

「……神殿協会、か。本物でしょうかねえ」

フランシスカは先程降つてきていたナイフを一本取り出す。ナイフの雨は気付かぬうちに止んでいたのだ。ちょうどレイシャリオと名乗る人間が現れたあたりから。

「……『Op-1 and security』……オプグランドセキュリティ社。神殿協会御用達の兵器店よ」

フランシスカは言った。そしてナイフを丁寧にハンカチでくるんでしまった。

ロゼはとりあえずフランシスカの着ていたパークーを着ることにした。そのまま行くことも十分考えたがフランシスカがそのままでは周囲の目を惹き怪しまれるという判断をしたためその結果となつた。しかしそれでも彼女の下半身は傷ついているのでアングルによつては見えちゃまずいものが見えてしまう。なので彼女は今不機嫌なよう取り繕つてパークーのポケットに手を突つ込み、思い切り引っ張つてなんとかそういうものが見えるのを防いでいた。

「……もう時間も頃合いでですかねえ」

フランシスカがあくまでも自然な感じに言った。

「……、」

ロゼは何も言わずに頷く。

「どうあえず、戻らなくちゃならない。あなたは何階かしら?」

フランシスカはロゼに尋ねる。

「……僕は28階ですよ」

「じゃあ一個上じゃない! 私は27階だもの!」

「そうですか……。近いと何かと便利だから助かります」

ロゼは痛みを感じるのかすこしせうに笑つて言つた。

1-1-1 (後書き)

次回更新：12/22予定。

「なぜ、それを報告しなかつたんだ？ フラン시스カ。 それほど逃げていたならば私達に連絡くらい出来ただろう？」

マンションの自室に戻り、フラン시스カが事情を話すとリーフガットは第一声にそう言った。

「でも……」

「でも、じゃないわ」

フラン시스カの言葉を遮るようリーフガットが咎める。

「確かにあなたは多くの人間を救つたヒーローよ。 でも、今は違う。今はこの『世界トライアスロン』の参加者であり、プレイヤーなのよ？ 貴女のために多くの人間が協力しているし、貴女が傷ついたりして思つた成績が上がらなかつたら私達の責任になつてしまつ

つまり。

「あなたを中心にこのチームは存在しているのよ？ あなたがいなかつたらこのチームは空中分解を起こしていることでしょう。それに、世界トライアスロンは平和の祭典、なんて簡単なものじゃない。銃撃による妨害で死んだ人間だつているし、それによつて戦争が始まつたりした。あれは戦争のいい理由になりうるものなんだよ。それは……わかつていいよな？」

フランシスカはリーフガットの言葉に小さく怯えているかのようにな頷いた。

「……じゃあ、とりあえず練習をしましょ。今からコースの先見でもしたらどうかしら?」

リーフガットは先程の真剣な面持ちとは異なり、顔を綻ばせて言った。

そのころ。一個上の28階。

フロアはフランシスカの部屋とは異なり質素だった。強いて言つならば、何もない。ソファーもテレビもパソコンもないのだった。

ただ雑然とした空間で、一人の少女が、空を眺めていた。

彼女は何も身に纏つてはいなかつた。下着すらも、彼女は着けていなかつたのだ。

月を見て、彼女は笑う。LEDの屋内灯も点いていないこの部屋の唯一の光源は月明かりだけだ。カーテンを開いて、部屋全体に月明かりを取り込む。

彼女はとぼとぼと歩き、彼女の生活スペースと化しているダブルベッドに腰掛けた。ベッドの脇にはごみ袋がありその中にはボロボロに破れた服らしきものと血に汚れたベッド用シーツが入つていた。

彼女は小さく鼻歌を歌いながらベッドに置いていた携帯端末を手に取る。

そして、ロック画面を見ると音声通信ソフトの通知を知らせるメッセージが見えた。

彼女は不審に思いながらもそれを見る。

通知は着信とメールだった。それはどちらも同一人物をさしていて、それは彼女が今日半日一緒にいた人間のことであつて。

「……、」

彼女はメールの内容を見て立ち上がり、シャワールームに向かつた。

素早くシャワーで体を洗い、綺麗なのがあまり保証できないタオル、なんだか緑色のなにかがくつついで濡れた体を拭き、“なぜかそれだけが別の空間にあるようなくらい綺麗にされている。”オレンジ色のノータ専用軍服を手に取り着用し、携帯端末を持って扉を閉めた。

一日目の競技は水泳である。

6km近く離れている浮島まで泳ぎ、そこを往復 およそ13kmの遠泳コースである。

「しかし初っぱなから水泳とはねえ。明日以降に耐えられるのか？」

グラムは少しだけ眠たげに言った。話を終えたあとに欠伸をしたのがその証拠である。

「グラム。たしかノータは知識と筋力を兼ね備えているらしいよ。それに世界トライアスロンの日程にこんなに余裕が出るようになつたのは去年あたりからだよ。その前は毎日やってたらしこから」

「こんな毎日やってたら普通の人間なら疲れで死ぬぞ？」

だから、とサリードはあえてそれを加えて、

「それがノータが“バケモノ”と呼ばれる由縁なんじゃないかな？」

ヒュロルフタームの事故は必ずといってよいほどノータも共に攻撃をくらうことが多い。

なぜならばヒュロルフタームはあくまでも人間で言つところの、脳のない赤子に近く、ノータ 即ち操縦し、管理するもの がい ない限りヒュロルフタームの本能のままに行動する。しかしあく使

われて10数年も経つといつもヒュロルフターूムには解らなことと  
が多すぎるのだ。

「第一、ヒュロルフターूムの生みの親であるヨシノ博士がどうやってヒュロルフターूムを作ったか詳しい概論を発表しないまま死んでしまったからね。その後遺された書類や設計図を見てもどういうことかわからない。なのにヒュロルフターूム自体は作る」とはできるから面白いもんだよね」

「詳しい概論を発表しなかつた？ どうして？」

「ヨシノ博士は資本主義の人間にしかヒュロルフターूム概論を発表されないことを知り、全世界に発表しようと亡命を謀ったんだ。大分昔に言ったかもしれないけどヒュロルフターूムはもともと人間は行動し難いことを出来るようにするための強化装備<sup>パワードステッ</sup>みたいなもので平和的に活用するつもりだったんだけどね」

「それが今や戦争の代名詞、か。世界つてのはほんとどう転がるかわからないもんだよなあ」

グラムは煙草を吸うような素振り、あくまでも注記してあくと彼はまだ16歳の未成年であるのだ、をして言った。

「ああ！ 一田田の本田は『水泳』です！ 総距離13・047kmのこのコース、今回は都合により彼方に見えるハテノ島がゴールとなります！」

海に浮かぶクルーザーに乗るのは、昨日いたレナであった。たぶんもともと声量がないのだろう。時たま声が裏返りながらも懸命に役目を果たしているのは、やはり彼女も彼女でアイドル魂というのがあるのだろうか。

「おっ、始まるみたいだな」

ブランドものの黒いタートルネックに、ジーパンを着たリーフガットは海を一望出来るテラスにやってきていた。

ちなみに今回彼女は完全に非番で20代最後の夏を楽しむためにやつて来たんだとか。エンパイア一家と言えば伯爵の爵位を持つ大変立派な家系なのだがどうしてこうなったのか。理由はいくつもあって話しきれくせないだろ？

「あいつらはこの中応援かー」

リーフガットは唇からよくあるメーカーのビール缶を開け、一口うまやうに啜る。

「……ま、彼女がいるから大丈夫か」

リーフガットは口から漏れ出したビールを口で拭き、テラス脇に設

置したアンティーク調の木の椅子に座った。

そのころ、サリードとグラム。

「このクルーザーで行くのか……？」

「うん。 そうだね。一応僕達は主催国の代表扱いだから、このクルーザーを貸してもらつたんだよ」

「……サリード、お前運転、」

グラムが言い切る前にサリードは、

「出来るわけないじやん。僕は運転免許を持ってないし、第一未成年だし」

「だあーっ！ 解つた！ 解つてるよ…… どうせそういうと  
思つてました……」

グラムはクルーザーなんて運転したことねえぞまったく、とか愚痴を溢しながら、クルーザーの中へ入つていった。

ふと、空を見上げると太陽が文句ありげにギラギラと輝いている。文句が言いたいのはこっちだ、と言い返したかつたが、

「操縦は私に任せて下さこな」

ふと声が掛かり、その声のする方を見た。

そこには甲板から少し出っ張つてこむといふ。俗に云つて“操縦席”的なじゆだ。

グラムは顔を見ようとすると、しかし、空が眩しくて何が何やら解らない状況だった。

「……自己紹介は顔と顔を見たほうがいいでしょ？　とりあえず上に上がってきてください！」

女はそう言つて、また操縦席の方へもどつていった。

「私は、ライズホールト・ホークキヤノン、と言います」

開口一番、その操縦席にいた女性は色々な機器をまるで出鱈目にボタンやらなんやらをつかつて調整しながら言った。

「ホークキヤノンってまさか……」

サリードがライズホールトの名前を聞いて、ハッと思に出した。それと同時にことであつたが、

「姉さん?！」

後ろから誰かの声が聞こえ、振り返ると、フランシスカの健康管理担当であつたラインスタイル・ホークキヤノンが驚愕の表情を浮かばせていた。

「なんで姉さんが……？ 今はまだ戦争中じゃ……」

「いやあ、私もよく解らないんだけどね？ どうやら世界トライアスロン開催中は世界中の戦争はお休み。また開催時期前後一週間に行われる行事は休み、みたいで。まあ、結果として私がここに駆り出されたわけ」

ライズホールトは意外と小さな、触つたりふくらみが把握出来るくらいの胸に手をあて、言った。

「毎回思つけど姉さんは然るべきといふが成長してないわよね……。

顔はいいのに

「余計なお世話よ。ラインスタイル」

ライズウェルトは少しだけ声を荒げて言つた。

「さてと、そろそろ追い掛けなくちゃね。もう競技開始から20分は経つたわよね？」

ライズウェルトはさつさつと足早に操縦席に戻り、操縦桿を握る。

「こっくわよ～！～」

そう言つと。

船は水飛沫を上げ、恐ろしいほどの、まさに電光石火と形容するに相応しいほどの速さで大洋に消えていった。

そのころ、フランシスカは海を泳いでいた。因みにではあるが、競技の服装はノータの服装 すなわちヒュロルフター・ムバイロット・スース を着なくてはならない。それは義務である。

だから今ではノータの服装にいろいろとスポンサーの名前が描かれていたりしている。

しかしひとつ疑問が生じてしまう。

それは『資本主義国以外は誰が出場しているのか?』ということだ。答えは簡単で、ただ実力者のみが出ていくことになる。

社会主義国、特に神殿協会や大神道会などはヒュロルフター・ムの戦争運用に反対している。

何故ならば、彼らの信義とは人と人が戦うのはいいが、その代行者として人が決して適わない存在と戦わせるのは残虐かつ非人道的な行為である、と述べているのだ。

しかしそれを資本主義国がまともに聞くことはなく、今現在も戦争にヒュロルフター・ムが用いられているのだった。

現在フランシスカは中継地点である群島の脇を泳いでいた。

ノータ ヒュロルフター・ムという人造人間兵器のパイロット  
とはいえ、元は人間だ。体の仕組み上、限界が存在する。

「……バカめ。あんなところで休んだら体力が持たないだろ?」「

フランシスカは咳いて後ろに見える群島を一瞥して言った。

何故ならあの群島、実際には小さな岩に一つの人工的に形成された島がぽつんとあるだけだが、はもともとの中継地点で、ちょうど彼処で半分となる折り返し地点だった。

だから一度そこで休んで、休むといつても水からは出ないで呼吸を落ち着かせたりするだけだが、また半分の距離を泳ぐのだった。

「……全くだよ。どうしての人たちは彼処で休むのかな? 僕にはまったくわからないよ」

「……ロゼ。いつの間に?」

「いやあ? 僕はずつと君の後ろに気味が悪いくらいぴつたりとくつついてたんだけど?」

ロゼは泳ぎながらも言つ。よく考えると、この一人は水で泳ぎながら話をしているということになる。常識的に考えるとさっぱりよくわからない。これがノータなのだろう。

「……ほんとノータってやべえな。あいつら口動かしてるつてことは、喋つてるつてことだろ?」

その向こう、クルーザー用コースを進むクルーザーの上に乗っていたグラムは双眼鏡でフランシスカの方を眺めていた。

## 2・4（後書き）

次回更新：特に何もなければ来年1／4更新となります！

エブリスタ版は25・26日お休みをいただき、27・28日と更新、それが年内最後となります。

それでは皆様良いお年をお過ぎしください。

あとがき更新しました <http://d.hatena.ne.jp/natsumeecho/20111223/1324644286>

「やつぱつですが、つて感じかなあ。肺活量も一般人と比べて尋常じゃないくらいあるんじゃない?」

サリードはやつぱりなんかの雑誌を読みながら缶コーヒーを飲んでいた。

「また雑誌読んでるのか……。お前はほんとに大好きだな」

「それは誉めているのか、貶しているのか?」

サリードはため息をつき、雑誌に糸を挟み、閉じる。

「ちよつと読むぞ」

「んー」

サリードは「」からか持つててきたイチゴ大福を頬張りながら言った。

「なんだよお前、俺にもよこせよつ」

そう言いグラムはサリードの右手にあつたイチゴ大福を奪い取り自分の口に放り込んだ。なんとなくサリードが悲しげな表情をしている気もしたが、甘いものを独り占めしているお前が悪いんだ、とグラムは田で静かに言つた。

さてグラムはサリードから奪い取つたイチゴ大福を食べながら、サリードが読んでいた雑誌を見ると表紙は何処と無くよく言つ萌え要素が

「これでもかと詰め込まれた女の子だった。

少しだけ緊張しながら表紙を開くとページ一つぱいに文が書かれ、数ページ毎にイラストが描かれていた。

そう、これは世間で「いつのライターノベル雑誌」だった。

「おこ、サリド。」  
「おれは……！」

グラムはあまりの驚愕に絶句していた。

「まあまあ、別に僕がどんな雑誌を読んでもうと構わないだろ？」

「ま、まあ……、確かにな？」

グラムはさう言つて雑誌をサリドの前に置かれている机に置いた。

そのころ、フランシスカはなんとかあと一キロを走ったあたりまで泳いできた。しかも今までペースを崩すことにはなかった、というのだから驚きを隠せない。

「……それに、ロゼも付いてくる……」

そう、別にこのペースを保つて十キロも泳いできたのはフランシスカだけではなかった。

「どうした？　ペースが落ちてきたようだね？　あともう少ししからがんばって！」

フランシスカのすぐそばに一人の少女が泳いでいた。

ロゼ、だった。

彼女はずっとフランシスカをペースメーカーとして泳いできたのだから彼女のスタミナは未だに消費が少ないだろう。

汚いやつだ、とフランシスカは思った。

しかしこの場所は世界トライアスロン。言うなりば“無血の戦争”と呼ぶべきこれはそういう賢いことをしていかねば、勝つことはできないのだ。

?

そのとき、だつた。

不意にフランシスカの足を誰かが引っ張つてきたのだつた。

フランシスカは一瞬困惑した。こんなことをできる人間は一人しか居ないことを解つていたから。

ロゼ。彼女がしたことなのか。フランシスカは一瞬そう考えたが直ぐにその考えを捨てた。彼女がそんなことをするわけがない。フランシスカはそう考えていたからだ。

「……なら

いつたい誰が、この所業をし得たのか。どうやらそれも一回で終わつたのでとりあえず泳ぎのペースを取り戻す。

ロゼは何食わぬ顔でフランシスカにぴったりとくつつくペースで泳いでいた。

「……フランシスカ、なんかあつたのか？　なんか苦々しい表情だぞ」

「さあ？　とりあえず彼女がゴールするまで関わるのは禁止されるから固唾を呑んで見守るしかないんだけどねえ」

双眼鏡を使ってフランシスカたちの状況を眺めるグラムにサリードは答えた。

「……妨害、といつ可能性は？」

「十分有り得るよ。だってこりこりう大会だ。もとはスポーツマンシップに則つてやってたけど今はそれを無視してもいいつてのが暗黙の了解になつてゐる。だから今や世界トライアスロンは“無血の戦争”とも呼ばれるくらいだしね」

そう言つてサリードはテーブルに置かれていたコーヒーを一口飲んだ。

水泳の結果は一目瞭然だつた。

「第一位、フランシスカ・リガント・ヨシノ選手！ 所属はレイザリー王国！」

司会のセリフとともに会場に拍手が沸き起つる。それを受け止めるかのようにフランシスカは一礼する。

「第一位、ロズベルグ・アーケンド・リボルティー！ 所属はシャルーニュ公国！」

次に第二位の名前が呼ばれ、その後拍手が沸き起つる。そしてさつきフランシスカが行つたように口ゼモ一礼する。

「第三位、アリア・カーネギー！ 所属は……」

フランシスカは表彰台に立ち、金色のメダル、所詮こんなのは金メダルであしらわれた銀メダルだつたりするのだが、を受け取つている最中も考え方をしていた。同時に二つのことを出来るとはなんと器用な人間であるか。

「……フランシスカ」

「……」

「フランシスカ」

「……、」

「フランシスカ！」

「う、うわー！」

サンドから呼ばれようやくフランシスカは我に返つた。

「こつたこじうしたつてんだい？ ずっと考え込んじゃつて。体調  
でも悪い？」

「……いや、大丈夫。問題ない」

フランシスカは何処かのゲームキャラが口にしそうな言葉を語つて、  
ゆっくりと歩いていった。

「……次の競技はいつ？」

マンションに戻りシャワーを浴びたフラン시스カは濡れた髪を拭きながらサリードに尋ねた。

「えーと、明日の午後から射撃、そのあとに一時間の休憩を挟んで弓道というハードスケジュールだよ」

「言つほどハードでもない気がするが……。とりあえず明日は競技が一つあるってことだな？」

フラン시스カはサリードに再び尋ねる。

「うん。それは間違いないね。射撃の開始時間は午後四時からだから、間違いないよ！」

「わかっている」

「あの……お二方話してるとこひ悪いんだけど……」

唐突に会話にグラムが割り入ってきた。

「どうした、グラム？」

「どうしたも二つしたもないだろ……。どうしてサリードは部屋に平気に入れるくせに俺は食事以外部屋に閉じ籠つてなきゃなんねーんだよ……」

「そりゃあんたが変態みたいに見えるからだよ」

「わーお、なんという一刀両断！　俺のハートはもうボロボロなんですが…！」

「わいしでもらいたいへせ。わかつてこるよ。それへりこ

「まさかの俺認定かよ？！　俺はそんなんじゃないの…」

「まあまあグラム。フランシスカは疲れてるんだよ、少し休ませてあげなきや」

グラムを宥めるようにサコシは囁いた。

「……じゃあ一歩譲つて俺が静かになるよ」

「それでよひしー」

グラムが苦々しそうに咳くとサコシはこいつと笑みをこぼして言った。

「……んじゃあ、今日もじつか出かけるのか？」

「やうね、夜の街も面白やうでこいんじゃない？」

フランシスカはタオルをテーブルに放り投げて、ソファにひとり腰掛けた。

フランシスカはひとりマンションの玄関前にいた。ある少女を待つているためだ。

「『めんなさい。待ったかな』

その声を聞き後ろに振り返ると、そこにいたのはロゼだった。彼女はオレンジのパーカーに青のジーンズ、茶色の毛糸の帽子といった結構暖かそうな格好であった。フランシスカもみると黄色のジャンパーにクリーム色のチノパン、なんかの野球チームのマークがあしらわれた帽子をかぶっていた。どちらかといえば二人ともボーリッシュユな格好をしていたのである。

「なんかその帽子暖かそう……」

「かぶる?」

フランシスカはロゼのかぶっていた帽子を見て半ば無意識に呟いた。

それを見かねたロゼは帽子を脱ぎ、フランシスカに渡そうとした。

「いいわよ。大丈夫」

しかしふランシスカはそれを手でロゼのほうに押し戻した。

「夜の街……といったって危険がつきものじゃありませんか？ テ口でも発生したら……」

「大丈夫よ。なんせここは資本四国所属の最強のヒュロルフターム軍隊が島を守っている。連合軍もあたりの警備にまわっているのだから、テロやクーデターなんて起きるわけがない」

「それはそれでいいんだけど……」

ロゼはフランシスカの話に多少の疑問を抱きながらも納得したかのように頷いた。

しかしながら、

何処でも夜の街は何処と無く不安になるものだ。

だからロゼもフランシスカも心の奥底で不安になつていて、その裏返しで強気な発言をしていたのかもしれない。

### 3・1（後書き）

明けましておめでとうございます。本年も拙作をよろしくお願いします。

次回更新・01/06予定。

ナイトライティング。

オリンピアドームの北東に位置するそれは、昼間は普通の歓楽街……というよりかはシャッター商店街のような感じであるが、夜はまるで別の街であるかのようにきらびやかなネオンに街全体が覆われ、まるでこの街だけ昼夜が逆転しているようにも見えた。

名前の由来はそれからも来ていて『夜の光』からだとされている。“されている”というのはあくまでも正確にそうかと言われば不明で曖昧なところもなきにしもあらずだからである。

そんな街にかくして一人はやつてきたわけだが、街にやつてきた一人に初めて感じさせたのはとても普通の人間には感じ取れないであります違和感であった。

「……フランシスカ、気づきましたか？」

「ええ……。あなたも？」

ロゼの質問にフランシスカは答えた。

この、決して眠る「のない」この街。

それが今、眠りについていたのだ。『じつ』とかといえば、ネオンがすべて消えている。街自体が闇に包まれているのだ。

「流石はノータ……。違和感をすぐ感じ取れるとはね……！」

声が虚空に響いた直後、空に爆発音が響く。

「ドガザギギギ…… とまるで爪でガラスを引っ搔いたような音が響いた。

「……ガラスじゃない。巨大な鉤爪でビルのコンクリートを引っ搔いている？！」

「「」答」 フランシスカが虚空に向かつて叫ぶと、また空に同じような声が響いた。

そして、空からゆっくりと何かが降りてきた。

それは、人間。紛う事なき、人間の姿がそこにはあった。

「……誰だ」

「……なんとなく解っているのでは？」

「……神殿協会」

フランシスカは小さく呟いた。

「『』知答です。……我が名は神殿協会“アサシン部隊”グレイペヤード・ナッシュトレイスと『』

「アサシン部隊……。噂には聞いていたがまさかこの場に現れるとは……」

グレイペヤードの話に最初に答えたのはロゼだった。

「ほうー、『』存知でしたか？」

グレイペヤードはわざとさりげなく驚く素振りを見せて、薄ら笑いを浮かべた。

「……当たり前だ。……母を殺した連中だからな

ロゼは一瞬躊躇いを見せたが、ゆっくりとその自分の言葉と対峙して……そして、決心したのか、ゆっくりと口に出した。

それを聞いてフランシスカは驚きを隠せなかつた。よくよく考えれば先程の会話で“母に関する説明”が乏しかつたのを思い出せる。即ち、彼女は彼女自身でその記憶を封印していた、ということに為り得る。フランシスカはそんなことを考えていたが、

「母を？……ああ、もしかしてあなたシャルーネ公国の人間ですか」

グレイペヤードは無感動に口づけた。

「……我々は一応傭兵みたいな役割でしてね。なんと言いますか……、半分神殿協会に仕えて我らが神に信心をしていますが、半分はただの傭兵です。言い方をもつと悪くすりや破落戸「ごろつき」です。……そして、あれは任務だったのですよ。私たちの上司神殿協会からの、ね」

「……即ち、母は神殿協会の真意に背いた、とでも？」

「アハハハ」となんでしょうね。神殿協会の真意に背くなんて相当な罰ですから殺されてもおかしくはない……んじゃないでしょ？

「そう言ってグレイペヤードはまた薄ら笑いを浮かべた。まるで、ロゼたちを羨むかのようだ。」

「なるほど……。なりば、

そう言ってロゼは何処からかサバイバルナイフを取り出し、構え、そしてグレイペヤードに向けて飛び込んだ。

「……でも、ちょっと熱すぎやしませんかねえ。せめて作戦でも考  
えればいいものを

口ゼにはなにが起きたか全く解らなくなつていた。

それもそうだろつ。ロゼは今グレイペヤードに両手を捕まれ、抑え込まれているのだから。

「なつ……………！ いつの間に？！」

ロゼはただ、驚くことしか出来なかつた。

「力だけではなく、口も使わないとね？」

グレイペヤードは頭の、ちょうどこめかみあたりの位置を指差しながら言つた。

「…………」

ロゼはその後自分でも気づかない内に意識を失い、眠りに落ちた。

「何をする気?...」

残されたフランシスカは口から渡されたものではなく一応の事態に備えて用意していた拳銃を構え、言った。

「……安心ください。今回あなたたちに危害を加える気は更々ありません。まだ命令もされておりませんし。彼女に關しても困惑してまともな戦闘が出来ないと判断したが故の決断です。なあに、ただ意識を失い氣絶しているだけですよ」

「氣絶しているだけ……?」

それを聞いてフランシスカも安心してしまったのだろう。拳銃をもつ腕の力を緩めてしまっていた。

「……で、私がここにきたのは、まあ、列記とした理由がありますね。……そうそう、そういうえば手紙を預かっていたんだった」

グレイペヤードはつづきとはつづてかわつておつとりとした感じで自分の服の中にあると思われる手紙を探していた。

「これだこれだ」

グレイペヤードはよつやく手紙を と言つてもただのメモ書きにしか見えなくもないが 発見して、それを見ながら話を始めた。

「えーと、じゃあ言わせて貰いますねー」

グレイペヤードは特に緊張感もなしに普通の感じで言った。

「我々神殿協会は全世界に対しても宣戦布告する。これは聖戦であり神の名のもと、肅清を加える」

グレイペヤードは唐突に手紙の内容を話した。それは恐ろしくも「冗談にしか見えない、そんな戯言に近い発言でもあった。そんな発言、誰が信じるとも言つんだ、と直わんばかりにフランススカは鼻で笑つた。

「聖戦？ 神の名のもとに肅清？ 笑っちゃうね……！ そんなこと出来るとも思つていいのか？」

「当然。完璧に成功するとは考えていない。神の名の許にこれを実行するのであって、実際には五分五分であろう」

グレイペヤードは今までの軽やかな口調とはかわり、厳かな雰囲気を醸し出すよくなそな口調に為つた。

「しかしながら、我々は神に『この戦いに勝つ』ように命じられたのだ。この闘い、負けるわけにはいかぬ」

「ならば…… 今ここで戦うしかないかな？」

フランシスカはやつて、グレイペヤードに向けて駆け出した。

### 3・4（後書き）

更新はここまでとなります。少々遅れてしまふかもしれません。いいといふので切れてしましましたが、ここまで更新です。

理由と申しましては更新する『ローリー』が少なかつた、といつゝことです。現在エブリスタ版のストックは『100』あまりとなっています。これ以上の更新は到底無理です。

次回更新は01/11に予定しています。その時までには7~8ページほど書いておきますのでそれくらい更新したいなーとか思つておつまみ!

P.S. 100話＆10万字達成しました。ありがとうございます。

そのじるサリードたちはフランシスカのマンションで適当に時間を持つていた。そうとはいっても今はサリードがベッドで眠り、グラムは眠たい目をこすりながらテレビ番組を遠い目で眺めていた。

「なあ……、今何時だ?」

ゆっくりと起き上がったサリードがグラムに尋ねた。

「一時くらいかな。安心しin。あと30分は眠れるぞ

「いや、もうじゅなくて……なんだろう。何処と無く嫌な予感がするんだよね……」

サリードはまだネオノライトで明るい夜の区々（まちまち）を眺め、不安げに呟いた。

?

そのじる。

「無駄だと言つてゐる」ことが解り得ないのですか……。まったく、可哀想な」とぐ

グレイペヤードは向故か悲しげに呟いた。

その直後、フランシスカは自らに情けをかけていることを解り更に腹が立つた。これはグレイペヤードからのものもあり、同時に実戦（ここではヒュロルフトームを用いた戦闘ではなく人間同士の、昔から続く闘いの意味をさす）の経験が全くない自分にも腹が立つていた。悔しくて、悔しくて、仕方なかつた。

「……解りました」

そんなことをフランシスカは考えていたのだがグレイペヤードのその一言で我に返らされた。

「ほんとうは傷つけてはならないと言われたのですがね……。なんせあなたは“あのお方”的家族の友人だというのだから」

しかし、

「あなたが諦めないと言つなれば、此方とも本氣で戦わせていただきます。見せてあげますよ」

そう言つと、グレイペヤードは嫌味のある一ヒルな雰囲気を醸し出した笑い方でこいつ言つた。

「魔法、をね」

「……魔法？　ふざけるのも大概にしてくれないかしら？」

「いや、ふざけてなどはいませんよ……。そうか、あなたたち『資本主義国』は魔法を排除し科学を信仰した。それと異なり我々神殿協会を含めた『社会主義国』は科学の成長と引換に魔法の存続を決断した。……それがおよそ15年前、そう。『蒼空落花』によつて我々と資本主義国は明確に道を別れたのですよ。」

「『蒼空落花』……？」

「……ああ。あなたたちのほうでは確か『プログライトの奇跡』と呼ぶのですかね？　プログライト戦争の開始した原因とも取れますが……、でもあれがなければ今頃我々は資本主義国と同様破滅の道を歩んでいたことでしょう。」

グレイペヤードはずつと変わらない口調で淡々と述べた。何も知らぬ者に真実を突き詰めるにはそれで充分だった。

「……魔法が、ほんとに存在するといつのか？」

フランシスカは何処と無く慌てているようにも見えた。

「ええ。魔法を使える人間は限られてはいますが、今や普通に魔法は用いれます。まあ科学信仰により魔法の大切さを忘れた資本主義國の人間には到底無理ですがね」

「へえ……。まあ、よくもここまで資本主義國の人間を虚偽に出来たものね？ しつぺ返しが何倍にも返つてくるかもしれないわよ？」

フランシスカは今までのグレイペヤードの言葉をただ聞いて、笑うこともなく無表情かつ無感動にそう告げた。

「果たして、どうだらうね？ 君じや……僕と戦つたことを後悔すると思うね」

刹那、グレイペヤードは宙に、舞つた。

そのじろりサリードたちは夜の街を走っていた。理由は、急にサリードが何かを思い起こしたかのようにマシンションを出て、街に向けて走り出したため。グラムも驚いて、数メートル後ろを走っていた。

「サリード……！……急にどうしたんだよ！……」

「グラム、それはちょっと今は言えない。確信出来るまでは「確信、つひ…… いつたこどりつことだ？…」

グラムはサリードに食いかかるように走り、走りながらなので息も絶え絶えだ。

「…………」

「やつぱ、ぱしつて……？」

急にサリードが立ち止まり、その景色を見て、言つた。

グラムもサリードが見つめた方角を見て、そして、

呻いた。

「…………どうなつてんだ、じつやーー！」

そこには広がっていたのは……倒れ込んでいた一人の姿だった。

「フランシスカ！ ロゼー！」

サリドは直ぐ様それに気付いたようで、フランシスカの方に走つていき、グラムに目配せした。

「……はいはい、俺はロズベルグさんのはづに行きやいいんだな？」

そう言つてロズベルグの方へ向かい、彼女を抱き上げた。

思ったより体は軽かった。まあそこは淑女なので体調管理をきちっとしている証なのではないか、と思つてもしまうがよくよく考えるとそれではおかしい事になる。

ノータは普通の女性軍人よりかは重労働を毎日、来る日も来る日もしていることになる。ヒューロルフタームの操縦もそう簡単ではないのだ。

だからノータというのは平均的に女性らしいシャープでしなやかなボディに成人男性以上の筋肉がついているとなれば、自ずと体重は上がつてしまつ。これは質量保存の法則からも明らかのことだ。

しかし、彼女、ロズベルグは異なつた。このボディに相応しい体重ほど重くはなかつたのだ。まるで“重力に逆らつて自らの体重を日減りさせている”かのように。

「グラム、なにしてるのさー、早くさつとマンションに運ぼうー！」

サリドはグラムに精一杯の声で叫ぶ。何処と無くフランシスカを抱える腕が悲鳴をあげているのは氣のせいだろつか？

「……ああ、そうだったな！」

そう言ってグラムとサリードは来た道をまた戻つていった。

そしてそれを頭上から眺めるポイントでグレイペイヤードがいた。それには到底サリードたむこは気付く」とはなかつたが。

「…………まあ…………あそ」で来るとはある意味好都合であつたよ

グレイペイヤードは真摯な面持ちで語る。

「しかしながら……サソード・マイクロツヒフ……。あのお方のお氣に入りというから観察対象に含めておいたが……、なんだあれは？あれじゃただの……」

グレイペイヤードがその言葉を言い切る前に短い電子音が夜の街に響いた。

「はー、ひらりグレイペイヤード

グレイペイヤードは腰から携帯端末を取り出して耳に当てた。

『グレイペイヤード、ですね？ 任務の方へいかがですか？』

「…………レイシャリオ枢機卿、…………ですか？」

『質問に答えなさい』

電話の主は語氣を強めて質問を再び言った。

「「「」心配ねえりあとも、任務は無事完了いたしました

グレイペヤードは平坦のないのっぺりとした感じで答えた。

『そうですか。それは何より。これからも頼みますよ。総ての平和を求める人へ』

「総ての平和を求める人へ……」

そう会話を交わし、グレイペヤードの携帯端末は通信を終了した。

?

そのころ、レイシャリオはオリンピアドームの空港そばにある廃倉庫にいた。

彼女はその場所には似つかわしい感じであった。しかし彼女は嫌そうな表情を一つも見せずにいるのはやはり人の上に立つ人間ということなのか。

「枢機卿、」

不意に声がかかり、レイシャリオがその方を見ると見覚えのある人間の姿があった。

「ナウラス……?」

「左様で御座います」

ナウラスはレイシャリオがナウラスの姿を確認したのを見てからお辞儀をした。

「何の用だ……？ 作戦ならば差し支えなく行われていいはずだ」

「ええ、何も問題は発生しておりません。全てが順調です」

「……そういうことは報告はそれだけか？」

レイシャリオが冷静に尋ねると、ナウラスは静かに頷いた。

「そうか。……で、それだけなら携帯端末を用いればいいだろ？ どうして直接ここまで来た？」

「……私はそういうデジタルものが嫌いでして。やはりアナログで直接会つて伝えた方が確実ですからね」

「なるほど……。しかし何の事もなしに来ては困るな。私とて神殿協会の重鎮。捕まつてはならない、全世界に我々の真の目的……それが知られてしまつからな」

「（）心配なく、それなら……」

ナウラスはそう言って笑つた。それと同時にドサドサと黒装束をした人間が倒れていった。

「私めが始末しておきました故、」

「……どうか。それなら別に……という訳でもないだろ？ お前は自分の力に頼りすぎだ。少しは“ほかのもの”を信頼したらどう

だ？」

「すいません。さすがに枢機卿の『』判断とはいって、これは私のポリシー。例え死してもなおこれは変えることはなりませぬ」

「ふむ……。なぜ、そうなったのかは尋ねぬ信条ではあるが……、まあ仕方ない。とりあえず、報告』『苦勞だった」

そつレイシャリオが『苦勞』と何も言つことはないと云つたかのようになウラスは闇に溶け込んでいった。

### 3・8（後書き）

次回更新：01/13予定。

3・8が少し長めですが、切るところが見つからなかつたのでこの  
ような感じになつてしましました。誠に申し訳ありません。

日が明けた。次の競技までは半日を切った。

しかしながらフランシスカ、それにロズベルグは今や疲労困憊さら  
にロズベルグにとつては重体に近い症状だつた。

そんな中サリードとグラムは手術室代わりになつているフランシスカ  
のマンション、ベッドルームの前で祈るように座つていた。

「……大丈夫かな……。フランシスカにロゼ……」

サリードがまるで空氣に溶け込ませたように呟いた。

「大丈夫……だろ。とりあえず俺らにはなにもできない……。こう  
やって祈ることしか……！」

「解つてるよ……」

サリードは今までの消えてしまいそうな声とは対称的に、絞り出した  
かのように呟んだ。

「……けど、けど。待つているだけじゃむず痒くなるじゃん……。  
ただ辛くなるじゃん……」

サリードは悲しんでいた。何も出来なむず痒さに。もう少し早く現場  
に辿り着けば彼女たちの傷も少なくて済んだだつ、といつ悲愴感。  
全ての気持ちが、彼の中で戦つていた。その中で、彼の本当の思い  
が孤軍奮闘を成し遂げようとしていた。

「……ああ。解るわ。解るよ。けどな、俺たちには本当に何も出来ないんだ。祈るべき対象も居ないが、ここは祈ることしか出来ないんだ……！」

グラムは氣付くと、恐らしく自分の氣持ちは逆に身体が動いているのだろうが、サリードの襟を持って殴りかかるとしていた。

「…………」

グラムはそれに氣付くと、直ぐにサリードの襟から腕を放し、ソファに腰掛け、ただ頃垂れていた。

手術室代わりのベッドルームの扉が開かれたのは、それから直ぐのことだった。

「…………ラインスタイルさん。どうでしたか…………？」

ちなみに手術を行っていたのは健康管理を担うラインスタイル。本業だからかてきぱきと進んでいた、らしい。

「成功ですよ。あんなキズなのに、出血が少なかつた……。それもありますがね」

ラインスタイルは白衣を脱いで、笑つて告げた。

「良かつた…………」

サリードはほつと胸を撫で下ろし、そして微笑んだ。それほど、心配していたのだ。

「すぐ回復しますよ。まあ、あの薬を持つていて本当によかったです……。あれは本国には流通していない貴重なものですね」

それは使っていいのか？ とか思ったサリードとグラムであった。

そして、

午後4時。

射撃場には多くの人間が集まっていた。

「さあ！ 一日目は射撃！ ノータたるもの視力もよくなくては！ 動く的に狙つて、射撃していただきます！！」

昨日一日休んだのか、昨日と同じく元気いっぽいでのアイドルは司会をこなしていた。やはり彼女もプロなのだな、と観に来ていた観客にそう思わせた。

「フランススカたちは大丈夫だろ？ 一応ライズウェルトさんが軍に伝えておいてくれたらしいけど……」

「ああ……。流石に今は世界トライアスロンの真っ最中だ。ここで兵器を持ち込んで攻撃が他国の部隊にあたつてみろ？ 直ぐに戦争が始まつて、世界トライアスロンもパアさ」

サリードは、グラムがおおよそ何も考えずに言ったであらひ言葉を聞き、何かを思いついた。

「なるほど……！ 神殿協会はそれが目的なのか……！」

「グラム！」

グラムがサリードの異変に何があったのか尋ねようとする前にサリード本人から話を始めた。

「……どうした？ サリード

「もし、神殿協会の目的が僕の考えた事なら、もうすぐこの射撃場で何かが起きるはずなんだ！ だからグラムはここを見張つてくれ！」

サリードは語氣は強めながらも、他の人に知れではパニック状態に陥る人間が出てきて現場の混乱が予想されるとして、聞こえないように静かに言った。

「……そういうが、お前は？」

「僕はリーフガットさんに説明して休暇の返上を。あと、なんとか上に通してヒュロルフターの使用許可、更に皮相軍隊もね」

「……俺たちが慌てているうちにそんなに事態は深刻だったのか？」

「まあ、そうだね。とりあえず電話していくよ」

サリードはそう言って席を外した。

サリードは射撃場の外 なるべく他の人間に聞こえないように、敵が何処にいるかはわからないからだ に行き、端末を起動した。

『なんだ。サリード？ まさか私の休暇をぶち壊しにきたとか言つまいな？』

「申し訳ないですけど、その通りです。緊急事態が発生したもので『緊急事態？』 リーフガットはつづりそつな口調で、やつ言つた。

「神殿協会が“聖戦”と称して開戦宣言をしたのは聞いてますよね？」

『まあ、一応な。そういうのは軍の特別連絡網で知られるからね。で、それが？』

「奴らの目的が判明しました。確証は取れてないんですけど、多分これで合つてるかと」

『……話せ』

リーフガットは今までの口調を改め 軍人としての、リーフガットになり、言つた。

「彼等の目的は『オリンピアドーム』の破壊と殲滅です」

サリードは唐突に話を開始した。

『……、』

リーフガットは何も返さなかつた。暫く、無言の時が流れた。

『……なるほど。ならば、益々開戦宣言を承諾、相互の宣言を行はずしての戦争としての処理』を行つてはならないな』

リーフガットが暫くして、サリードの報告に答えた。

『……いえ、ただこのままでは開戦宣言を相互承諾しない限りでは選手への妨害も続くことでしょう。今回の襲撃で、それは明らかになつたことです』

『それはお前の言つ通りだ。だが、どうすべきだ？ 開戦宣言相互承諾を行わなくとも駄目、相互承諾を行えばあちらの思つ壇……』

リーフガットはサリードに尋ねた。

『……開戦宣言を明日、行つてくれませんか。ただし、戦場はオリンピアドーム内に限り、資本主義国と社会主義国との戦いに一団体として神殿協会も参戦を行つ……といつことだ』

『ん？ しかしそれでは、社会主義国と戦う必要がないと思つが？ 戦うのは神殿協会だけで充分だらう？』

『……いえ、それはどうでしょ？ たしかに本当の敵は神殿協会のまです。……ですが、僕にはそつは思えないんです』

『……共謀がいる、と？』

「はい。たぶん」

『……なるほど。確かにその可能性も考えられる……。解った。明日の正午開戦、資本主義国と社会主義国及び神殿協会の戦争、でいいんだな?』

「はい。それだけ解つてくれれば結構です」

そう言ってサリードは通信を切った。

「ふう……。一先ずこんなところでいいか……」

サリードは通信を終えるとひとり、溜め息をついた。

「ワアアアアアア」

その直後に背中の方にある射撃場から歓声が沸き起つた。

「おつと、急いで見に行かなきやな

そう言ってサリードは振り返り、射撃場の方へと走つていった。

「遅かつたな。何の話をしてたんだ？」

開口一番、グラムにはそんなことを言われたのでとりあえず適当に  
だが適当には思われない実に微妙なバランスの言葉を言つておいた。

「ああ。ちよつと話し�込んだじゃつて」

「そりが。とりあえず今オープニングが終わつたところだ。歓声が  
外まで聞こえただろ?」

「ああ、そりいえば、確かに」

「少しほ言葉に抑揚をつけて喋りやがれ」の馬鹿が

「ワアアアアア」

再び歓声が聞こえ、サリドたちはそちらの方を見る。

ちよつど選手達が入場を開始していた頃で、彼等の目は現在優勝の  
最有力候補であるフランシスカとロゼに向けられていたようだ。彼  
女たちは多少の恥じらいはあるものの、昨日の“あれ”をものとも  
せず、事情を知らない人間にはそれを感じさせないほど、そこに元  
気に立つていた。その姿を見て、サリドたちはまたほつと胸を撫で  
下ろすのだった。

?

その頃。どうとも形容し難い空間にて。

机が置かれ、椅子と人間の代わりに、柱のよつた光の棒が7、8個置かれていた。

「……報告をしてもらおう」

一番端の『F A 01』と書かれた光の棒から声が響いた。

「ライジャック、まず君のオリジン私有化について、理由を聞かせて貰いたいな」

ライジャック、と呼ばれた人間は光の棒に囲まれ、鼻をヒクヒク痙攣させた。

そこにいたのは、女性だった。しかし彼女は一糸纏わぬ裸体になつており、紐で体を縛られていた。

「……なあ、ライジャックくん。我々もこうはしたくないんだ。君だつて子供を産みたいだろ？ 幸せな人生を送りたいだろ？」

「……オリジン私有化は……私も確認して……いません……」

「ライジャック！！」

「もういいだろ？、リリーシャ」

FA01を制したのは隣にいたFA02だった。

「……さて、ライジャックくん。今回の話は仕方ない。保留としよう。……しかし、次の作戦……。よもや忘れてはいまいな？」

「……ええ、解っています。必ず、仰せのままに」

「頼むぞ……。総ての平和を求める人へ」

「総ての平和を求める人へ……」

ライジャックはFA02の言葉を復唱した。

それを見計らつたかのように周りの背景が、消えた。

ライジヤックは紐をほどいてもらい、服を着るためにシャワーを浴びた。その時に紐のわざくれにより痛んだ皮膚が悲鳴をあげる。

「……っ……」

ライジヤックは指を下半身の方へと持っていく。臀部、陰部、太股、脹ら脛に踝。全ての部位がわざくれの接触による痛みと赤みをもつていた。

「……いつまで続くのやう……。組織のリーダーもいいことばかりでは……ない、な」

ライジヤックは一言呟いて、鼻歌を混じらせながらシャワーで髪を洗い始めた。

+

シャワーを終え、バスローブを着て、空を眺めた。そこに広がっていたのはつい最近あつた國の役人によるクーデターと“表向きに伝えられている”ものの残骸と復興をしてきた区々だった。

彼女は思い立つたかのように本を取り、よんだ。タイトルは『レイザリー正史？？？』と書かれていた。

彼女はライジヤック・ポーリオ・レイザリーといい、レイザリー王

国第30代国王であった。

?

射撃に関しては特筆するところもなく普通に終わってしまった。強いていうなら、他の人間があつという間に終わってしまったのと、フランシスカやロゼがあつという間に終えてしまつたりしたので、終了が30分程早まつた、といつぐらいか。

「あつとこ間に終わつちまつたなあ」

「まさかそこまで速いだなんて。ガンマンも吃驚だよ<sup>びっくり</sup>

「……まあ、フランシスカもロゼさんも凄腕のノータなのでしう？ ならばそこまで言つことはないんじや……」

二人の会話にラインスタイルが割り入つてきた。

「あれ？ ラインスタイルさん、どうしたんです……？」

「……姉の付き添い」

それを言つると同時に能天氣な姉、ライズウェルトがラインスタイルの後ろから挨拶する。

「昨日は災難だつたよつね？」

ライズウェルトは開口一番でサリードたちの身の回りに昨日起きたこ

とを労つた。

「いやあ……、はい。まあ、ひどかったです」

「世間話をはじめたてでござりて、報告を行つわ

「世間話を始めたのはあなたですよね……？」

サリードは溜め息をつきながら、呟いた。

「一回しか言わないから驚かないで、よく聞いて。実はAMWAD<sup>アンワ</sup>EM<sup>エム</sup>が施行決定となりましたが、その施行開始は今晚21時に変更となりました」

「今日許可を求めてその日中に開戦とかどんだけ暇なんですか」

サリードはライズホールトの報告にシシコミを入れながらも緊張を走らせ始めていた。

AMWADEM……Ask Make a War on DEC  
l a r a t i v e s t a t e m e n t M u t u a l の略でその名の通り、『開戦宣言相互承諾』の略である。上手く略せていいのがちょっと惜しいところではあるが『開戦宣言相互承諾』だと少し長つたらしことこもあるので、このようになつている。

「ちよつと待てよ。21時といつたら……、あと数時間もねえぞ?  
！観衆とかはどうするんだ？」

「そこは安心にお守りします。ノータも数名来ますし、第三世代のヒュロルフタームも見れる、貴重なチャンスと思った方がいいと思いますよ？ 良く考えようとも悪く考えようともどうせ開戦宣言相互承諾が施行された今、私たちに戦争を回避させることなんて万がひとつでも不可能だと思った方がいい。……」これは軍からの報告ではなく、私個人からのアドバイスよ」

第三世代のヒュロルフタームをサリードとグラムは以前にも見たことがあった。フランシスカに至っては操られてはいたものの、それを

操縦した人間でもある。

ヴァリヤー・リオール……グラムの父親が謀反を起こし個人所有していた第三世代のヒュロルフターMを用いたクーデターがあった。

サリドとグラムはそれから首都を守るため、健闘し、第三世代を無事凍結、パイロットを管理下におくことに成功した。

「……第三世代……まさかそんなに早く完成するものなんですか？ 確かヴァリヤーが個人所有していた一機だけだったような……」

「それが、何処に隠してたのか解らないけどレイザリーは秘密裏にさらに一機制作していたような。まあ、国の情報は鵜呑みにや出来ないから、きっとまだまだあるんだろうけど」

ライズウェルトは呟くように言った。

そして、

「そ、報告は終わり。残りの時間は……あと7~4分程といったところね。さつさと神殿協会なんかぶつ潰してしまいましょ。私たつてさつさと休みたいからね？」

そう言つてライズウェルトは振り返り、フランシスカのマンションがある方へ歩いていった。

### 3・14（後書き）

次回更新：01/18予定

ストックが予想以上に溜まつたので6話分更新しました。次回もこれくらい更新できたらいいなあと思つております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6817w/>

---

FORSE

2012年1月13日21時53分発行